
摩れた歯車

tkkosa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

摩れた歯車

【Nコード】

N9491C

【作者名】

tkkosa

【あらすじ】

恋愛によって狂いだした歯車はいじめという最悪な結果を生み出した。揺れ動く心内と度重なる葛藤の中、その真実に迫っていく。

第0話

「先生、私が行方不明です」

黒岩嘉乃の発言に坂本はたびたび頭を悩ませられる。簡明直截な表現にするのはいいが、

説明すべき文章の節々をあまりにも省略しすぎていて、聞き手としては理解に苦しむ。最

近の高校生にはこういう表現が波及してるのかと初めは考えたが、そんなことはなかった。

単語の簡略化に面白味を覚える彼らにとって、そんな迂遠な方法は即刻却下されるはずだ。

彼女がこんな文法表現をするようになった端緒やそれによって黒岩本人に何があるのかと

いった思惑は一切分からないが、坂本は彼女の発言のたびにその言葉にこめられた「省略

された節々」を言及しなければならなかった。

「行方不明って、黒岩が？」

はつきり言って、こんな回りくどいやり取りに興じるほど教師は暇じゃない。だからと

いって、黒岩の扱いを等閑にすることはできないし、怪訝そうな態度をとって黒岩の忌諱

に触れるようなこともできない。そんな対応をとることは、人一倍傷つきやすい彼女の矜

持にひびを入れてしまうだけだ。僕にできる最善の策は、喜面を保って彼女から送られる

難儀な世界観を聞き入れること。黒岩のように自我の世界に浸ってしまう人間は、そこで

形成されていく望みもしない悪循環な己の心的状況に危機感を抱き、そこから今すぐにで

も抜け出したいとその身体を抱え込んでいる。そんな靄を吐き出したい、そして新しい澄んだ空気を吸い込んで未知なる未来へ飛び立ちたい、そう願っている。そんな切な思いで僕に話しかけてる、がんじがらめになってる身体のロープを解いてもらいたくて。別に話すのは僕でなくてもいい、自分の言ってることを素直に聞き入れてくれる人であるなら誰でもいいんだ。だから僕はそう対処する、それがこの歪な対話を早くに終わらせる近道だから。

「さつきから探してるのに見つからないんです」

何を言ってるんだ、この子は。君なら、ずっと君のところにいるじゃないか。昨日も、

今日も、明日も、君が生まれたときから。

「探すことなんかないよ、俺にはいつものように黒岩が見えてるよ」
理解に苦しむ彼女の言葉は、当然に返答にも困る。坂本には黒岩の一言をもった気位

の高い言葉の真意を読み取る柔軟な懐を持ち合わせていない。彼が黒岩に返す言葉は勘で選ぶ、それが彼女の中でどう認識されるのかを考えて。

「本当ですか、どこにいるんですか」

黒岩と会話を続ければ続けるほど、彼女の独特な世界観に引きずりこまれていく。このやり取りは長引けば長引くほど、僕に損でしかない。難事が巨細に山積していき、そいつらが縦横無尽に僕の頭の中を駆け巡っていく。僕の細胞を一つ一つ突き壊しては、それに快感を記憶させる。

「ここにいないじゃないか」

そう言って、黒岩の右の肩にポンと手を置く。それによって、他人に触れられることに

よって、彼女は自分自身を把握する。いつのまにか忘れていた自分の身体がちゃんと自分

のところにあることを把握する。その手が自分の手であり、その足が自分の足であり、そ

の身体が自分の身体である、と。私みつけた、私ここにいる、私は生きてる、そうやって

自分と自分を再び繋ぎとめる。

「・・・ここにいたんだ、私」

安心したように黒岩はフツと息を一つした。その顔色から、彼女が坂本をからかってふ

ざけてるんだという説は消える。自分を発見できて、心の底から安堵の表情を浮かべてる

彼女を疑う理由などない。黒岩は本当に彼女自身を見失っていた。離れてしまった自分と

再会し、二度と離れないようにギュッと自分自身を抱きしめている。傍からみれば滑稽な

場面に映るだろうが、本人はいたって真面目だ。彼女はそうでもない自分と自分に、

そして現実留めておけなくなってしまうから。

「先生、ありがとうございます」

黒岩は少しだけ口角を上げて、僕に礼を言った。もう、現実世界に自分を引き戻すこと

ができたようだ。よかった、これで僕は御役御免だ。

「松原先生はいなかったの？」

「いたんだけど・・・私の言ってることが分からないみたいで」

それが普通だと思う、という本音は喉元で殺しておいた。

「それで、俺のところに来たんだ」

「すいません、先生なら分かってくれそうな気がして」

別に謝らなくていいんだよ、と坂本は返した。ただ、またいつでも分かってもらいたい

ときは来ればいい、とは言わなかった。坂本は黒岩のような生徒とは一線を引いておきた

かった。彼女とあまり近づくのは危険だ、下手に親しくなって生徒達の口の端に上ってし

まえば、彼の教師としての立場が相殺されてしまう。人間の本能的な感覚でそう判断した。

「じゃあ、俺は行くから」

「はい、ありがとうございました」

そう言って、僕はその場を去った。無難な一幕だったと我ながら思う。馴れ合いは好ま

ないにしても、もう少し身を寄らせてあげることでも可能だったのに。

坂本が全てに気づくのは随分と後のことになる、「後のまつり」

という言葉が当てはまる

くらいに。祭りの後に引かれてきた山車のように、何もかもが手遅れになるまで気づいて

やることができなかった。僕に救いを求めてきてくれた人達を蔑ろにしたがために、見な

くてもいい現実の目の当たりにしなくてはならなくなった。

真実はいつも哀しく空しい。そこにある楽しさなんて上辺だけの唐変木で、その後に残る

ものは切なさでしかなかった。

第1話 その1

黒岩嘉乃が亡くなった報せを聞いたとき、窓外では暗闇が世界を包んでいた。その闇が黒岩の生命ごと、広大な空の色彩を奪ってしまったように思えるほど。星は瞬いてなかった、ただの暗黒の空がどこまでも限りなく続いている。黒が襲い掛かってくる、大きく起伏したうねりが僕のほうへと押し寄せてくる。抵抗はしなかった、僕はその波に身を委ねるように流されることしかできなかった。身体動作は停止し、頭の中が真っ白になり、明日緊急会議を開くとか、主任の連絡を一通り聞き終えて電話を切ると、しばらく僕はその場を動くことができなかった。

今日も彼女から無理難題をふっかけられたばかりだったのに。

「先生、私のことをずっと見ていてくれませんか？」

職員室に戻ろうと理科室を出たところを黒岩につかまった。この言葉を投げ掛けられた

とき、正直僕は告白をされたのだと思った。

黒岩が僕に好意をもっていることは知っていた。彼女の平生の態度や言葉から読み取れ

ていたし、アプローチに近いことも何度かされていたから。厄介な展開だと思ってた、要

注意人物に好意を抱かれるなんて。担任の松原先生を除けば、他の教員たちも彼女とは距

離を置こうとしていたため、黒岩に対しては婉曲的な接し方をする

ように務めていた。頼

みの綱といえる松原先生もクソが付くほどの生真面目人間で、その思考回路では黒岩の一

家言をもった言葉たちを理解することは不可能だった。そんな駄目な大人たちに愛想をつ

かし、僕のところへとやってきた。まだ赴任して間もない僕なら、変に四角張った意識も

なく接してくれると踏んだらしい。僕も黒岩の思う「駄目な大人」の一人ではあったのだ

が、彼女の醸し出す異様な世界観を僕は他人事と退けることをしきれなかった。本音はそ

うしたくてたまらないんだけど、断崖絶壁に進もうとしてる彼女にGOサインを出すよ

うな真似はできなかった。こうして、僕は「一線を引きつつ、疎遠にはしない」という形

を黒岩に続けることにした。

「それは無理だよ、黒岩をずっと見るなんてできない」

そう返答した、良心の呵責を感じたが仕方ない。

「・・・誰かに見ていてほしいんです、私がちゃんといってるってことを・・・」

黒岩は切迫したような顔で僕を見ていた。僅かばかりだが、息遣いの速さも感じ取れた。

その様子を僕は告白からくる高揚感だと思ったが、今になってみれば違っていた。黒岩は

僕に助けを求めているのかもしれない。告白なんかじゃなく、脆弱になった精神を振り絞

って発した黄信号。もうダメです、その言葉の代わりに点滅させた黄色の信号。

「黒岩、先生にとって生徒はみんな平等なんだ。黒岩をずっと見てたらさ、他の生徒を見

ることができないだろ。それは不平等になる、だからそれは無理なんだよ」

なるべく黒岩を傷つけないよう、柔に言った。黒岩は何も言わずに「失礼しました」の代わりの礼をして、その場を去っていった。

リビングのフローリングの床に座り、僕は彷徨っていた。黒岩の言っていた「私が行方不明」という表現とは違うものだったが、僕は僕の中で彼女の言動を咀嚼しては真意をつかめずに迷うだけだった。久遠の人生などありはしない、そんなことは重々に承知の上だ。

ただ、その早期すぎる死に自分が少なからず絡んでることを考えると、取り返しのつかない喪失感に侵されて居たたまれなくなってしまふ。駄目に重複され

た大人たちに呆れ、最

後に訪れた僕のところには何かしらの居場所を求めたのではないか。

福音を待っていた彼女

の針の糸を通すほどの心の隙間を僕が埋めてしまったのではないか。探してはあぐねて、

解答を得られずに時間は無為に過ぎていった。

☆

その日、学校では臨時集会が行われた。教職員には夜間のうちに連絡網が周っていたが、

生徒たちにも黒岩嘉乃に関する一報は伝わっていた。蜘蛛が巣に気味悪い糸を張り巡らせるように異常な速さでそれは広まり、こういうときの噂という実のなる木の侵食の加減の

怖さを思い知らされる。

体育館に集まった生徒たちの様子は、「それぞれ」という言葉がよく当てはまった。気落

ちとまではいかなくても神妙な顔でいる者もいれば、彼女の死について詮索するようにこ

そこそ喋ってる者もいるし、この場に不適切といえるように笑いを浮かべてる者もいた。

事が事だけに大声を張って騒ぐような阿呆者はいなかったが、例に倣ったように静まりかえった空気ではなかった。

その空気とは違い、臨時集会は例事をなぞったように行われた。

黒岩嘉乃の自殺の現場

に関する報告、それに対する学校側の対策、どれも。「今後このようないことが決して起こら

ないようにしなければなりません」だとか、校長の言っている話もどこかで耳にしたよう

な言葉を羅列しただけのように聞こえる。横から啜り泣く声がした、坂本の左では松原ひ

のきが顔を俯けてハンカチを手にしていた。教え子が自ら命を絶ったんだ、彼女が悲しみ

にやられてしまう気も得心できる。一晩中泣き腫らし、衰弱したように気力をなくしてい

た。松原が朝に職員室に現れると、周りは気を遣って励ましの言葉を並べた。でも、彼女

にはそんな言葉たちは一切通じず、何もせず落ち込んでるだけだった。

その日の授業が終わると、主任と松原と坂本の3人で黒岩嘉乃の通夜に向かった。部活

終わりで諸々の雑用を終えてからだだったので、時刻は既に19時に

なっていた。到着する

までの間、主任から通夜に関するあれこれを教わった。坂本は友人の父親の通夜で経験が

あったが、松原ひのきは通夜自体が初めてらしい。重い足取りを運ばせて黒岩の自宅であ

るマンションの一室に着くと、もう一通りの流れは終わっているように家での中には数人の

人間しか見当たらなかった。遺族、近親者、そして焼香に訪れている数人。校長と教頭は

早々に訪問していたようで、来訪者の記帳の中に名前が書かれてある。坂本たちも記帳を

して家の中に入っていくと、一人の生徒と擦れ違った。1組の沢川花、黒岩と同じクラス

の女子生徒。制服のままだだったので、学校から直接ここに来たのだろう。「沢川さん」と主

任が声をかけると、沢川は3人に目線を移して一つ礼をしてそくさと出て行ってしまった。

遺族に声をかけ、焼香を終えると坂本たちは黒岩嘉乃の自宅を後にした。その間、松原

ひのきを主任が言い諭すように慰めていた。

「松原先生は担任なんですから、教師がそんな泣いてばかりでどうするんですか」

「明日も学校はあるんですから、生徒に動揺を与えないように毅然としてください」

松原は黒岩嘉乃の通夜の席でも泣いていた。それをなんとか堪えようとしていたので、

なんともいえない変わった泣き方になっていた。その余韻は帰路についている今も続いて

いた、定期的に彼女が鼻を吸る音が鳴っている。駅舎まで着くと、

反対方向へ帰る主任と

別れたが、「じゃあ坂本先生、松原先生をお願いします」と言い残された。そんな面倒くさ

いこと必定な使役を与えられても困る、とは言えずに素直に請け負った。

第1話 その2

「大丈夫ですか？」

家に向かう電車内で坂本は気遣いの言葉を松原に言う。

「はい、大丈夫です」

坂本の方へ顔を向けず、俯いたまま返答は為された。坂本は松原ひのきの降車駅で一緒

に降りた。坂本は次の駅が最寄り駅だが、2人の家は徒歩20分ほどの距離なので松原を家まで送ることにした。

「すいません、送ってもらって」

「いえ、主任にもお願いしますと言われましたから」

駅からの帰り、電灯が灯す疎らな光が照らす夜道を2人は歩く。

黒のスーツを着た男と

女が暗い夜道を歩く、画一的な情景はその色味が黒というダークカラーであることが更に映えさせた。

「坂本先生、私は教師でいいんでしょうか？」

松原は坂本に顔を向けずに言った。

「いいんですよ、弱気にならないでください」

松原の精神が病んでる状態だったために投げられた言葉だと思い、坂本は宥めの言葉を

返した。

「私は生徒を1人亡くしてしまうような先生ですよ、正直教師失格だと思います」

松原の言葉はどんどん沈んでいく、それは底の见えない海であって無限に下降を続けていきそうだった。

「そんなことありません、黒岩は難しい生徒でしたから。他の人が担任でも変わりません

でしたよ、むしろ松原先生はちゃんと正面きって向き合おうとしていたんだから良い担任だったんではないでしょうか」

暗闇にある神々しい火影のように、松原の沈む心に一点の灯りを灯せないかと坂本は言

葉を投げかけた。

「でも向き合えませんでした、私がバカなせいだ」

「バカじゃないですよ、黒岩が他とは少し違ってたんです」

生真面目な松原、異色な黒岩、交わらない。お互いが向き合っても、元の素材が違うの

だから無理な話だ。松原に罪はない、黒岩にも罪はない。

「何がいけなかったんでしょうか、私の」

「いけないところなんかありません、松原先生はそのままであればいいと思います」

「でも、いけないところがあるから今回の事が起こったんじゃないでしょうか」

「今回の件は稀な例だと思います、こんな事が年がら年中至るところで起こってたら日本は滅びますよ」

虚空をつかんでは闇の森に迷い込む松原はちよつとやそつとでは転び倒れた体を起こせないようだった。坂本は次第に嫌気がさしてきた、いくら呼び起こそうとしても耳も傾けようもしない松原に。

松原ひのきは失意の渦に飲み込まれたように、ごったがえす頭の中を整理できずにいた。

いくら周囲が優しく接してくれようと、所詮は他人事、自分のこと

じゃないから言えるんだと卑屈になっていた。夜道を照らす街灯も、市街地を走る車の群れも、夜風に軽くなびく雑草も、全てはいつもどおりで、彼女の心の傷をさすってくれるようなものはなかった。周りから掛けられる言葉たちもどこかわざとらしくて嫌だったし、そんな好意を嫌に感じてしまう自分にも冷めていた。

「主任も言っていましたけど、明日も学校はあるんだから落ち込んでばかりではいけません。

そういうの、結構生徒は敏感に感じ取るものですから」

左隣で気遣いの言葉を掛けてくれる坂本にも同様の思いが込み上げていた。どうせ他人

でしょ、他人だからそんなことが言えるんでしょ、と。私になつてみればいい、この苦しみを味わってみればいい、と。

「私はきつと教師に向いてないんです、私なんか辞めてしまえばいいんです」

半ばやけくそで松原は言い捨てた、どうせまた同じような慰めの言葉が返されるんだろうと踏んで。

「・・・じゃあ、辞めればいいんじゃないでしょうか」

「えっ？」

松原にとって余りに意外な返答が坂本から為された。悲嘆の渦中にいる人間を急坂から突き落とすような、そんな人を人とも思わないようなことを言われるなんて思いもしてなくて、松原は目を丸くさせて坂本の方を見た。坂本も松原のことを見ていた、その顔色にさっきまでとなんら変わりはない。

「・・・何でそんなこと言うんですか？」

「辞めたいなら辞めた方がいい、そんな人に学校にいられても困ります。そんな先生に教

壇から授業を教えられても、覚えられるのは教科書に書かれてることでだけです。松原先生、

僕らが生徒に出来るのは教科書に載ってることを教えるだけではありません。うまく言葉

にできないんですけど、それ以外のものを教えて育ませるのが教師ではないんでしょうか。

それが教師の役目であり、学校の役目なんだと思います」

松原は坂本の言葉に目をポツンとさせて佇んでいた。何か、自分にすごく親身になって諭してくれていると感じた。

「つまり、教師はそれが出来る人間でないといけません。松原先生みたいに、自分を卑下することしかできない人には無理だと思います」

坂本の言葉はどれも的を得ていて、反論のできない松原は感情が裏返って憤りを憶えた。

坂本が自分のことを思ってくれてるのは分かってるけれど、自分だってそれなりに

今日まで頑張ってきたのに、それを否定されるのは腹立たしかった。

坂本は「今日は失礼

します」とだけ言い残し、松原を置いて帰って行く。取り残された

松原は、坂本にされた

仕打ちを怒りにして自分の中で爆発させた。何よっ！、何よっ！、何よっ！、と身体内で

連呼させて帰宅の途につき、自宅に着いても家中の小物を壁に投げつけて浮かび上がってくる怒りを冷ました。

「どうせ、私は駄目な教師よ！」

「そんなこと十分わかってるんだから、傷口をほじくるようなことしないでよ!」

松原の中で、いつのまにか感情の矛先は坂本に変わっていた。そして、全てが治まったころには、黒岩嘉乃の一件で沈んでいたことすら忘れていた。

☆

翌日、職員室に現れた松原ひのきには、何か気迫立ったような面持ちさえ見えた。

「おはようございます、おはようございます」

そう笑顔を振り撒く彼女の姿は、昨日の同時刻の姿と180℃近く違うものだった。

「おはようございますっ!」

松原のツンとした声高な挨拶に、坂本は多少たじろんだ。おそらく、松原は今日も昨日

と同じように魂の抜けたような空っぽの身体で来るのだろうと思っていたから。

「・・・おはようございます」

そんな予想とは正反対に、松原は坂本の右隣の席でテキパキとした動作で仕事をこなした

ていく。黒岩のことなんか吹っ切れたように、勇壮な態度で坂本の胸の内に意外性を与えた。

「今日、随分と元気ですね」

「おかげさまでっ!」

授業に向かうまでの廊下で松原を前に見かけて話しかけると、松原は依然としてツンとした様子で返答をしてきた。

「なんていうか・・・怒ってますよね?」

「はいっ、坂本先生があんなひどい人だと思いませんでしたっ！」

松原の態度に、思わず坂本は笑ってしまう。

「何がおかしいんですかっ!？」

「いやっ、何でもありませんけど」

「1人で泣いたり怒ったり、変な女とか思ってるんでしょ!？」

「いえっ、かわいらしいなって思っ」

松原の純朴な性格に、坂本は好感をもった。自分には持ち合わせ
ていない、馬鹿正直で

真っ直ぐな性格を羨ましいとも思っ

「からかわないでくださいっ！」

松原も同様だった、他の「なんとなくの言葉」を言い置く教師た
ちと違い、あえて重

言葉をくれた坂本に憤りとともに好感ももっていた。

第2話 その1

黒岩嘉乃が自宅のベランダから飛び降りたのは、昨日の夜半とされた。両親が彼女を最後に目にしたのは夕食を食べた22時過ぎ、マンションの下で赤くなった彼女の姿が発見されたのが2時半ごろ、その4時間半ほどの間のどこかで自室の窓から身を投げた。黒岩はコンクリートに頭から打ち落ちて、ほぼ即死に近い状態だったそう。

ただ、その自殺にはいくつかの疑問点が残されていた。第一にかぶのは、黒岩が命を捨てた理由。地味で目立たない、誰かと話してるのも目にしなかったが、取り柄といったら勉強ぐらい。そんな子だとしても、命を自らの意思で放るのだろうか。子供から大人へと渡る過渡期、これからというときに。

「あれじゃないですか、生きるのに疲れたっていう、よくテレビとかで聞きませんか？」

坂本の左隣の席で、長稲保が言った。彼の言葉はいつも冷静だ、自分を崩すことをしない面は坂本に似てるが、坂本の感情的に陰に籠るところに対し、彼は精神的に陰に籠るところがあった。長稲は有名大学を卒業し、商社に就職せずに教職の道を選択した。アニメオタクであり、それ特有の空気感が香水のように身体に降りかかっている。眼鏡の奥の顔のマスクは上々なので、同じ類の趣味をもつ学生には人気がある。

「そうなんですかね？」

「そうでしょう、黒岩嘉乃の中味は随分と異形に構成されていましたから。彼女は安穩と

いう言葉を知らないんです、仮に知ってたとしてもそれをうまく使いこなせない。心の門

扉を開こうとせず、ただ自分で作り上げた悪循環にひたすら彷徨うことしかできない。こ

んな都会に足を立ててるのに、中味はどこか郷にでも飛んだように離れているんです。

いくら僕ら教師でも、頑なに向こう側から施錠されてはその扉を開けることは出来ません」

そう言って、長稲は昼食のコンビニの幕の内弁当に意識を戻す。

「僕ら教師が彼女の閉ざした扉を開錠させることは出来なかったんでしょうかね？」

「難しいでしょうね、黒岩嘉乃は極度の出不精ですから」

そう言い残し、長稲は食べ終えた弁当の空箱を捨てに席を立った。確かに、出不精の人

間を外に出すのは容易ではないかもしれない。ただ出不精の人間には2種類いる、本当に

我が家だけが憩いの場であると居つく者、そして家の中に籠りながらも本当は外界に出た

いと思ってる者。黒岩嘉乃はどっちの人間だったのだろうか、本当に心の中に閉じこもっ

てしまいたかったのか、本当は扉を開けて蝶のような空を大きく羽ばたきたいと願ってい

たのか。今になってしまえば、本人から正解を聞くことはできない。しかし、生前の彼女

の所作を思い起こすと、そこに近づけそうな気がした。

黒岩嘉乃の発言に坂本はたびたび頭を悩ませられた。

「先生、夢って叶うんですか？」

4組の授業終わり、職員室に戻ろうとしたところをつかまった。

黒岩はいつものように

本人加工を施してるようなボソツとした籠らせた声で訊いた。黒縁の眼鏡、肩まである黒

髪、規則通りの丈のままの制服、白のハイソックス。こういう陰気な雰囲気醸す生徒の

模範像のような出で立ちだ。校則を守ってくれるのは学校側としてはいいのだが、見てい

て個性も面白味も感じない。

「夢か・・・それを信じ続けて努力を怠らなければ叶うんじゃないかな」

どこかしらで何度となく聞いてきたような言葉を返す。

「じゃあ、先生は夢は叶ったんですか？」

夢、僕の夢って何だったっけ？

「・・・先生は特に夢ってなかったと思うな」

「それって、ただ毎日を単調に過ごしてるだけってことなんでしょうか。そういう人生って楽しいんですか？」

正直、痛いところを突かれた。黒岩の言葉は、坂本の心の中に眠らせてる定義そのものであったから。はっきり言って、坂本の人生の波に津波は少ない。

警報はおろか、注意報すら滅多に喚起しない。

「どんなに努力しても報われない、結果の出ない人もいます。そういう人は、何で夢が叶わないんですか？」

波状攻撃のような黒岩からの言葉たちに、坂本は息をついて迷っ

た。思考回路の循環が

進捗する黒岩に対し、坂本はもうお手上げの状態だった。

「物事は結果だけじゃないんだ、その頑張った過程の方が何倍も大事だったりするんだ」

また、どこかしらで何度となく聞いてきたような言葉を返す。

「・・・綺麗言だと思います、実際の世間なんて小さくて冷たい人間ばかりです・・・」

そんな正論はそうそう通らないはずですが、と言って黒岩はその場を離れていった。この

頃の僕はまだ黒岩への対応策に気づいてなかったため、面と向かい合って会話を繰り返し

ては毎度のように負かされた。黒岩嘉乃の対応策、喜面を保って彼女から送られる難儀な

世界観を聞き入れること。彼女と言い合っても無理であり、僕であっても交わることは少ない。



あのとき、黒岩嘉乃が僕に訊ねた「夢って叶いますか？」という言葉。黒岩は何か夢が

あったのだろうか、そしてそれを僕に聞いてもらいたかったんだろうか。彼女の中には未

来へ繋がる道があり、それを辿ろうとしていたのだろうか。それなら、何故に彼女はそれ

を途中で遮断させるように命を落としてしまったのか。物事を暗に考える傾向があったに

せよ、そこまですることはないはずだ。何か、何かそうする理由でもあったのだろうか。

第2話 その2

「すみません、お呼び立てしちゃいました」

家から30分弱ほどの距離にある、いかにも街角にあるといったような喫茶店に入ると

松原ひのきの姿があった。黒の礼服に身を包み、僕を見つけると立ち上がってそう言った。

「いえ、別に何をしてたわけじゃなかったんで」

そう言うと、2人とも席についた。店内は内装からテーブルや椅子や小物にいたるまで

レトロにまとめられており、その空間にいるだけで懐古的な気分に浸らせてくれそうだった。

た。店も60代と思われる老夫婦だけで切り盛りしてるようで、お爺さんはキッチンで仕

込みを、お婆さんはレジで売上の計算をしていた。取り合えずと、

僕はお婆さんにブラッ

クコーヒーをオーダーした。

「良い感じのお店ですね」

「はい、休日はいつもここに来るんです。ここにいますと、毎日の切羽詰った喧騒から解放

されて気を落ち着けることができます」

松原の言葉は、坂本には十二分以上に理解できた。こんな場所に数時間といれば、そこ

が都会の中であることを優に忘れられ、不穏な粒子の漂う不安定な枠組みの骨子に触れる

ことなく、有意義な時間を過ごせることだろう。

「こんなこと言うと失礼ですけど、松原先生っぽくないですね」

松原の感情の軸に差し障らない程度に笑いを含めて言ってみた。

「・・・本当に失礼です」

松原は少しムスツとして、不躰な様子で返した。

「松原先生ってもっとキャピキャピしてそうっていうか、休日だったら遊園地とかで絶叫

マシーンにでも乗って憂さを晴らしてそうに見えるんで」

「それもしますけど、こういうところでゆったりもしたいんです」

松原は口を尖らせたまま返答する、きっと彼女は物事を根に持つ性格なのだろう。

お婆さんが持って来たブラックコーヒーがレトロ調のテーブルに置かれた。そこから白

く立ちのぼる湯気は、上に進むほど薄くなってはやがて消えてしまう。僕にはその様が人

間の末路に思えた、年を重ねるほど生気が薄まってはやがて消えていく。明日、明後日の

自分は想像できようと、老後の自分なんか全くもって想像なんかできな。キッチンにい

る老夫婦だってそうだったはずだ。僕と同世代の頃に今の姿を予期などしていない、自分

に老後というものが存在するのかわかさえ分かれなかったろう。松原ひのきが飲んでいたのはココアだった、湯気もなく熱の乏し

さからしてオーダーから20分ほど経っていることだろう。

「話なんですけど、実は・・・黒岩さんのことなんです」

松原が開口した、内壁に掛かっていた古時計は21時過ぎを指している。20時30分

ごろ、坂本が自宅でくつろいでいたところに携帯の着信音が鳴った。送信は松原ひのきか

らで、話があるんですけどといったぐあいここへ呼び出された。わざわざ待ち合わせを

するということは学校では話しにくい用件であるのは判別でき、一体何が起こったのだろ

うと坂本は思っていた。

「黒岩・・・葬式で何かあったんですか？」

今日は黒岩嘉乃の葬儀が行われており、松原もそこへ出席していた。葬儀といっても、

彼女はまだ学生であつたし、学校でも自分を閉ざす性格だったので昵懇した関係も乏しく、

参列者は親族が大体だったそうだ。

「いえ、お葬式はスムーズに進行してたんですけど」

松原の目線が少し下がり、僕のそれと合わさる線から外れる。

「私が帰ろうと席を立ったら、黒岩さんのお母さんに呼び止められたんです。ちょっと話

があるって言われて、外の誰もいないところに連れていかれて・・・

」
松原の目線は上がって僕を捉えたり、下がって俯きぎみになったりを繰り返す。

「黒岩さんの自殺の理由はいじめなんじゃないか、って聞かれました」

「・・・いじめ？」

はい、と松原は頷く。彼女の目線は完全に下がってしまっていた。「何で、何でそんなことを？」

「黒岩さんが亡くなったとき、医師から言われたそうなんです。黒岩さんの身体に事故で

打ちつけられて生じたもの以外の傷や痣が身体中にある、って。見るのも痛々しい、魔性

の斑点みたいに無数にあっただけなんです」

「でも・・・黒岩を見てる限り、そんなものを目にした記憶はありません」

「顔と手と足には無かったんです、でもそれが決定的なんじゃない

かって言われました。

他人から見える箇所には傷がない、っていうのが」

確かに、それでは一見では彼女の身体の異変に気づくことはない。

「あと、昨日黒岩さんの学習用具をご両親に渡したじゃないですか」

「うん」

昨日、主任と松原とお通夜に行った際、学校に置いたままになっていた黒岩の学習用具

を一緒に持って行った。

「それがおかしいんです。日本史の教科書がなかったり、地理のノートがなかったり、英

会話の教科書がなかったり、とか紛失してる学習用具がいくつかあったそうなんです」

昨日、学校にある黒岩の学習用具をまとめてるとき、そのことは松原が気づいていた。

ただ、そのときは無い学習用具は家に置いてあるのだろうと思ったのだが、家にはなかった

たらしい。身体中の傷、教科書やノートの紛失、いじめという言葉に行き着くには十分な

過程だった。

「これって・・・いじめなんでしょうね？」

松原の顔色は曇る一方だった、今にも泣きそうな顔でそう僕に訊ねた。

「一概に言えないですけど・・・おそらく、可能性はあるんじゃないかと」

「・・・そうですか・・・そうですね・・・」

そう言って、松原は下を向いたまま黙ってしまう。そのまま時間が流れていった、坂本が

俯く松原を見ているだけの時が。21時30分にお婆さんからラストオーダーの時間だと

告げられる。何か飲みますかと聞こうとしたが、目の前の松原が何

かを飲みそうな気がしなかった。松原の手前にあるココアは完全に冷めきっていた、そうなるまで手をつけなかった彼女が新たに何かを飲みはしないだろう。そんな彼女を前にし、僕だけオーダーを取るのも違うので何も頼まなかった。

坂本と松原は閉店間際に店を後にした。坂本は松原を家まで送ろうと彼女の後を着いていく、結局2人に喫茶店であれ以降の会話はなかった。

「私は、私はどうすればいいんでしょうか」

松原は振り返り、坂本に切実にそう訴えかける。心内は破綻を喫したように、不安定な状態に見えた。

「・・・この事は、まだ誰にも言ってませんか？」

松原はこうべを垂れた、坂本は言を続ける。

「この事は口外しないでください、下手に出回ると喧伝されてしまいます。事態が事態なので、ゆっくりと慎重に事を運ばせる方がいいと思います。学校側も原因を調べてますし、旗色を待ってからでも遅くありません」

松原はこうべを垂れた、坂本の提言を彼女は受け入れた。松原としても現段階で自分が

どうしたいか、どうすればいいのか迷っていたから。進むべき道は真っ白に染められ、その先に待ち構えてる道は不明瞭な世界でしかなかった。

「今日はありがとうございました、わざわざ来てもらって」

「いえ、なんてことはないですよ」

「正直、自分の中にだけ閉じ込めてたら膨張して破裂しちゃいそう。是正しようとして

も駄目で、誰かに聞いてもらいたくて坂本先生を呼んだんです」

「そうだったんですか・・・でも、何でまた僕を？」

教員でいいのなら、僕より頼りがいのありそうな人はいくらでもいる。そこから僕を選

んだのは・・・まあ、家が近いからといえはそれまでだ。

「坂本先生、黒岩さんとよく喋ってたじゃないですか、だから」

「よく・・・ってほどじゃないですけど」

まあ、向こうから話しかけてくるから対応していた程度に。

「ああ、私がいつも黒岩さんに愛想つかされちゃうから坂本先生のところに行ってたんで

すもんね。でも、何で先生には黒岩さんの言ってることが分かるんですか？」

「いや、僕も理解できない点は多々あるんですけど。多分、多少なりに黒岩と近い部分があるんじゃないでしょうか」

「近い部分・・・黒岩さんと坂本先生が？」

「何て言っているのか分からないんですけど、周囲を静観するといつか、冷めた視線を心に忍ばせてるんだと思います」

坂本の言葉に、松原は眉をひそめる。坂本や黒岩のような冷感的な性格のない彼女には

理解に苦しむところがあった。

「坂本先生には心の傷があるんですか？」

松原の質問は直球だった、自然性といったように口からそれは流れていた。坂本と黒岩

に似通った部分がある、ということは坂本にも死んでしまいたいと思うくらいの傷がある

のかもしれないと思って。

「さあ・・・どうでしょうね」

松原の直球の質問に戸惑った坂本は、肯定も否定もせずに答えを

濁らせた。それに気づいた松原も深く入り込むことは避けた。自宅まで送ってもらい、帰路につく坂本の後ろ姿が物悲しげに感じた。

第3話

黒岩嘉乃の死因を調査する学校側として、その発言は慎重を極めた。思慮に欠けた言動は当然として、結果の如何によっても保護者からの圧力は否めなくなり、その鎮圧に苦しまれる挙句に様々な権力との対峙は絶対のものとなり、学校の形骸化を問われては当校の端境期を迎える末事となることだろう。著名人や有名人の醜聞、国家権力への騒擾、報道家の捏造、政治家の改竄、全ての末事は見るに耐えない悲惨なものであり、それまで彼らが掲げてきた金看板などあっさりと破壊されることになる。情勢は逼迫の一途を辿り、当校は教育委員会の傀儡となって動く未来となるだろう。校長や教頭はこの難題を慎ましく終えることに躍起になっており、教職員への面談では彼らの押っ広げたような力強い眼差しが印象的だった。権力の亡者とは言わないが、自分のポストを守ることが必須条件といったような。

特に担任である松原ひのきへの面談は、原因の究明に執着した深い質問に終始した。坂本や他の教職員には黒岩嘉乃に係わった際の経緯や彼女への印象ぐらいだったが、松原にはそういった質問以外にも「何故、このような事態になったのか」「未然に防ぐ術はなかったのか」など、新任である彼女の至らなさを突くような厳しい言が

為され、黒岩の自殺に

対して自身が遠因ではないと感じてる松原は「申し訳ありませんでした」と言うことしか

できず、その場はそこにいる人間の深い情の行き交う厳かな空気が漂うばかりだった。

職員室に戻ってきた松原は席につくなり、体を丸めて泣き出した。黒岩に対して何もす

ることができなかった自分への戒めにも似た感情の起伏で。

「松原先生、泣かないでください。生徒に見られたら格好がつかいません」

主任が多少の角がある言葉で宥める。僕は何もできなかった、隣の席にいるのに彼女の

泣き姿を避けるように視界から外していた。同時に心内にチクリと痛みも走る、僕はこう

やって黒岩やこれまで接してきた生徒たちと対していたんだと思い。御託のような正論を

並べては坂本貢という教師像を造り、弱みを見せて近くにいる彼らから目線を外していたんだ。

☆

陽春のみぎり、校門から校舎へと繋がる一本道の左右には春花が我先にとその色香を彩

っていて、その光景は桜花爛漫といった具合に僕の心の中までも芳しく染め替えてくれそ

うだった。2年以上前、坂本は今の高校より100kmほど離れた場所にある高校へ着任

した。開校10年という新しい学校で、その様は校門から続く色景色をはじめ、檻樓のさ

して見当たらない校内は新任である坂本の気を落ち着かせてくれた。担任を務める1年5組は気のいいやつらの揃ったクラスで、リーダーシップを取る生徒もおり、周りもそれに釣られて一致団結する生徒たちだった。元々人見知りである坂本にとって、教師生活の第一歩を踏むにはこれまたとない良い環境であり、坂本自身も彼らに釣られるようにクラスの一員として力戦奮闘した。心内を洗い流したように刷新して生徒たちと向き合い笑みの絶やさなかった坂本には当然のように生徒たちの信頼も厚くなる。何もかもが順調だった、先が怖くなるくらい今が楽しかった。「その先」に何が待ち受けているのかなんて、知る由もなく。

☆

21時頃、明日の授業の予習を自宅の勉強机で勤しんでるとインターホンが鳴った。玄関を開けると松原ひのきの姿があった、何か灯した感情を潜ませるような瞳で僕を見ている。

「すみません、こんな時間に」

そう言って、松原は小さく礼をした。只事じゃない気がしたので、坂本は彼女を部屋へとあげた。リビングのマルーンのソファに座るように促すと、坂本は勉強の後にいれようとしていたホットコーヒーを2人分用意する。

「コーヒー、飲めますよね？」

「どうも、おかまいなく」

坂本がソファに腰掛けると、松原は気持ち分だけ右に移動する。

3人掛けのソファに2

人で座ると、結構な至近距離になった。それに少し戸惑いが生じたのだろう、僅か握り拳

一つ分ほどの距離をさらに開けた。置かれたばかりのホットコーヒ―は手をつけただけで

離してしまいそうな熱をもち、特にするべきことのない2人の間には静止したように何も

ない時間が流れた。その空間を打破しようと、松原は話に踏み込んだ。

「あのっ、今日お伺いしたのは坂本先生に話がありました」

「はい、何でしょう」

松原は坂本の目を直視する、その瞳は坂本には重いものだった。

松原のような明鏡止水

な心を持ち、是々非々な心持ちを併せる人間の透き通るように清々とした眼差しは坂本に

は眩しすぎた。虚心坦懷に人生を送ってきた松原とでは、坂本は交わらない。そんな心持

ちは置き忘れてしまった、そんな坂本では。

「今日、黒岩さんのことで面談を受けたじゃないですか」

「ああ、大丈夫でしたか？」

校長と教頭との面談を終えた後、一人泣いていた松原。坂本は何か厳しく咎められたり

したのであるかと、それを思っていた。

「ああ・・・結構いろいろ言われちゃいまして。直接的に言うことは外してるんですけど、

間接的にお前のせいだって言われてるみたいで苦しくて・・・あのとき泣いちゃってご

めんなさい、空気悪くしちゃいましたよね」

「いえ、心配だったんで」

心配だったのに泣いている松原を視界に入れようとしなかった。そこで感情を振り絞れない自分が嫌になる、そこを抜け出せない自分が。

「その面談のとき、校長と教頭の質問は全て答えの決まってるものようでした。1組に

対立はない、いがみ合いはない、敬遠する関係はない、そう言わされてるみたいに。学校

側として、よくない火があがるのを懸念するのは分かります。でも、最初から何があった

のかを見ようとしなのは違うと思います。それは黒岩さんに対して後ずさりしてるのと

同じであって、彼女の落とした命に対して目をつぶって逃げ出すのと同じです。向き合わ

ないといけないと思います、どんな真実があったとしても」

松原の瞳から涙が落ちる、その顔が綺麗だと思った。こんなときに不純だと思うが、反

故にすることはできない。悲哀の抱える女性は好きな方だった、だから今日の前の彼女に魅力を感じてしまう。

「それで・・・申し訳ないんですけど、協力してもらえませんか？」
「・・・協力」

「黒岩さんの亡くなった理由が知りたいんです。無為にしたくないんです、黒岩さんの命を。だから・・・私に力を貸してください」

松原の眼には力強い意思が備わっている、固くて頑丈な鉄扉みたいに。黒岩の亡くなった

理由、確かにそれは考えてないところだった。そこに自分が関わったかだとかは考えたが、

その軸になる部分には触れていない。校長や教頭もそこは濁したよ

うに、真実究明という
見解は示さなかった。

「でも、何故それを僕に？」

前にも思ったとおり、僕より頼りがいのある人間はいくらでもいる。

「坂本先生、黒岩さんとよく喋ってたじゃないですか、だから
昨日と同じ返答、そして。」

「あと、坂本先生って何だか私と正反対な人だと思って思って
「正反対？」

「はい、私と違って物静かで必要以上のいらない発言はしないし、
どこか冷めた眼で周り
を見てるところとかあるじゃないですか。だから、私の思いつかない
ことや考えつかない

ことが坂本先生にはあるんじゃないかなって。補填っていうと坂本
先生側には違うんでし
ようけど、力になってもらいたいんです。1人で動けるほど根性も
度胸もないし・・・」

僕は正直、松原からの申し出に即答を出せなかった。普通ならば
是非にと和衷共同を願
い出るのが不文律といったものだろうが、僕にはそれができなかった。
た。

「・・・すいません、考える時間をもらってもいいでしょうか」

糊塗というわけじゃないが、今すぐ回答を出すのは難しい。

「・・・そうですね、事が事ですからね。中途半端に返事が出来
ないですもんね、ごめ
んなさい」

坂本の迷う様相を察し、松原も今ここで返事をもらうのは諦めた。
ちょうどいい具合の
温度になっていたホットコーヒーを飲みながら気持ちを落ち着かせ
ると、今日は帰ります

と松原は席を立った。

「よかったら、さっきのこと前向きに考えてみてください。今日は押しかけて、すいませんでした」

そう礼をして、松原は帰っていった。松原のなくなった自宅で予習の続きをしながら、坂本は大いに悩んだ。自分がどうするべきかは分かってる、でも今一步を踏み出せない自分がいる。それは力戦奮闘していた2年前の坂本を泰然自若とした今の坂本に変貌させてしまった一つの事由によって。

第4話

黒岩嘉乃が失命して3日が経つ。それでも、僕らを取り巻く日常はさして変化がない。

時計の針の進む速度も、ヤカンの沸いたときのピーピーいう音も、移動するときに乗る電

車の形も、学校の下駄箱までの階段の数も、何も変わらない。それにホッとしてるところ

もあれば、苛立ちを覚えるところもあった。人の死によって悲しみに暮れるような毎日に

なるのは耐えがたい。しかし、その命が最初からなかったかのように彼女のいない毎日が

成立するのはそれはそれで違うと思う。黒岩は確かに15年強の人生を生きてきたわけで、

そこに関わった人たちも少なからずいたわけで、それだけの時間と人と関係があった彼女の

の人生を無にしてしまうようなことは嫌だった。

学校の中にも、3日前にあったのと同じような環境が戻っていた。大声を上げたり、馬

鹿騒ぎをしたり、校内を走り回ったり、喧嘩をしたり、黒岩の失命の以前によく見ていた

光景がそこにはあった。まるで、黒岩嘉乃なんて生徒は初めからいなかったかのよう

に教室内でも、誰も彼女の話をしていない。悲しみから逃れるためにわざと向き合わない、

それとは明らかに異質のものだ。彼女がいくら目立たない生徒だったとしても、それはな

いだらうとも思った。だけど、そこで黒岩の存在意義について生徒

たちに語るほど、僕も

熱い教師じゃない。

「誰も黒岩さんの名前を口にしないんです、そんなのってありますか？」

放課後、右隣の席の松原は顔をしかめてそう言った。黒岩のいた1組ですらそんな状況

になってるのなら、坂本の受け持つ2組がそうなのは当然だろう。

「そうやって忘れていくんですよ、試験勉強のように。そのときにはやみくもに単語を覚えるけれど、試験が終われば大概の単語は忘れる。全てを忘れるんじゃないにしても、全てを覚えておくのも無理な話です」

左隣の席の長稲が言う。

「長稲先生、黒岩さんを試験勉強に例えるのはやめてください」

主任が注意めたく言う。

「すいません、例えの話なんで」

またか、といったように長稲はため息まじりに言う。1学年担当の教職員の中で、長稲

と松原はよく主任から注意を受けるタイプだった。松原は毎度起こすミスによるものだけ

ど、長稲の場合は性格の難が問題になる。感情の起伏が激しいため、学校では極力抑えて

はいるがいつ爆発するのかは分からない。性格上、ヒステリックな爆弾を抱えてると思う

ので、あまり彼の深い部分には触れないようにするのが正解だろう。

その日は、放課後に1学年担当の教職員で居酒屋に食事に行った。食事を提案したの

は脇野先生だった、黒岩の一件以来どこか湿ったような空気のあった僕らを元気づけよう

と。

「さあ、今日はじゃんじゃん飲んじゃってくださいね」

「脇野先生、飲むのはほどにしてくださいね。学区外といえど、どこに生徒や保護者

の目があるか分からないんですから」

折角の脇野の好意も主任の言葉に潰される。脇野の盛り上げは良いのだが、主任の言っ

てることも正論だ。脇野も主任もそれは分かってる。だから、脇野も主任の言葉を受け止

める。主任だって、脇野のやっている事、言っている事は有りがたい限りだ。ただ、主任

という立場上、教職員が場を弁えた態度でいるのを見ている義務がある。そういうポスト

が彼女をお堅く畏まらせてしまう、上にいる人間は不利だ。

「そういうわけで、黒岩さんに関する諸所の接し方は今まで通りでお願いします」

来店して1時間半ほどが過ぎたころ、主任の場にそぐわないお堅い言は終わった。初め

は学校設備や生徒の授業態度などの話をしていたのに、いつのまにか話題は黒岩嘉乃のこ

とになっていた。そして、計ったように主任が教職員の意見の統一を求める話を続けた。

場の空気は当然に完全に沈んでいた、ここで笑みが含まれてる方がおかしい。

「私、生徒の親から「ウチの子は大丈夫なんですか？」って電話が掛かってきましたよ」

物織先生が面倒くさそうに言う。物織は教師という職業に執着はない、彼女が辞めたい

と口にするのは日常茶飯事だ。子供好きという理由でなった教師の

ため、親御への対応や
諸々の書類作成などの業務には気が惹かれないんだそうだ。生徒と
接してる授業時間、そ
れが彼女の安息だった。

「僕も電話来ましたよ、「おたくの学校にはいじめがあるんですか
?」って」

長稲がため息まじりに言う。

「とにかく、生徒や保護者から何を言われても毅然とした態度で適
切に対応してください。

学校側で現在調査中なので、勝手な言動はくれぐれも慎むようにお
願います。松原先生
は特に、願います」

口を挟むように主任が力強く言った。はい、と松原は力弱く言っ
た。

その帰り道、松原はどこかしぼんだような様子だった。

「大丈夫ですか?」

「はい、ここ4日間の一連の事で疲れちゃいまして。そんな飲めな
いっていうのもあるん

ですけど、お酒を飲んだらドツと身体が重くなっちゃいました」

「だったら、飲まない方がよかったのに」

「しょうがないじゃないですか、脇野先生がどんどん注いでいくん
だから」

「脇野先生と松原先生じゃあ、アルコールの許容量が全然違うんで
すから。無理しないで
断っておけばいいんですよ」

「・・・でも、ちょっと飲みたい気分だったんです」

黒岩の一件で精神的に追われてたため、松原には心的な余裕が少
なくなっていた。憂さ

晴らしじゃないが、今日の食事会はいいいワンクッションになったよ

うだ。

「学校側の調査って具体性がないじゃないですか。私たち教師に面談はしてるけど、それ以外の詳細は私たちにも知らされてないし。本当に細部まで事細かに調べてるんでしょうかね」

「まあ、今回の事は当校においても未曾有の出来事だし。生徒の間でも信憑性の薄いデマが飛んでたりしましたし、舌禍とまで言いませんが下手な発言で通せるわけありませんし、諜報とまで言いませんが教育委員会の眼も光ってますし、きちんと慎重に事は進ませると思いますよ」

そう松原を言い諭す。

「・・・坂本先生って変ですよ。厳しい言い方したり、柔らかい言い方したり、冷たく接したり、温かく接したり。飴と鞭って言うんですか、こういうの？」

「・・・そういうつもりじゃないんですけど」

「分かってます。先生の中では自然なんですよ、これがきつと。だから不思議なんです、私には無い部分なんで」

坂本の精神的内部構造はいつからか不思議に構成されていた。自分で自分の心の中の構造が把握できないくらいに。そして、平穏な世界で育ってきた松原には、それが魅力と感じた。好奇心をくすぐられ、知らない間にその中に入っていくたいたと思っていた。

松原を自宅マンションまで送ると、その5分後に坂本の携帯の着

信音が鳴った。松原ひ

のきからの着信で、「今すぐ来てください」とだけ書いてある。坂本は何事かと思い、すぐ

に松原の自宅まで駆け戻った。

「何かあったんですか？」

玄関から顔を出した松原は泣いていた。家にあがらせてもらい、詳細を切り出す。

「これが・・・ポストに入ってた」

松原が手渡したA3サイズの茶封筒には、左程の重みはなかった。「開けてもいいですか？」

松原は何も言わず、こうべを垂れる。茶封筒の中身をローテーブルに出すと、そこへ出

て来たのは黒岩嘉乃の私物だった。ボロボロに破られた教科書には「死ね」「消えろ」など

の誹謗中傷の言葉が書きなぐられ、歪に変形したペンケースには真つ二つに折られた筆記

用具が詰められ、学校で配布されたプリントは半分ほどが燃やされて灰の混じった片半分

になり、枯れかけの菊の花が十本くらい空白を埋めるように敷き詰められていた。

「・・・一体、誰がこんなこと・・・」

松原は泣き顔のまま、かぶりを振る。

「分かりません、でも・・・こんなの許せない」

決定的な証拠だった、黒岩嘉乃の自殺の原因がはじめであること。彼女は見るに耐え

ないような嫌がらせを受け、精神的に肉体的に大きな痛手を蒙っては、それを抱えきれず

に夜空にその身ごと投げてしまったのだ。

「坂本先生・・・」

松原は坂本を真っ直ぐに見ていた。身体がぶるっと震えるのが分

かった、もう躊躇とい

う言葉はこの場に嵌りはしない。坂本が冷静沈着であるとか、そんなことは関係ない。坂

本とて人の子だ、こんなものを見て心内が揺るがないはずはない。

「松原先生・・・つきとめましょう、真相を。こんなことがあつちやいけない、もう二度と」

松原はしっかりとした眼光で力強くうなずいた。これからは2人で協力をして、時間を

かけてでも事の真相を追究する意思を決め、今日のところはこのままで坂本は松原の自宅を後にした。

松原は坂本のいなくなった部屋でひたすら自分を責めた。黒岩がこれほどの窮地に立たされていくことに全く気づいてあげられなかった自分を。どうにもやりきれない思いのまま、一睡もすることが出来なかった。

坂本は自宅に戻ると、キッチンから年代物のワインを出して空けた。無念の美酒という

自棄酒を飲み続け、酒の力でやがて眠りについた。

第5話

坂本と松原は2日ごとに喫茶店に集まり、黒岩嘉乃の調査に関する話し合いをした。経

過によっては間隔が1日であることもあり、彼らは学校以外でも毎日のように顔を合わせ

た。調査に関しては至極慎重に動くことが必要とされ、学校内で話し合うことは軽率であ

り、2人は以前にも行った60代の老夫婦の喫茶店に仕事の後に集まった。ただ、調べる

にしても2人にあったのは黒岩のいじめにまつわる結果だけで、その過程に関する手掛か

りは全くといっていいほど無かった。だからといって、手掛かりがないからと諦めるわけ

にはいかない。手掛かりを掴むために動く、まずはそこから始めていく。

黒岩へのいじめはいつから始まったのか、どれほどの頻度で行われていたのか。どれぐ

らいの人数が関わったのか、数人に校舎裏にでも呼ばれてやられていたのか、教室でクラ

スメイトの見ている前で見せ物のようにやられていたのか。首謀者はいたのか、そいつの

采配一つで動くようなグループがあったのか。周りの人間は止めなかったのか、胸を痛め

ながらも標的にされるのが嫌で恐縮してしまったのか、いじめを面白がって喚声を上げる

ように喝采をしていたのか。黒岩は抵抗したのか、真っ向から立ち向かっていったのか、

成されるがままにやられていたのか。

「やっぱり、いじめには多くの生徒が関わってたんでしょうか？」

「おそらくそうでしょう、1対1のいじめはあまりないと思います。根本は1対1である

ことが多いですが、1人1人の力なんて高校生では伯仲してるものです。だからその1人

は集団を味方につけ、集団も1人がやることで我も我もと続くんです。集団から外れるこ

とを恐れてやっているうち、感覚が麻痺してそれが日課のようになっていく。いじめてる

という感覚が薄れ、刺激が欲しくなっては行動をエスカレートさせていき、人の傷みも忘

れてはサイボーグ化して事の重大さに気づくこともなくなる」

そして、黒岩のような結果に行き着いてしまう。最低な過程の結果、最悪な結果に。

「松原先生は、何か思い当たるような黒岩の言動はありますか？」
考え込む松原の前に置かれたココアから湯気が昇り立つ。

「私は黒岩さんの言ってることをあまり理解できてなかったの・・・。思い当たる以前

の問題でつまづいてるんです」

「それで、松原先生を諦めて黒岩は僕のところに来るんですよね」

「すいません、私じゃ頼りになってあげられなくて。いつも坂本先生には迷惑かけてばかりで、本当に私は駄目な教師です」

「そんなことはありません、僕はたまたま黒岩の言動がなんとなく分かるだけですから。松

原先生以外の教職員なんて、彼女と向き合おうともしてませんでしたし」

「それはそうですけど・・・でも、力になってあげられなかったっ

ていうことでは私も同じです」

松原は目線を下げたまま、坂本を見遣る。

「じゃあ、何での確な対応がないと分かっているのに、黒岩が毎回松原先生のところに行つてから僕のところに来るんだと思いますか？」

松原は眉間にしわを寄せて考える。そんなこと、考えたこともなかったので困惑した。

私を困らせようとして毎度解決に難渋する疑問を口にするのか、担任としての顔を立てるために一度私を経由してくれてるのか。

「すいません、分かりません・・・何でなんですか？」

「松原先生が黒岩と正面きって向き合ってたからです。他の教職員なら辟易した露骨とい

える態度であしらうのに、松原先生は分かってくれないにしても黒岩の言葉をなんとか分

かってあげようと真摯に対応していたから、だから黒岩もわざわざ毎回先生のところに行

っていたんです。嬉しかったですよ、きっと。自分のことを見てくれる人がいるって

ことが」

松原は口元を嚙んで、涙目になる。

「そんないちいち泣きそうになってたら精神がもちませんよ、先は長いんですから」

「・・・はい・・・」

松原は自分の右頬をギュツとつねって精神を均衡させた。

「坂本先生は、黒岩さんの言動で思い当たることはあるんですか？」
考え込む坂本の前に置かれたブラックコーヒーから僅かばかりの湯気が立つ。

「今回の件に直接関与するか分かりませんが、こう言われたことが

あります」

☆

「先生、何で人は人を傷つけるんですか？」

黒岩への対応には、布陣するように心構えをする必要がある。油断してると、大人の弱

みにその純粹無垢な心を翳してしまうから。僕のように、大人になることで一つ一つと

妥協を見出し出していった人間には、透き通るような彼女のあまりに綺麗な心は眩しすぎた。

「人を傷つける行為は無意味です。執念を生んで、修羅場を作って、積み重ねた憎しみは

やがて爆発します。血を流して、傷を負わせて、憎悪に侵される関係に何があるんでしょう

うか。そこに何か意味があるのなら教えてください」

僕は思いの外に返答に迷った、人が人を傷つけることがいけないことは百も承知なのに。

彼女のような実直な生徒には、その場しのぎの軽率な言葉は言い置けない。

「俺にはそういう経験がないから、俺なりの考えでもいいか？」

黒岩はこうべを垂らす。

「人には憎しみが理性を超える瞬間っていうのがあるんだ。黒岩にも誰かの言葉に怒りを

覚えたり、誰かの態度に腹を立てたりした経験はあるだろ。その感情が行き過ぎたとき、

人は力任せの暴力行為に走ったりする。自分が自分じゃなくなるっていうか、理性を超え

て本能だけで動いてしまうんだ。ムカつくから殴る、蹴る、刺す、殺す、そうやってしま

う人もいるんだ」

黒岩は少し悩み込み、こう言った。

「私はそうはなりたくないです、たとえ人に何をされたとしても。人の良いところを見て

いきたい、称えたい、尊敬したい、好きになりたい。こんなこと言ったら笑われるかもし

れないんですけど、世界中の人たちが手と手を取り合っていていける世の中になってほしいんです」

坂本はフツと微笑む、そんな大胆な平和願望はとうの昔に置いてきてしまったから。

「・・・やっぱり、こういうの変ですか？」

「変じゃないよ、そうなるといいな」

坂本のくれた笑顔に、黒岩も滅多に見せることのない笑みを浮かべた。坂本と黒岩は相

似点が多いながら、根底は正反対だった。共に現代社会からの煽りを受けて静観的な性格

になったのに、その社会に対して冷めた瞳をした坂本と温かい瞳を続けていた黒岩。黒岩

嘉乃は人間を信じ過ぎたのかもしれない、そんなに世の中は温かい人間ばかりじゃない。

その矛盾に葛藤を巡らせ、理性を保とうとする自分に爆発してしまったのかもしれない。

☆

「今回の一件に繋がるかは別として、黒岩は人間に嫌悪感を抱いたのかもしれませんが。実体に育ってきた彼女にとって、現実世界は嫌気の起こるものだったのでしょうか。陰日向の

ある人間は多すぎて、精神的に寡聞な人間也多すぎた。怠惰な生活、不躑な礼法、外道な

思考、粗忽な振る舞い、高飛車な態度、狡猾な立ち回り、姑息な手段、吝嗇な性格、下衆

な男性、蓮っ葉な女性。黒岩には目の覆いたくなるような現実があり、それが彼女を天邪

鬼にさせる。本当は良くない事がいくらでもあるのに、そんなことないとひねくれさせて

しまう。図太かった精神の支柱は力を込めれば割けてしまう緻密な細い糸に分散され、黒

岩に怒涛のような苦悩の波を送りつけていたのかもしれない

「黒岩さん・・・きつと、悩んでたんですね」

「毎日が葛藤の連続で、なんとか解消したくて僕らのところに来たんじゃないでしょうか。

おそらく、僕らは黒岩の願うような人を傷つけたりしない大人だと思っ

て。松原は気を落としてしまう、そんな心的状態で自分のところに来た黒岩の力になれなく

て。頼りないにも程がある自分が嫌になる、こんな大人にも黒岩は嫌気が指したことだろ

う。

「坂本先生は黒岩さんの思うような出来た大人なんでしょうけど、

私は違います。ドジで

マヌケでおっちょこちよいだし、教師としても発芽したばかりの新米です。こんな教師が

担任になったのが、そもその発端なのかもしれません」

「松原先生は松原先生なりに頑張りましたよ、それに・・・僕こそ出来た大人なんかじゃ

ない。黒岩が僕をそう見ていたのなら、それは大きな勘違いです。

僕は周囲が思ってるよ

り、もつと卑劣な人間なんです」

自分を蔑むように突き落とす坂本に、松原は疑念を覚えた。

「先生・・・何かあったんですか？」

そういえば、松原は坂本が先月に転任したことが不思議だった。学期始めの転任な

らともかく、1学期の最中の6月という中途半端な時期の転任だ。何故、こんな学期途中

に学校を移ったのだろうか。上の決定といわれればそれまでだが、もしかしたら然したる

理由があるのではないか。

「坂本先生はいつも淋しそうな瞳をしています、いつも背中に陰があります。顔は笑ってて

も瞳は笑ってません、先生から伸びてる影は背を丸めて屈めてるように見えます。こんな

こと言うのは差し出がましいかもしれませんが、でも・・・もし私なんかでよかったら話してもらえませんか？」

それで坂本の陰を柔にできれば、そう思って松原は告げた。

「・・・すいません・・・立ち入られたくないところなんです・・・」

坂本は松原の目を見ずに言った。

「・・・こちらこそすいません、土足で入り込むような真似しちゃうって」

この日はこれ以上話は進まなかった。最後のやり取りで多少の気まずさが否めなくなり、ここで解散にした。

松原は自宅に帰ってから坂本とのやり取りを考えていた。立ち入られたくないという

ことは、坂本に以前の学校で何かしらの事が起こったということに

なる。何があったのか、
どういった訳有りで転任になったのか。やきもきした心内が取り払
えず、ただ燻ぶること
しかできなかった。

第6話

松原ひのきはおっとりした性格で顔立ちも可愛らしく、その愛らしい笑顔には周囲の急かした時間に身を置く人間たちを総花的に和ませる魅力がある。父親は貿易商を営む会社の重役を務めており、言ってみれば彼女は令嬢ということになる。学生時代は格式のあるお嬢様学校で過ごし、勉学と部活に励んできた。部活では友人に誘われたというよく聞く展開でラクロスをやっていたそうだが、運動神経の微塵もない彼女はよく転んではミスばかりの万年補欠だったらしい。人間には良いところも悪いところもあるが、松原はそれが典型的に表れるタイプであり、恵まれた環境と高度な容姿と明るい性格を持ちつつも、ドジでマヌケでおちちよこちよいという短所も持ち合わせていた。教職員という道を選んだのも勉学で長けていたという面の他、自分の短所からして実力社会を駆け上がる職種は向いてないというところもあったからだ。最初はそんな輕易な選択で大学で教育学科を専攻したものの、教育実習では想像以上に配属先の学校で受け入れてもらえたのが嬉しかったらしい。大概、教育実習で訪れる先生なんて一種のタレント扱いに似たもてなしをされるものだが、松原は生徒たちの温かい対応に感動して教職員への思いをより強くした。ちな

みに、お嬢様学校で小・中・高・大と半軟禁状態で進んできたため、外界にいる男性と触れ合うことは遮断されていたと言っても過言ではなく、22歳になる今でも男を知らないという漫画の世界のような環境で育った子だ。彼女のルックスからすれば何度となく交際経験があるうとおかしくはないのに、恵まれた環境すぎたのが逆にウブで生真面目な部分を作り出してしまったのか、飲み会の席では必ず脇野先生にその点をからかわれるのが定例のようになっていた。

坂本が群青高校へ転任してきた日、初対面で松原の短所を彼は目の当たりにした。

「いったあゝい」

そう言いながら左足を引きずるようにして、松原は職員室に入ってきた。

「どうしたんですか、それ？」

「階段から落っこちました、ズズズツって足を擦っちゃって保健室行きです。ストッキン

グも伝線しちゃったし、朝っぱらから散々です」

「そいつは大変ですね、朝からお勤めごくろうさまです」

脇野の皮肉まじりの言葉に眉をしかめつつ、脛に貼られたガーゼから傷口を確認してい

るため、左隣の席にいる新顔のことなど目に入らない様子だ。

「松原先生、こちら今日から2組の担任をしていただく坂本先生です」

一向に坂本の存在に気づく様子のない松原に呆れたのか、主任が口を開く。それに合わせ、ようやく坂本を視界におさめる。

「坂本貢です、担当教科は理科になります。どうぞ、よろしく願います」

「あっ、松原ひのきです。担当は社会です・・・こちらこそ、よろしく願います」

松原はいきなりしくじってしまった。教職3年目の落ち着いた性格で風貌も悪くない教師が赴任してくると耳にしていたので、物織と第一印象から良いイメージで入ろうと打ち合わせをしたはずなのに。印象は最悪、折角の滅多にない出会いの機会が瞬時におじゃんになった。

その後も、事あるごとに松原の愚直な面を坂本は目にする。よく転んでは怪我をして、よくミスしては説教を受けて、酔いに走っては姦しくなる。外見が良いのが幸いで、そんな面を見ても健気でいたいけな女の子に映ったりするため、青春漫画やスポーツ漫画のヒロインのように不器用で放っておけないタイプだった。辛辣な言葉を並べる主任のような女性、毒舌ありきで本音をきっぱり言う物織のような女性に比べれば、明らかに好感度の高いことは請け合いだが、一人の人間とすればやはり頼りない。社会的見識は低く、異性関係はさっぱり、ただ底抜けに真っ直ぐな心を持っている。確かに松原の言ったとおり、彼女と坂本は正反対の人間だった。社会的見識とは違いかもしれないが、坂本は社会の眉唾物の見極めの心得はある。異性関係も人並みにある、ただ心は軸が捻じ曲がったように

曲線的なものだった。坂本にとって、松原ひのきや黒岩嘉乃のような純心な女性は一步置きたくなる。以前の自分を照らし合わせるようで、そこから打ちひしがれた自分を見るように目で目が痛くなってしまう。

「一体、誰なんでしょうね。これを送ってきた人って」

いつもの老夫婦の営む喫茶店の奥の席で松原が訊ねる。

「実際に黒岩をいじめていたやつが送ってきたのか、それとも周りからいじめの現場を見ていた人が送ってきたのか。前者なら学校への挑戦的な意味合いじゃないでしょうか、いつまで経ってもいじめの実態に辿り着けない大人たちへの挑戦状。後者なら黒岩へのいじめに胸を痛めていた人間の良心的な意味合いでしょう、実態を眼にしていたにもかかわらず、何もしてやれなかったことへの報いも込めて」

お婆さんはレジの前の背凭れもない簡素な椅子に座っていた。坂本と松原がこの店を訪れるのはいつも21時〜22時の閉店に差し掛かる頃で、キッチンで翌日の仕込みを淡々と続けるお爺さんを横目にお婆さんは客も1〜2組しかいないこの時間帯は眠気に襲われる。レジの横に置かれた20〜30年ぐらい年季の入ったラジオからは、

いつもボサノパやそれに近い心の和む軽いタッチの音楽が流れている。あの老夫婦らしい、この店の雰囲気にも合った選択だ。

「もし前者だったら、そんな挑戦状なんか送りつけてどうしたいんでしょうか？」

「現代社会への警告でしょうか、大人になんか力はない、そんな大人になんかなりたくはない、と。横着を決め込む大人、瑣末な事柄に目を向けない大雑把な大人、どこかで耳に

したような説明書的な長広舌を振るう大人、他人に厳しくて自分自身は放埒に振舞う大人、

そんな奴らはクソツタレだと。それとも狂気的人格かもしれません、一度神経が振れると

自分が何をしてるのか分からなくなる人間はいます。過ちを犯してしまい、そんな自分を

止めてもらいたいと思ってるのかも。彼らは黒岩へのいじめに快感めいた感動を憶えてる。

黒岩個人が憎かったんじゃない、誰でもいいから傷つけたいという無差別によるいじめだ

った場合、黒岩がいなくなった今、彼らは持て余した感情の矛先を別に向ける可能性も十

分にあります。そうだとしたら、きつとまたいじめが起こる。いや、もしかしたらもう起

こってるのかもしれない。黒岩に続く、次の標的が出てくるのかもしれない

「じゃあ・・・今現在、学校でいじめが続いてるのかもしれないんですか？」

「考えられます、僕らも必要以上に気を回した方がいい」
はい、と松原は不安と確然の同居した面持ちで言う。

「ただ、後者の場合は僕らにとって朗報になるかもしれません」
坂本の言葉がいまいち飲み込めないように松原は首を傾げる。

「黒岩のいじめに対して、何かを報いたいと思う人間がいるんです。きつと、僕らの力に

なってくれるんじゃないでしょうか。いじめに関する詳細を話して

決に向けて動くことができます」

言った後に松原は場にそぐわない言葉だと気づき、軽く礼をする。

けど・・・。後者だつ

たとしても、その茶封筒の送り主を特定するのは難しいと思いますよ。消印も筆跡も一切ない封筒からじゃ、何のヒントもありませんし」

「ああ……そうですね」

やっと詳細の一端にでも触れそうな展開に日進を覚えそうだったのに、現実の難解度にはあっさりと松原の心持ちは萎んでしまった。

喫茶店の閉店時間を回り、2人は帰路につく。ホワイットのボウタイ付きコットンシャツ、ライトグレーのニットカーディガン、グレーのプリーツスカート、ダークブラウンのプレーンパンプスに松原は身を包む。対して、坂本はいつもスーツの上下だった。松原はスーツ以外の服を着てる坂本を見たことがない、だから彼女の中で坂本の洋服に関するイメージは100%スーツだった。

「坂本先生って、いつもスーツですよ。何ですか？」

「締まりがないんですよ、スーツ以外だと。似合わないんじゃないんですけど、どこかだらしくなるんです。そこらにいる予備校生みたいに見えて、教師っぽくなくなるんです」

「へえ、そうだったんですか」

2人の後ろに伸びているはずの黒い影は夜の暗闇にすっぱり隠されていた。昼間の暑さが嘘のように、22時を過ぎた夜の街は吹く風の冷感から涼しさを感じられた。梅雨の季節も来週には終わるらしい、本格的に夏が始まる予備段階の時期。

「来週末には1学期も終わりですね、なんか怒涛の日々だったなあ」
「今学期は特別ですよ。そんな、毎学期あんなことは起こりませんから」

学校は現在、期末テスト後の休み期間になっている。とはいえど、部活は毎日あるし、机上作業はいくらでも残ってるので土日以外に教職員に休みはない。新任である松原にと

っては毎日が嵐のように轟々と過ぎていく日々であり、転任した坂本にとっては新しい地で全てを一新して己を改める日々だった。

「黒岩さんのことは本気でヘコみましたけど、いつまでもウジウジしてられませんし、こ

の一件の真相を明らかにして改善させることで私なりの黒岩さんへの供養にしたいと思っています。それが頼りがいのない新米教師が彼女にしてあげられる精一杯なので」

芯のある言葉だった、松原はそう言いながら右手にグッと力を込める。

「いいですね。松原先生、少し変わりましたよ」

「強くないとやってられませんよ、拙いながらに一生懸命やっていけないと。不撓不

屈、堅忍不拔の精神を忘れないようにしないと」

松原の気丈夫な言葉に坂本はフツと笑みを浮かべると、松原もそれを見てフフフツと頬を膨らます笑顔を見せる。

「ありがとうございます、坂本先生」

「ありがとうございます、何がでしょうか？」

「多分、先生がいてくれなかったら、私1人じゃ何もできなかったと思うんです。ほらっ、

あの喫茶店で話しても、私は先生の言うことに頷いてるばかりだし。重要なこととか、

思いつくのは大体が坂本先生ですし。私はおじやま虫ぐらいな感じでもん、もちろん私

は私なりに頑張ってるんですけど」

「松原先生が頑張ってるのは分かりますよ。先生は僕と違って感情が表に出るタイプですから、見てれば分かります」

坂本がそう言うのと、松原は少し困じた顔を見せる。

「えっ・・・私って、そんな分かりやすいですか？」

「はい、僕が会ってきた人の中で五本の指には入ると思います」

松原は困った、もしかして自分の気持ちまで明け透けに伝わってしまったんじゃないかと思うと。

「それって、どのくらい分かりやすいですか？」

「いやっ・・・あくまで表立ったことぐらいですけど。いくらなんでも、そんな奥深いと

ころまでは分かりませんよ」

よかったあ、と松原は心内を撫でるように落ち着かせられた。

「坂本先生、夏休みはどうするんですか？」

「夏休みか・・・1週間くらい取れると思うんで、実家に帰るんじゃないですかね。松原

先生はどうするんですか？」

「私も実家に帰ります、黒岩さんの件で両親がすごい心配してるんで。最近は大丈夫です」

たんですけど、10日前ぐらいは毎日電話が掛かってきてて。大丈夫か、泣いたりしてないか、学校行くの嫌じゃないとか、うんざりするぐらい聞かれて。過保護なんですよ、いくら一人娘だからって子供じゃないんだから。心配してくれるのは嬉しいんですけど、子離れして欲しいです」

「いいじゃないですか、親は無限の愛情を子供に持ってるんですから。親の優しさに応えてあげるのが子供の優しさってもんですよ」

「でもなあ・・・」

ブーたれる子供みたく、松原はクツと唇を尖らせる。

「さつき、子供じゃないんだからって言ってたじゃないですか。大人なんだったら、もつ

と寛容に向き合ってあげましょうよ」

「・・・じゃあ、先生は何か両親にしてあげてるんですか？」

唇を尖らせたまま、松原が訊いた。

「何ってほどじゃないですけど、仕送りぐらいはしてますよ。あと、ウチの母親は恥ずかしがりで自分から電話をあまり掛けてこない人なんで、なるべく僕から掛けるようにはしてます」

「・・・大人ですね」

今でも親から仕送りをしてもらってる松原からすれば、坂本は大人の男に映った。それ

に比べて自分は何なんだと考えると、肩がシュンと窄んでしまった。

第7話

1学期の終業式を迎える。例年なら体育館に集まる生徒たちは長期の休暇への思いを馳せるように一様に顔を綻ばせているのだが、今日に関しては館内は厳粛な空気に包まれた。冗漫な演説のようにだるさを散漫させる校長の長話も今日に限っては気迫のこもったような感覚を受けた。

壇上では校長の口から黒岩嘉乃の自殺に関しての学校側の調査結果が報告された。それは、緊張しながら聞いていた坂本と松原の期待を大きく裏切るものとなった。学校側の調査報告では、黒岩の自殺の原因の詳細は究明することができなかったとされた。おそらくは日々の経過の中で何かしらの絶望感が蓄積されていたのだろう、と。坂本は校長の話
を聞きながら、右手でグッと拳を握っていた。「残念ながら」「誠に遺憾の限り」という、
有り物を並べたような言葉に憤りすら感じた。

その日の夜、1学年の教員で以前も訪れた居酒屋で打ち上げを催した。

「有り得ないです、あんなの調査なんかしなくても分かることじゃないですか!」

松原は感情を表に出して怒りを露わにした。彼女の言葉は、店内に響き渡りそうなほど通っていた。

「松原先生、御自分の立場を忘れないでください」

主任が半ば高圧的とも取れるような口調で松原を静める。その場限りの軽率な行動は取らないでください、と。

「学校側は十分に調査をしました、その結果がああなったんです。

おそらく、黒岩さんの

事件の原因は彼女の胸の内にだけあるものなんだと思います。なので、それを明かそうと

思っても、すでに彼女がいないのだから無理なんです。それについて、松原先生が思うこ

とはあるんでしょうけれど、無理なことについていくら言及されても学校側は手の打ちよ

うがありません」

主任の言葉に釈然としない表情を続ける松原に、長稲が訊ねる。

「じゃあ、松原先生はどういう結果なら納得がいったんですか？」

「どうって・・・私も詳しいことは分かりませんが、人が命を絶つということは余程の

ことだと思います。黒岩さんにはこの先、余りあるくらいの幸せがあったはずなのに、そ

れを断ち切ってまで人生の断絶を選択したんです。それだけ今が苦しかったはずなんです、

きつと想像しえないくらいなの。それなのに、そんなあっさりと片付けてしまったていいんで

しょうか？」

松原の直線的な言い分に、場は少し言を失う。彼女の言うことは毎度正しい、だから。

「松原先生の言ってることは間違っってはいません。ただ、何の証拠もないのにこれ以上は

調査のしようがないという結論なんです。担任として心苦しいでしょうけど、分かってく

ださい」

主任が会話を終わらすつもりでかけた論しの言葉に、松原は口をすべらせる。

「証拠ならあります！」

松原の一言に、その場の全員が同じリアクションをした。みんな一様に彼女に視線を集める中、坂本はまずい顔を浮かべた。坂本の顔色にようやく松原も我に返ったが、時はすでに遅かった。

「証拠って、どういうことですか!？」

「何だよ、先生何か知ってんのかよ」

全員の集中砲火を浴びては、松原も話さないわけにはいかない。松原は自宅にボロボロ

にされた黒岩の教材道具が届けられたことを話した。

「何で、そんな大事なことを黙ってたんですか!？」

怒気の混じった主任の言葉が響く。

「・・・それは・・・」

「僕が松原先生に黙っててくださいと言いました」

言いあぐねる松原の横から坂本がそう割って入る。

「理由は、黒岩の事件に便乗した何者かの悪質な悪戯であると思っただけです。教材道具

といっても、手に入れようとすればいくらでも手に入ります。それをボロボロにして、松

原先生の自宅のポストに投函したとしても何ら変わりはありません」

「・・・その可能性も確かにあります、でも何でその悪質な悪戯があったことを黙ってた

んですか？」

「その封筒の送り主は茶化し半分の気持ちでやってるんです。我々が何か反応を起こすこ

とを望み、そうになったら送り主は喜びを覚えるでしょう。学校側に

封筒が行き渡れば、何

の証拠もない学校側はそれを基にした調査を開始するはずです。そうなれば、送り主の思

うツボでしょう。送り主はその喜色に快感を覚え、また同じような悪戯を繰り返す。その

虚仮威しに弄ばれるように動く大人たちを馬鹿だと思い、驕慢に僕たちを意のままに操っ

ては面白がっていくだけです。そんなことをしても事態が混乱するだけですし、意味があ

りません。報告をしなかったことは謝ります、申し訳ありませんでした」

即興で思いつくままに語る坂本の言葉には、思いの外に説得力があった。その場で思い

ついた嘘にしてはあまりに流暢だったため、全員が彼の口に騙される。

「まあ・・・確かに、こんなことしても意味はないですもんね。いじめがあったとして、

いじめた人間が挑戦的に我々に送りつけた物だとしたら、それによって足元を掬われる可

能性は十分にあるわけだし、そんな自らを追いつめるような真似をするとは思えないし」

「それ、言えてる」

脇野の見解に、物織が相槌を打つ。

「でも、それも嫌ですねえ。そんな、人とも思えないようなことをする人間がウチの学校にいるかと思うと」

長稲がため息まじりに言う。

「松原先生も災難ですね、新任早々からこんなはやめちゃんことばかり起こって」

フォローのつもりで言った坂本の言葉に、松原はコクリと頷く。

「皆さん、今のことは決して言いふらさないようにしてくださいね。松原先生、念のため

にその封筒はこちらで預からせていただきます。校長や教頭にも、私の方から経緯を説明しておきますので」

「・・・はい」

松原の威勢はいつのまにか完全に陰に隠れていた、それどころか萎縮したようにシユンと肩を窄める。

「ありがとうございます、さっきは」

打ち上げの帰り道、並んで歩を進ませる坂本に松原が先刻の一件を詫びる。

「いいんですよ、あのぐらい。松原先生が封筒が送られてきたことしか話さなかったのが幸いでした。黒岩の母親にいじめを示唆されたことや黒岩の遺体に傷があったこととかを

話されたら通用しない言い分だったので。ただ、あんまり軽はずみな言動はなるべく避けてくださいね」

「・・・すいません」

坂本の言葉は、松原にとっていつも重い。それは主任に説教をくらうときの重さとはまた別種の性能として。坂本からの背中を押してもらえるとき言葉は特別嬉しいし、背中を縮まらせられるときの言葉は特別辛い。

「でも、今日の学校側の調査結果はあんまりです」

「そうですね、僕も憤りを感じました。つまり、要は学校側には黒岩のいじめを追及する

だけの積極性がないっていうことになります。おそらく、学校側は

僕らの力にはなってく

れないでしょう。そんな学校側にいじめの可能性がある現状を提供しても、ややこしくな

るだけです。僕らは、僕らだけで動いた方がいいと思います」

「はい、そう思います」

街灯が照らす夜道の黄色くなった部分に野良猫がごろりと寝ていた。何だか、ミュージ

カルスターのように野良にスポットライトが当たってるみたいに見える。ただ、スポット

ライトが当たるにしては随分とやる気のない寝方だったが。

「一つ、封筒が学校側に渡ってしまうのは痛いですね。折角の証拠になる物だったのに、

それがなくなってしまうのが」

「・・・すいません、私って足を引っ張ってばかりですよね」

「そんなことないですよ、僕も一人じゃ何も出来ません。一人で動いてたら、多分陰に籠

っていくと思うので。松原先生みたいに明るい人が近くにいてくれると、気分が乗れるの

で助かります」

「じゃあ、私も少しは役に立ってるんですか？」

「はい、もちろん」

坂本の言葉に、よかったあと松原は胸を撫で下ろす。清浄な微笑みだった、しばらく人

のそんな顔色を眼にしてなかった。

「どうかしました？」

松原の笑顔に眼を奪われるようにしていると、そう問いかけられる。

「いえっ、何でもありませんけど」

坂本がそう言うと、松原はまた先程から継続している笑みを戻す。まだ何も知らない、

人間の汚れた部分など眼に留めてないであろうほど透き通った顔を松原はしていた。彼女

といると、坂本は心内が洗われる気がした。折れ曲がった自分の心の軸を治療してもらえ
るような感覚を受けられる。

「よかったら・・・今度、映画でも観に行きませんか」
「えっ？」

松原は眼を点にして言う、彼女も坂本と環境は違えど心境は似ていたから。陰があつて

何か傷を背にしている坂本に周囲の他の男性とは違う印象を抱き、一つの事柄に協力し合

う中で感じた彼の頼りがいのある部分に惹かれていた。

「僕らって、いつも同じ喫茶店に集まって、同じ題の会話を続けて、同じ帰り道を歩くだ

けじゃないですか。たまには、息抜きでもしてみませんか？」

坂本の言葉に、松原は喜色満面を抑えきれなかった。

「はいっ、息抜きしたいです。行きましょう、是非っ！」

松原はさっきまで萎んでいたのが嘘のように心持ちが晴れ上がっていた。地に足が着かな

いという言葉を身体で表してるように、気分が躍っている。

「どんなジャンルを普段観ますか？」

「普段は恋愛映画かアクション映画です、泣きたいときやスカツとしたいときに行くこと

が多いので。でも、ジャンルなんかどうだっていいです」

「どうだっていいんですか？」

「どうだっていいっていうか・・・坂本先生の観たいやつが観たいです」

正直すぎる松原の返答に、坂本は思わずフツと笑みを零す。

「やっぱり、かわいらしいですね、松原先生は」

坂本の言葉に、松原は以前の2人のやり取りを思い起こす。

「・・・からかわれてますね、また先生に」
暗闇の涼しげな舗道を歩きながら、2人は長閑に吹く夏風を身体に受けていた。

第8話

苑倉見高校での坂本は教師として申し分のない人間だった。まだ教師という職業に大い

な希望と可能性を抱いていたあの頃は、年齢的にも7歳ほどしか離れていなかった生徒た

ちを弟や妹のように可愛がり、自分から積極的に相談を請け負い、何事にも親身になって

対応していた。そんな坂本を生徒たちも兄のように慕い、何でもない世間話から、両親に

は言えない悩み事、友人とのケンカまで、他の教師には口にできない深い部分まで彼には

憚らずに告げていた。それだけでなく、休日に生徒の所属する草野球チームの試合に参加

したり、自分の担当ではない部活の公式戦にも生徒が出場するものは応援に行ったり、学

校では話しづらいという重い内容の相談なら喫茶店で話を聞いたりもしていた。当然、彼

は周りの教師からも一躍、一目置かれる存在となる。

「いやあ、坂本先生はパワーありますよね。中々、そこまでプライベートを削ったりでき

ませんよ。俺なんて、土日は家で昼過ぎまで寝て、ぐったり死んだように過ごすしか出来

ませんもん。いくら新任といえど、大したもんですよ」

「そんなことないですよ、僕も家に帰ったら死んだようになってますし。それに生徒とは

兄弟みたいな関係なんで、彼らのために動くことは苦にはなりません」

「それっ、それですよ。生徒と兄弟なんて、そうそう出来るもんじやないですよ。ウチの

生徒なんて、坂本先生のクラスがいいとか平気で俺の前で言いいますからね。俺になんて、

酒臭いだの、煙草臭いだの、汗臭いだの、そんなのばっかですよ」

「でも、先生のクラスはそういう会話のやり取りでコミュニケーションが成立してるわけ

ですから。形が違っただけで、ウチと変わりはしませんよ」

「いやいや、ホントに羨ましいかぎりですよ。坂本先生、人気ありますからね」

「えっ、そんなの初耳ですよ」

吉備先生の言葉にそう驚きを見せる坂本に、亜鈴先生がここぞとばかりに口を出す。

「知らないんですか、坂本先生。女子生徒のハートの赤丸急上昇中ですよ、私なんて生徒

からパイプ役みたいになされてるんですから。ルックスも上物、性格も人馴染みがいい、年

齢もビンゴ、三拍子ですよ。あのくらいの年の子たちって、ちょっと年上の大人な男に憧

れるんです。あっ、年上っていつでも限界がありますから、吉備先生。15・16の女の

子には、30オーバーはオヤジにしか映りませんよ」

「そんなことくらい、分かってますって」

亜鈴の皮肉に、吉備はフンツと鼻息混じりの返答をする。

「そんな怒らないでくださいって、事実を伝えてるだけなんですから。そう、そう、さっ

きも言いましたけど、生徒からパイプ役にされてて。坂本先生って誕生日いつなのか聞いて

きてくれて言われてるんです、いつですか？」

「10月2日ですけど・・・何でまた、そんなことを？」

「やだなあ、自分の誕生日と照らし合わせて相性を調べるんですよ。それで、結果が良かったら2人の未来に光が射すように喜んで、結果が悪かったら相性診断なんて真実味が無いとか否定して、どっちにしろ自分に都合のいいように解釈して先生への想いを募らせるんですよ」

「へえ、年頃の女の子はいろいろやることあるんですね」

「野郎なんて、駆け回るか、遊びまわるか、どっちかですからね。こういう思春期のところから、精神年齢で女子が上回っていくんでしょうね」

「そう、だから年上の男性に憧れを持つんですよ」

坂本は自分に想いを寄せてくれる生徒たちをかわいい奴らだと思った。坂本は彼女たちを妹のようにしか見ておらず、彼女たちの想いも一時のものと踏んでいたから。



「どうしたんですか、先生？」

ぼうっとしていた坂本に、松原が訊ねる。

「いや、何でもないです」

「もしかして、黒岩さんのこと考えてませんでしたか。今日は息抜きの日なんですから、タブーですよ」

「そうじゃないですよ、ちょっと考え事をして」

坂本と松原は先日約束した映画鑑賞に出掛けた。映画は坂本が観たかった宇宙使者からの攻撃に人間が立ち向かう洋画のSF、松原が観たかった家族の絆を描いた人情味あふ

れるストーリーの邦画を選んだ。対称的な2本だったが、松原の方を後にしたので映画館

を出るときには和やかな心持ちでいた。

「・・・私と一緒にじゃつまらないですか？」

「そんなことないですよ、何ですか？」

「先生、ずっと涼しい顔してるし、楽しいのか分からなくて」

「楽しいですよ、それに僕はいつもこんな顔じゃないですか。心配しなくても、僕は僕の中

中でちゃんと楽しくやってますよ」

「そうなんですけど・・・折角なら、楽しいときは楽しいって分かち合いたいんです」

「・・・そうですね、気が利かなくてすみません」

松原はグレーの水玉ワンピース、淡いインディゴのパンツ、ブラツクのヒールにゴール

ドのネックレスを合わせて来た。彼女がこれまで頭で思い描いていた、ファーストデート

のコーディネートだった。10代の頃から試行錯誤して辿り着いた、人生初デートに行く

ときの服装。10代の頃ならホワイトなどの明色で爽やかなイメージに見せたいと思って

いたが、20代になって頑張りがすぎずに落ち着いたイメージでいこうと現在の服装になっ

た。もちろん、坂本はこれをデートという位置付けにしてないのは百も承知だ。でも、松

原にとってはまがりなくこれはデートであり、これまで幾度と悩んできたコーディネート

の発表場であったのだ。

最初の入り口は良かった。待ち合わせ場所で松原の衣装を見て、坂本は可愛いですねと

言ってくれた。松原は心の中でガッツポーズしては、跳び上がりた

いくらの嬉しさに包

まれる。ただ、デートそのものは単調で、松原の想像していた夢空間とは違うものだった。

坂本はいつもと同じように冷静沈着に終始し、それが松原は嫌だと思った。折角の人生初

デートなんだから、いつもと同じなんて嫌だと。でも、それは致し方ない。坂本にとって、

これはデートではないのだから。

「飲みましょう、今日は息抜きですから」

「はい、そうですね」

ビールの注がれた中ジョッキで乾杯すると、2人に笑みが戻る。

映画2本を観終える頃

にはすでに宵の口で、辺りも薄暗くなりはじめていた。その足で向かったのはスポーツバ

ーで、2人はそこでサッカー観戦を楽しんだ。スポーツでは唯一の共通点がサッカー好き

で、今日は日本代表戦があつたのでここにしようと思った。バーの中にはユニフォーム

姿の若者が多数いたり、国歌斉唱から立ち上がって歌い出しては鬨の声を上げる者など、

いろんな奴らがいて面白い。

「先生、実際にサッカーやるんですか？」

「はい、遊び程度にですけどね。前の学校では休み時間に生徒に混じってやつたり、学生

時代の友人のチームに入ってたまに試合に出たりしてるんですよ。その友人は結構な腕

前で、学生時代は一目置かれる玄人はだしなプレーヤーだったんです」

「へえ、すごいですね。私なんか見るのオンリーですから、きっと

やったとしてもダメダ

メちゃんになるだけですし。でも、このサッカーの応援してる空間は大好きなんです。ゴ

ールが決まった瞬間の一体感がたまらなくて。最初は格好いい選手とかルックスから入っ

たっていう、不純な動機なんですけど・・・」

「いいんですよ、動機がどうあれサッカー好きがそこから増えてくれるなら」

「じゃあ・・・お言葉に甘えて」

試合が始まると、2人も周りの人間たちと一体化して応援に熱を注ぐ。一つ一つのプレ

ーに一喜一憂し、感情を露わにする坂本の普段とは違う姿が松原には新鮮だった。そして、

私はこの人が好きなんだと確信も抱いていた。

試合は前半23分、中村のクロスから相手との競り合いでこぼれたボールを加地が押し

込んだ1点を日本が守り勝った。日本の得点シーンには、バーの客全員が興奮の坩堝と化

した。坂本と松原も手を取り合って喜んだが、松原は坂本に手を握られてドキドキが止ま

らなくなってしまう。その後、彼女の「是非とも、もう何点か取ってください!」という

祈りは届かない結果に終わる。

「今日はスリルのある試合展開でしたね」

「そうですね、ドキドキしました・・・いろんな意味で」

「えっ？」

「いえっ、何でもないです」

いかんいかん、と松原は滑りそうな口をしめる。

「今日は坂本先生のいろんな表情が見れて楽しかったです」

「ああ、ああいうスポーツものになると熱中しちゃうんですよ。自分がやってるわけでもないのに、変ですよね」

「そんなことないです、坂本先生の新しい一面が見れて嬉しかったですよ。・・・よかった

ら、また息抜きに誘ってください」

「はい、また行きましょう」

勇気を込めて言った一言に応えてくれた坂本へ、胸が締められるようになるのを松原は

感じた。坂本への想いが次第に募っていく松原には応えないように、坂本は己の感情を抑

制する。松原ひのきという女性と関係が近づいていってるのは分かっている。松原側も自

分に月並みかそれ以上の接し方をしてくれてるのも分かっている。

でも、坂本にはそこか

ら踏み出せない弱さが胸の内にあった。また、同じことを繰り返してしまふんじゃないか

と思うと、前傾しそうになる感情に抑止をかけてしまふのが事実だった。

第9話

夏休みの期間、坂本と松原は黒岩嘉乃のいじめに対する疑惑の解明のために具体的に動くことはできなかった。彼らのもとにある情報といえば、黒岩のとなり、遺体に無数の

傷や痣があったという母親の証言、松原の自宅に送られたボロボロの教材道具、それぐら

いだ。黒岩がいじめられたと推測するには十分な根拠にはなったが、そこから解明へ向け

て動き出すにはまだ漠然とした情報ではあった。いじめられた側に関する情報ばかりで、

いじめた側に関する情報が皆無に近い。なので、いじめた側への調査に入る手掛かりが無

いに等しかった。さらに、唯一の物証であった教材道具も学校側にまわってしまったため、

夏休みという休暇期間に力を入れて調査を開始するのは難しかった。「すいません、私のせいで教材道具まで取られてしまっ

「起きたことを悔やんでも仕方ありません、次の手を考えていきましよう」

オレンジに染まる綺麗な夕焼けを背にし、2人はゆっくりと歩を進める。松原の蹴った

細石がコロコロ転がっていく様を目で追いかける。「あんなふうにうまいこと転がっていつてくれないんですかね、黒

岩さんのこと」

「難しいでしょうね、でも真実はつきとめましょう」

はい、と松原は清廉な微笑みで言う。道脇に寝転んでいた野良猫は随分と気持ち良さそ

うにしていた。前に見たときは夜道で気づかなかったが、結構ずんぐりむっくりした猫みたいだ。

「あの猫、いつもあそこにいるんですか？」

「ああ、かわいいですよ、あの猫ちゃん。大体、この道のどこかにいるんですけど、いつもくるっと体を丸めるんです。私にとっては、ちょっと癒し系だったりするんです」

「野良猫ですよ、ね？」

「そうですね、多分。捨てられたんですかね、あんな可愛いのにもったいない。でも、

そのおかげで私はいつもちょっと元気もらえてるんですけどね」

坂本が猫の側でしゃがみ、右手を体に添えると猫は嫌がる素振りを見せる。

「ダメですよ、寝かせてあげましょうよ、坂本先生」

そうですね、と坂本は猫のリアクションをもらうのを諦める。

坂本と松原は、松原の家の近くにあるレストランで夕食を摂ることにした。毎度毎度あの喫茶店というのもなんだし、現時点では話し合うこともあまりなかったから。

「美味しそうに食べますね、松原先生」

「はい、おふくろの味なんです、ハンバーグが」

坂本はおろしハンバーグ、松原はビーフハンバーグをオーダーして食する。一通り食べ

終わると、坂本はアイスコーヒー、松原はクリームソーダをオーダーした。

「松原先生は子供の好きなメニューが好きなんですね」

「・・・子供扱いしてます？」

「・・・多少」

「私、アルコールに換えます!」

ムツとした表情で店員を呼ぼうとする松原を坂本はなんとか抑えに入る。

「強いのがいいです、ウオッカよりもっと凄いのを頼みます!」

「そんな強いのかなか置いてないですし、冗談ですから落ち着いてください」

「嫌です、素面でなんかいられません。子供扱いなんかされたくないんです、大人として

見て欲しいんです。そりゃ、大人っぽいことなんかしてないかもしれないですけど」

「大丈夫ですって、ちゃんと大人として見てますから」

「・・・すいません、こういうのが子供なんですよね」

「しよげないでください、そんなこと言い合いに来たわけじゃないんですから」

松原のシュンと拗ねる様子に、黒岩嘉乃とのワンシーンが浮かんだ。



「先生、私は大人になれますか?」

ある日、理科準備室にいと黒岩から訊ねられた。どういった意味合いで投げ掛けられた質問なのか、最初は真意がつかめなかった。

「なれるさ、心配しなくても人は自然と大人になっていく」

「私は大人になっていいんですか?」

やっぱりだ、彼女の質問はいつも奥の深い意味が隠されている。

「なっっていいかどうかじゃなく、絶対に大人になっていくんだよ」

「私は人のことを憎んだり、恨んだり、妬んだりします。そんな自分が大嫌いです、そん

な卑しい部分を排除したいと思ってます。こんな未完成な私が大人

になっていくなんて間

違ってます。止めてください、私が大人になるのを」

黒岩が心身不安定であるのは分かったが、ここからどうすればいいのか。

「黒岩、世の中の人間なんて大抵はそうなんだよ。周りの人間に対して、自分より優れて

る部分をやっかむんだ。世間なんて、よく出来た大人の仮面を被った似非な大人ばかりだ。

黒岩はそれで悩んでる分、良い大人になれると思うよ」

「でも・・・嫌なんです、自分の思う嫌な大人に自分が近づいてくのが。耐えられません、

胸がギュツと痛くなってる。そうなりたくないって、なりふり構わずにもがいてる自分すら

汚らしく思えます。本当の自分が分からなくなってくるんです、あなた誰って誰何するな

んてしょっちゅうです。心ばかりの小さな幸せと、津波のように襲ってくる苦しさで、

もう壊れそうになってきて・・・」

一人に積もる苦しみに黒岩は呼吸も荒げそうだった。このままだと、本当に彼女の身体

がどうにかなりそうに見えた。坂本は他の誰も部屋に入って来そうな気配がないのを確か

めてから、黒岩を抱き寄せる。要注意人物としていた生徒にそんなことをしてしまうのは

間違いだと感じたが、ここで自分が彼女を抑えてあげないといけないな

かった。この高校には彼女の力になってあげられる人間は自分しかない、だから。

「先生・・・温かいです」

黒岩の不安定な状態は時間が経つごとに緩和されていく。黒岩は坂本の背中に手を回す

こともなく、ただ為されるがままにしていた。黒岩は坂本へ好意を持っている、高校1年

生の彼女にはこれで十分過ぎるほどだった。まだ、誰にもそんなことをされた経験がない

ので、それは黒岩にとっては動悸がするくらいの出来事だ。

「落ち着いたか？」

「はい、ありがとうございます」

黒岩の身体を離すと、その身体はもう穏やかな空気を醸していた。眼が合うと、黒岩は

一礼だけして走り去っていく。彼女はたまに心が一人歩きするようになってしまい、感情

のバランスが取れなくなってしまう。そして、それを宥めてあげる人間がこの学校にはい

ない。肝心の担任の松原もあの調子で彼女をコントロールしてあげられない。ただ、それ

は坂本にも重荷だ。彼はもう生徒と関係を近づけるのを拒んでいたため、黒岩に親身にな

ってあげられる懐の余裕は持ち合わせていない。結果的に、誰一人も黒岩嘉乃を満たして

あげられる人間はいなくなる。噛み合わなくなった歯車は次第に負の方向へと事を進めて

いき、最終的に最悪な結末を齎すこととなってしまう。

☆

「すみませんでした、僕のせいで」

「そんな・・・謝らないでください、先生」

先刻の松原への冗言を詫びた坂本に、松原は少し驚いた。

「急にどうしたんですか？」

「いやっ・・・元を辿れば、黒岩の力になってあげられなかった自

分にも責任の一端はあるんじゃないかと思って。ちょっとずつかもしれないけど、他人に積極的に向き合ってあげられるような人間にしたいくて」

「・・・私もです、私も黒岩さんの力になってあげられませんでした」

「松原先生は違います、ちゃんと積極的に向き合っていたんですから」

「でも・・・」と下を向く松原を「上を向いてください、黒岩のために動くことが必要なんですから」と坂本が宥めた。

坂本と松原の現状として、今回の一件について動き出すための情報を得ることが必須だった。

「何かないでしょうか、いじめに関する手掛かりになるものが」

「・・・うーん・・・」

2人でどれだけ考えても、中々これというものは挙がらなかった。しかし、松原が事態を急転させるほどのことを思い出す。

「そうだっ！」

「どうしました？」

松原のオーバーめのリアクションに、坂本も何かがあったのは分かった。

「沢川さんです、ウチのクラスの沢川さん」

沢川・・・1組の沢川花。

「お通夜のときにいたじゃないですか、黒岩さんの」

坂本は当日のことを思い起こす、確かに主任と松原と言ったお通夜の席で彼女と擦れ違った。

「・・・そうですね、いました」

「お通夜にいたっていうことは、沢川さんは黒岩さんと親しかったりしたんじゃないでしょうか。それか、黒岩さんが亡くなったことに胸を痛めているとか。もしかしたら、沢川

さんは何か知ってるのかもしれませんが」

「そうですね、そうだとしたら彼女は大きな手掛かりになります。

沢川と黒岩は元々親し

い方だったんでしょうか？」

「・・・私は2人が話してるのを見たことはありません。でも、当たってみる価値はあると思います」

「はい、でも出来るだけ内密に事は進めた方がいい。僕らが黒岩の件で彼女と接触してる

のがバレたら、学校側に対しての僕らの立場、生徒側に対しての彼女の立場がまずくなりそうなので」

「そうですね、慎重にですね」

「沢川は夏休み中に学校に来る機会がありますか？」

「確か・・・沢川さんは家庭科部なので無いと思います、夏休みに活動はしてないので」

「そうなる・・・こちらから直接彼女のところに行くしかないですね」

「はい、でも少しだけ希望が開けたような気がします」

沢川花、彼女からの情報次第では一気に解決に向かうことができます。ただ、黒岩のお通

夜の際の彼女は、物悲しさというより神妙な面持ちという印象がある。彼女と黒岩の関係

性、それが今後に大きく左右してくるのは間違いない。

第10話

苑倉見高校に新任として入った坂本はバレーボール部の顧問を任された。元々、顧問を

していた教師が前年度をもって他校へ移ったことが理由だが、幸いに坂本も中学時代にバ

レーボール部に所属していたため、多少なりの知識はあった。当然のように、ここでも坂

本は生徒たちからの人気を博すことになる。バレーボールの知識はありつつ、7年間も実

戦から遠ざかっているので実力は中学生レベルどまり。顧問としての役割を十分に果たしつつ、生徒以下の実力といういじられポイントも含まれており、生徒

たちとの兄弟関係に近い相互関係を担うには恰好の条件が揃っていた。（ヘタに上手すぎるとコーチと生徒という

はつきりした相互関係が作られるし、下手すぎると生徒たちにいいように扱われてしまう

だけだ）
バレーボール部においても、坂本に気を持つ女子生徒は少なからずいた。ただ、坂本へ

想いを寄せる女子生徒の全般は彼を「気の良いお兄ちゃん」という眼差しで見えていたため、

その好意はあくまで普通の高校生の持つ可愛らしいものであった。だから、坂本自身も彼

女たちを妹のように見守るような視線で見ている。そう、成海ミルコを除いては。

成海ミルコは、坂本が担任の1年5組の生徒だった。日本とスウ

エーデンのハーフに生まれ、その容姿は日本人離れしていて女性誌で見るとようなスレンダーなモデルのようだった。茶髪のロングヘアーでシャツは第二ボタンまで開け、スカートは膝上何cmという出で立ちも目立ち、高校生では入れないクラブに出掛けたとしても何の疑いもなく入店できるはずだ。身長は162cmで特別高いというわけではなかったが、彼女がグループの中にいても他の女子生徒とは違う一際輝くものがあつたのは言うまでもない。ただ、その外見の派手さと内面は結びつかない点が多くあつた。不良グループとでもつるんでいそうなイメージだが、実際はクラスの目立たないようなタイプの子とも積極的に打ち解け合う子だ。勉強なんかクソツタレとでも言いそうなイメージだが、実際は普段から小まめに勉強を積み重ねる着実な子だ。こと恋愛にしても、悪いやつらと夜な夜な遊んでそうなイメージだが、実際は恋愛ドラマや恋愛映画が大好きな周囲の学生と何ら変わらない子だ。自分のルックスにおごることもしない、手前味噌を並べたりもしない。大人のように、恋愛の蘊蓄や方程式を語ったりすることもない、反吐が出そうな気障な台詞を吐くこともない、自分の十八番を見せて気を引くこともしない。成海ミルコは、そういうギャップを多く持った不思議な生徒だった。

成海はバレーボール部にも入っていて、坂本と接する機会は多か

った。その風貌から先輩に目をつけられそうになるが、彼女の気立てのいい性格に触れるとそれ以上に事が運ぶことはない。まるでトリックでもあるかのように、近づいてくる者たちを敵にすることはなかった。

「先生、試験どこが出るか教えてよ」

そう成海が坂本に言う、ウフフッと笑う顔は本当に洋画にでも出てきそうな輝かしさ

の手本のようなものだった。成海の坂本に対する態度、坂本の成海に対する態度は、この

ときはあくまで教師と生徒の関係性を保っていた。

「そんなもん、教えられるわけないだろ」

「ウソ、ウソ、ここが分からないんで教えてください」

屈託のない笑顔だ、外見だけ見てれば彼女がそんな顔をするなんて思えない洗練された表情だった。

「理科の試験は明日だろ、大丈夫か」

「大丈夫だよ、何とかするから」

そう言いながら、バイバイと教科書を振りながら去っていく。このときは、まだ坂本も

成海も2人とも平静な関係だった。

☆

松原は沢川花の通う塾のあるビルの近くで彼女の帰宅を待っていた。沢川が文化部で夏

休み中に学校へ来る可能性が低いということで、彼女の通う塾で待ち伏せをすることにし

た。家の前で待っていても彼女がいつ帰宅するかは分からないが、

塾ならば授業の終わる
時間は調べればすぐ分かるので都合がいい。授業の終わる20時半
の10分前に着いて沢
川を待っていると、その20分ほど後に右肩にブルーグリーンのリ
ュックを提げた彼女が
現れた。

「沢川さん」

松原が呼び止めると、振り向いた沢川は驚いた様相を見せた。

「どうしたんですか？」

「うん、実はね、ちよつと沢川さんに聞きたいことがあるの」

「・・・はあ」

「ちよつといいかな、ここで話すのもなんだから」

そう言うのと、松原は「こっち、こっち」と誘導しながら近くのコ
ーヒーストアへ向かう。

沢川はただ導かれるままに付いていく、何故に担任の教師が塾の前
にまで来て自分に聞き

たいことがあるのか、と。

「ごめんね、ここは私が奢るから頼んで」

「・・・はあ」

松原はココア、お言葉に甘えてと沢川はカップチーノをオーダーす
る。

「夏休みも塾なんて大変だね、折角の休みなのにあんまり遊べない
でしょ」

「・・・はい、そうですね」

疑心を抱かせないように笑みを絶やさないことを心掛けていた松
原だが、目の前の沢川
すれば現在この状況自体が不自然極まりないのが事実だ。

「学校の宿題もあるもんね、嫌になっちゃうよね」

「・・・学校の宿題は先生が出してるんですよ」

「あつ、そうか・・・そうだよね、言われてみれば」

アハハと松原は笑ってみせるが、沢川は顔色を変えることはない。
「・・・先生、話って？」

痺れを切らしたのか、沢川が本題を吹っ掛ける。

「あつ、そうだよね・・・あのね、成績が悪いとか、授業態度がどうだとか、そういう話

じゃないからリラックスしてほしいんだけど」

はいと答える沢川に、松原が本題を話し始める。

本当は坂本も同行したいところだった。松原ではちゃんと事を済ませられるのか、少々

心配なのが本音だ。ただ、教師が2人も塾の前で待ち構え、生徒1人に聞いただすのはさ

すがに違う。沢川がへたに考えて構えすぎてしまい、スムーズに事が運ばなくなる。なの

で、ここは1人で動くのが理想になる。そして、どちらが行くのかということになれば、

担任である松原が行くのが自然だ。こうして、彼女が今回の役目を担うこととなった。松

原自身は正直ドキドキしていた、いざ始まってしまえば大丈夫なのだが。これまでは坂本

が大きな後ろ盾になってくれていたが、今回に限っては自分1人に責任がかかっている。

坂本に度量を試されてるようでもあり、鼓動の波打つ速さは通常の2割増になっていた。

「話っているのは黒岩さんのことなの」
「・・・はい」

沢川花は依然、顔色を変えないままで答える。

「沢川さん、黒岩さんのお通夜の日に来てたよね。ほらっ、黒岩さんの家で擦れ違ったじゃない」

「・・・はい、そうですね」

「沢川さんって、黒岩さんと仲良かったりした？」

「・・・」

沢川は松原と視線を合わせたままで押し黙る。

「生徒の中でね、あの日お通夜に来たのって沢川さんだけなの。もしかしたら、黒岩さん

と仲が良かったのかなって思ってた」

「・・・」

沢川は押し黙ったまま、合わせていた視線をやや強める。

「あっ、答えたくなかったら答えなくてもいいの。こっちが聞いているだけだから、沢川さ

んは絶対答えなきゃいけないってことじゃないし。スルーして、流しちゃって、今のは」

沢川の強い視線に、松原は意気地を曲げてしまう。坂本から「無理は絶対しないように」

と念を押されてたので、ヘタに追求はしないようにした。日和をしつかり見て、自分の任

務を無事に終えることが大事としていたから。

「・・・何で、そんなこと聞くんですか」

「えっ？」

「私が黒岩さんと仲良しかどうかを聞いてどうするんですか」

「えっと・・・それはね・・・」

松原にとって、最も困る質問をされてしまった。内密に動くことを根本としているのに、

バレてしまっただけは元も子もない。沢川から学校や生徒たちにそれをバラされ、生徒側から

自分たちにいじめの疑いを持たれてると責められ、保護者から学校へ届いたクレームで学

校側から嚴重注意を受け、坂本からも杜撰さの余りあると愛想をつかされてしまう。

「私のことを疑ってるんですか？」

「ううん、違う、違うの。私は黒岩さんの事件の真相が知りたいの。それで、あのときに

黒岩さんのお通夜に来ていた沢川さんなら何か知ってるんじゃないかと思って。ただ、それだけなの、本当よ」

捲くし立てるように一方的に言葉を連ねる松原に、沢川の口元が微かに綻ぶ。

「・・・分かってます、言ってみただけですから」

「ああ・・・うん」

少し我を忘れてしまっていた松原は心持ちを落ち着かせる。

「松原先生っていつも熱心ですよ、見てて羨ましいです」

そう言うと、沢川は立ち上がって床に置いていたリュックを右肩に掛ける。

「沢川さん？」

「先生、答えたくないなら答えなくていいって言いましたよね」

「・・・ああ、うん」

「すいませんけど、そういうことで失礼します」

急な事の成り行きについていけず、松原は目をやや丸くさせていた。

「大丈夫です、誰かに言ったりしませんから」

松原を見透かしたように言い置き、沢川は帰っていく。残された松原はポカンとして、

空虚な心持ちになっていた。覚悟を決めて沢川に近づいたのに、返ってきた結果の少なさに。

第11話

時計の針は20時を指している、まだ店内には3組ほどの客がいた。

「すみません、私のせいで」

沢川花と接触を図った翌日、松原は坂本に詫びた。老夫婦の営む喫茶店は夏場でも冷房

をあまり効かせないようにしているらしい。店内の温かみのある雰囲気や流れてくる音楽とそぐわないからというのが理由だ。

「何言ってるんですか、十分ですよ。そこで突っ込みすぎて、向こうに警戒心を必要以上に持たれたらいけませんし。松原先生の対応はよかったと思います」

「・・・本当ですか？」

本当ですと言うと、松原はホッと胸を撫で下ろす。

「安心しました、まずいことしたと思ってたんで。先生に怒られるんじゃないかと思って、

昨日あんまり寝つけなかったんです」

「怒ったりなんかしませんよ、松原先生に一手に任せたんですから。結果がどうあれ、僕

がああだこうだ文句は言えません」

「・・・じゃあ、本当は怒ってるってことですか？」

「本当に怒ってませんよ、疑いすぎです」

「・・・そう、そうですよね」

松原のココア、坂本のブラックコーヒーからは白い湯気が昇り立つ。

「黒岩のことを聞かれて、沢川花はどういった感じでしたか？」

「さっきの坂本先生の言葉で言うと、ある程度の警戒心は持っている

様子でした。最後は笑

って流してましたけど、本当はそれだけじゃないと思います」

「うん、結果として黒岩との関係について話さなかったわけですね。でも、裏を返せば、

それは彼女と黒岩に何らかの関係性があると予想づけることもできます。2人に何も無い

んだとしたら、沢川はその場で何も無いと言えはいだけですから」「そっか・・・そうだ、なるほど」

沢川花は松原との会話の中に、黒岩嘉乃との関係性の有意を含ませていた。「もしも、自

分が黒岩嘉乃の自殺で疑われていたら」と懸念しているのならば、そんな自ら掌を広げる

ようなことはしないのが普通だろう。なのに、沢川はそこで発言をはぐらかした。その意

味は何なのだろう、わざわざ僕らにヒントを置いていくようなことをした彼女の真意は。

「松原先生、本当に黒岩と沢川が接してるのを見たことはないんですか？」

「・・・はい、記憶にないです」

そこが分かれば大きく前進できるのだが、そう易々とはいかないようだ。

「黒岩と沢川って、1組の中で交流のある可能性はありますか？」

「黒岩さんと沢川さん・・・」

そう松原は考え込む、2人のクラスにおけるポジションについて。

☆

4月、清廉な心持ちで松原は群青高校の校門をくぐった。ここからが私の輝かしい教師

生活の幕開け、煌びやかな学校生活の日々が待ってるのよ、と清々

しい心内でいた。新任である松原が受け持ったのは、1年1組。その1並びすらも、自分のスタートを祝ってくれたものだと感じることができた。いざ1組の教室扉の前に立つと緊張による萎縮も覚えたが、「いかん、いかん」と湧いてくる緊張を縛りつけて扉を開く。

「ええと、これから1年間、この1組の担任になる松原ひのきです。私は大学出たばかりで教師生活1年目で、皆と同じ1年生です。何分、至らないところもあると思うけど、よろしく願います」

その言葉のとおり、松原は生粋のドジっぷりで数々の至らないところを見せてしまう。忘れ物だったり、落し物だったり、彼女が新任ということは関係のない、彼女自身の持ち前の性格によるものであった。ただ、それも松原の優美で愛嬌のある性格から、お茶目に映ってしまうものであり、生徒たちからも毎度のような「しょうがないなあ、先生」というツツコミで済ませられてしまうところだった。松原がその真っ直ぐな性格で向き合おうとしているのを生徒たちも分かっていたため、生徒側も彼女の失敗を放り捨てるようなことはしない。そうやって、不器用ながらも彼女は1組の担任として日々奮闘を続けてきた。

黒岩嘉乃は松原も真っ先に憶えた生徒だった。教室の中でも唯一無二のオーラを放ち、存在感が有るようで無く、無いようで有った。授業中、多くの生徒

の中に紛れると、そこにいないんじゃないかと思うほど存在感が無い。休み時間中、多くの生徒が集団になる中でポツンと1人になると、これ以上ないほど存在感が有る。彼女自身にそんな意識はないし、彼女がやっていることに大差はない。周囲の環境の如何によって、彼女の存在が際立ったりするのだから不思議なものだ。

窓側から三列目、前から二列目、松原の立つ教壇と目と鼻の先の席で、彼女は大概の間を過ごす。授業中は教師の話に耳を傾け、真面目に勉学に打ち込む。休み時間はスクールバッグから小説を取り出し、自分の世界に入り込むように読み耽る。弁当も1人で食べて、昼休みになると図書室でまた本を読む。学生の本分は勉強だ、という誰かれの言葉を借りるのなら、彼女はその模範的な生徒になるだろう。しかし、彼女が模範的な生徒ではないことは事実千万である。集団にいと黒岩のような生徒は必ず浮く。感情を表には出さず、孤立する運命に自然となってしまう。松原も黒岩と打ち解けようといういろいろと話しかけてはみるのだが、彼女の独特の世界観を理解できずに毎回悩まされる結果となるだけだった。

沢川花はこれといって、目立つところのない生徒だった。黒岩とは対称的に、彼女はいつも集団の中にいる。仲の良い女子たちと四方山話に花を咲かせる、いたって普通の女子

高生だ。手の掛からない、担任としては喜ばしいかぎりの生徒なのだが、授業やホームルームで自分から挙手して発言をすることもなく、休み時間に大声を上げてうるさくしたりもせず、女子生徒の中でも率先して話を切り出すようなリーダー格でもなく、授業も真面目に受けている、取り立てて突出したところのない子だ。激動するような日々を好まず、毎日と同じように過ごすことを好む。松原に対しても、特別といったアピールは見せない。廊下で会えば普通に挨拶を交わす、松原から何かを聞かれれば冷静な様相で返す。自分から何かを発信することが少ない、実体の掴みにくい生徒だった。

☆

「黒岩さんと沢川さんに共通点があるとすれば、本音を前面に出さうとしないところでしようか。黒岩さんは自分の殻に閉じこもってしまうし、沢川さんは周りの流れに身を任せしてしまう。本音を出さないというより、吐露する捌け口がなかったのかもしれない」

「・・・それはそれで孤独なのかもしれませんね。沢川の場合、打ち解ける仲間がいるのに本音を出していないということでもんね」

「黒岩さんは私に定期的に話しかけてくれたんですが、沢川さんは彼女の方から何かを発してくれないんです。沢川さんから話しかけられるとすれば、授業や係に関する義務的なものぐらいで。彼女、何かを見切ってるみたい、妙に落

ち着いてるんです。そ

れがまた、黒岩さんとは違う、掴みどころのなさを感じるんです」

沢川花、彼女は黒岩の事件の真相を知る上で大きなポイントになりそうだ。そして、彼

女を味方につけるのが難易であることも同時に感じていた。松原の言葉からすれば、彼女

は結構にややこしい構造の感情を持っている。僕らにそう簡単に心の内を明かしてはくれ

そうにない。でも、黒岩に繋がりそうな人物が出て来ただけでも大きな進歩だ。時間をか

けてでも、沢川花から真相に触れる話を聞き出そう。

「また、私が沢川さんに接触しますか？」

「いえ、今は時間を置いた方がいいと思います。事が事ですから、早急な解決も大事です

が慎重に動く方が大事です。無理はしなくていいんで、今は急くことはせずにいきましょう

う」

「はい、そうですね」

そう言って、松原は少し笑みを浮かべる。自分の中で、自分の身体の中に蠢くモヤモヤ

を早めに失くしてしまいたい気持ちと、こうやって坂本と2人で共同の作業をしたい

気持ちと、両極の思いの狭間に彼女はいた。

第12話

苑倉見高校で1年5組を受け持っていたとき、坂本にとっての成海ミルコはただの妹のような生徒の1人でしかなかった。早稲な様を持ち、艶っぽさも兼ね備えながら、蒲魚ぶったりはしない素直な良い子であり、いち女性としては申し分のないが、同級生からすれば憧れはするが高嶺の花が関の山だった。実際のところ、彼女には5つも年上の大学生の恋人がいる。

「私ね、明日彼氏とデートなの」

「ふうん、よかったな」

成海はよく坂本にその大学3年生になる恋人の話をする。バレエボールの部活終わりに備品を片付けているとき、理科準備室で勉強しているとき、職員室で雑用をしているとき、種々の場所に現れては惚気るような話をしていく。

「ドライブするんだって、湘南の方に行くみたい」

「ふうん、よかったな」

正直、こんな話はうんざりするほど聞かされた。坂本の返答に愛想がないのは、それまで積重されてきた結果だ。

「ちょっと、先生、聞いてんの!？」

「聞いているさ、返事してるだろ」

その返事はしてるだけであり、坂本の比重が目の中の雑用に向いているのは誰の目にも分かるものだった。

「そういうのはね、返事してるうちに入らないの。右の耳から入れて、左の耳から出して
るだけ。これだから、先生って嫌なのよ。堅物ばかりでしょ、教師って。坂本先生はマ
シな方だけど、それでも柔軟性が足りないよ。もつとさ、生徒1人1人に目を向けてかな
いと、すぐウザがられるよ。嫌いな教師にノミネートされるのも、近い将来なんじゃない?」

職員室で筒抜けになる成海の声に、吉備先生が素早く反応をみせる。

「きつ、嫌いな教師のノミネートとかあるの?」

「はい、あいつウザいよねって。結構、これが盛り上がるんですよ」

「もしかして、それって・・・」

「ああ、吉備先生は常連ですよ」

一様にショックを受ける吉備を見て、その場は笑いの渦となる。

「分かるじゃないですか、自分のこと見てれば」

一々、怪我人にダメージを与えるように亜鈴先生が言を発する。

「なっ、何で、何でなのさ。生徒たちに嫌われるようなことした覚えはないよ」

「充分あるじゃないですか、親父ギャグと体臭っていう」

一々、傷口に針を刺すように成海が言を発する。

「あんまりだ、あんまりだあ」

落ち込む吉備を横目に、亜鈴と成海がイエイとハイタッチを交わす。成海はこんなよう

に、教師ともうまくコミュニケーションを取れる。外見からすれば、真っ先に目をつけら

れるところだろうが、彼女の実直な部分に触れれば自然と敵にはならなくなる。不思議な

女の子だ、そう坂本は成海を見ていた。

「だからあ、男の人はどういうプレゼントが欲しいの？」

また今日も坂本の前に来ては、職員室に響くような声で成海が訊ねる。どうやら、彼氏

に渡すクリスマスプレゼントで悩んでるらしい。

「だから、何でそれを俺に聞きに來るんだよ」

「だって、この学校の中で1番年齢が近いのが先生なんだから」

尤もな意見を提げて、そう坂本に詰め寄る。

「あのお・・・一応、ここにも大人の男性が」

うるさいんだよ、という睨むような目線で成海が吉備の言葉を遮る。

「俺に聞いたって意味ないだろ、根本的に人間が違うんだから」

「いいの、参考意見として聞くだけなんだから」

さっさと言いなよとばかりに、眉間に皺を寄せて言う。

「手作りとかでいいんじゃないか、気持ち伝わって嬉しいと思うよ」

「でもさあ、手作りって安っぽくなるじゃん」

「いいんだよ、高校生なんだから金がないのぐらい分かってくれるよ。それに、安っぽい

ぐらいが手作りの醍醐味ってもんだろ。既製品みたいな完成度の手作りなんて、有難味が

半減するだけさ」

「ふうん、そんなもんなんだ」

ありがとねと言いつつ残りし、成海はその場を後にする。彼女が去ると、いつも淡いムスクの

残り香が坂本のところにまで漂う。彼女の付けている香水は清潔感があらわれ、それがま

た彼女自身の印象とのギャップを齎す。

「成海さん、よくここに來ますよね。よっぽど、坂本先生のことが好きなんですね」

亜鈴はいつも坂本と成海のやり取りを微笑ましく見守っている。

彼女自身、学生時代

は成海に近いタイプだったようで、自分と置き換えやすいんだそう
だ。

「違いますよ、自分が幸せなのを見せつけたいだけなんですよ。僕
が独り者だって知って
て、良いでしよって一々近況を伝えてくるんです。楽しんでるんで
すよ、僕のことをから
かって」

「そうかなあ、私には好き好き光線を発しまくってるように見える
んですけど。私、学生
時代は好きな人の前だとツツパっちゃう人だったんで、よく分かる
んですよ」

「そんなことないですって、だって散々ここで惚気話を聞かされて
るじゃないですか。基

本的に、僕のことを見下してると思うんですよ。理科なんて大人に
なったら絶対使わない
し、とか平気で言い捨てますからね。理科教師っていう、僕の肩書
きを全否定してるよう
なもんですよ」

「それも、愛情の裏返しってやつだと思うんですけどねえ。だって、
先生のことをウザが
ってたら、ここにそんなに来たりしないじゃないですか」

「まあ、それは言えてますけど」

「そうですね。吉備先生のクラスの生徒なんて、来たって連絡事
項や報告がほとんどで
すもん」

「亜鈴先生、それ何気にひどい・・・」

亜鈴のいらぬ一言に、吉備がぼそっと呟く。

「それに比べて、坂本先生のクラスの生徒は結構居つくじゃないで

すか。愛されてる証拠
ですよ、日頃の行いがいいから。あつ、吉備先生が愛されてないっ
てことじゃないですよ。

吉備先生にはそれなりの良いところがありますから、とつつきやす
いとか」

「亜鈴先生、それフォローになってます？」

亜鈴の微妙なフォローに、吉備がぼそつと呟く。

「まあ、高校生活を謳歌してくれてるのは嬉しいんですけど
どね。その中で、僕に

手を貸せるものがあれば手助けしてあげたいし」

素直な坂本の言葉だった、これが生徒たちへの坂本なりの愛情だ。
その中において、成
海はまだ「生徒たち」の1人でしかなかった。

☆

8月も中旬に差し掛かり、黒岩嘉乃の事件に関する調査は小休止
となっていた。松原が

1週間の休暇で実家へ戻り、その翌週には坂本が休暇で実家へ戻る
ため。沢川花から話を

聞き出す事に失敗し、一旦時間を置きたいところだったのでちょう
どいいタイミングかも
しれない。

「すいません、今日はお誘いしちゃって」

「いえ、家にいても特別することも無いんで」

盆の時期になると、学校には生徒も教師も姿があまり見えなくな
る。熱心な運動部、受

験を控える3年生、それぐらいだろうか。坂本は図書部の担当であ
ったのだが、正直これ

といった仕事はない。図書の貸し借りの受付は生徒が交代制で務め

るので、名ばかりと言

っていい管理者、リクエストのあった図書の手配、それぐらいだ。
なので、夏休み期間中

は顧問が休暇中である部活の臨時顧問に回される。とはいえ、担当
外の部活の知識など持

ち合わせてるはずもなく、そんなことを求められてるわけでもなく、
1時間に1回程度に

活動状況を見に行くぐらいのものだ。その合間に雑用を済ませてお
き、その部の練習が終

了すれば坂本の仕事も終了という流れになる。この日はハンドボー
ル部の臨時顧問をし、

18時過ぎには仕事を終わることができた。

「坂本先生、今日は終わりですか？」

「はい、主任も終わりですか？」

退勤時間が重なったため、「よかったら、飲みにも行きませんか？」と主任から誘われ

た。いつもの居酒屋へ行くと、主任は馴れたように「中生、2つ」とオーダーする。運ば

れてきた中生を思い切りよく飲んでいくその姿は、変に板についている。

「主任、飲みっぷりいいですね」

「当たり前ですよ、仕事の後のビールより美味しいものなんてないですから。特に今の時期

なんて、年間で最もビールの美味しさの際立つときですからね」

さあ飲んで、と主任は坂本にどんどん促していく。それにより、結構なハイピッチで飲

み続けてしまうが、坂本は飲酒の量ほど酔いは回らなかった。主任が坂本を上回るピッチ

で飲み続け、すっかり出来上がってしまったため、自分は介護役にまわらないと思う、

坂本は平生を保っていたようだ。

「ふざけんな、学校なんて奇人変人の集まりだ。聞き分けのないガキども、世間体しか気にしない保護者、言い訳ばかりの達者な教師、自分だけがかわいい上司、訳分かんねえ！」

出来上がった主任は、最悪な毒舌人間に変わっていた。いつもの、学年主任という肩書

きに恥じない沈着冷静な姿はどこにもない。

「何も分かってねえクセして、分かったような口きくんじゃねえつつうんだよ。ねえ、坂本先生？」

坂本の腕をグツと掴み、答えを強制するように主任が訊ねる。質問的に答えあぐねてる間、合わさっていた目線を主任は勘違いして捉えてしまう。坂本に見つめられていると思いい、変な感情が蠢き出してくると、掴んでいた手を解き、坂本の体に触れ始めていく。

「主任、どうしたんですか？」

「主任だなんて止めてください・・・名前で呼んでください」

そう言いながら、両手を坂本の右の掌に絡めだす。主任の名前は藤野空子である、もち

ろん坂本がここでそう呼んだりはないが。28歳という若さで群青高校1学年の学年主

任を任されている。冷静で、判断力があり、統率力のあるところを認められ、昨年に抜擢

されたらしい。顔立ちも言うことではない、松原のようなお嬢様っぽい可愛い女性、物

織のようなイマドキの若者っぽい女性、それとも違う清楚な撫子風の綺麗な日本女性だ。

ただ、今にいたっては、そんな女性の鏡のような姿は微塵も見受け

ることができない。

「このまま、良いところに行きませんか？」

坂本の右肩に頭を乗せて寄り添うと、好色な顔つきで坂本を見遣ってそう言った。

「心配しないで。私、先生が思ってるより上手だから」

「ダメですよ、そんなこと。いつも言ってるじゃないですか、生徒や保護者の目があるっ

て。言った本人が破るのはまずいと思います、今日のところは帰りましょう」

何とも言えない空気感の中で、この場をやりすごそうとする。

「大丈夫ですよ、私も坂本先生もいい大人なんですから。大人同士が同意の上で行為には

しって、咎められる方がおかしいんですよ」

会話をしているうちにどんどん酔いが回ったらしく、主任は目も半開き状態になる。迫

られることはなくなったが、彼女を家まで送り届ける役割となってしまう。帰路の間も

人恋しさに駆られるように、坂本の腕に絡みついたままで眠ってしまふ。結局、飲みの御

代も、主任を送るためのタクシー代も、坂本持ちという痛い結果となった。

第13話

翌日、職員室に頭を押さえながら現れた主任に、その場に居合わせた物織は大層珍しかった。

「主任、二日酔いですか？」

「・・・はい、飲みすぎました」

「主任が酔っ払うなんて珍しいですね、1人で飲んだんですか？」

「・・・いいえ」

そう言いながら、主任は右斜めの席の方へと顔を上げる。その視線は、線先にいた坂本とぴったり合った。

「坂本先生と飲んでたんですか？」

「・・・はい、昨日、終わりが一緒だったの」

「へえ、じゃあ、坂本先生は主任が酔っ払ってるところを見たんですよ」

「ああ、まあ、そうですね」

「どんな感じでした、崩れてる主任って？」

「ええ・・・そうですね・・・」

昨日の主任のどこまで話していいか分からず、坂本は少し返答に困った。

「ベースは変わりませんよ、いつもの感じのままでした」

「へえ、主任は酔っても崩れないんだ」

坂本は嘘でごまかした。折角の主任の風格を自分の一言で一瞬にして壊してしまうのはなんだなと思って。

「すいません、昨日はご迷惑おかけしまして」

臨時顧問のハンドボール部の練習を見に行こうと職員室を離れると、すぐに主任が着い

てきて昨日の謝罪の年を述べる。

「ああ、いいんですよ、そんなことは」

「日々のムシヤクシヤした感情が溜まってくると、お酒の力で一気に発散するタイプでしょ

で。で、私、酔っ払うと言いたい放題に言って同席者に絡むらしくて。その・・・私、何

かチョンボしてませんでした？」

「そうですね・・・確かに、実は豪快な人なんだなって、イメージは変わりましたけど。

でも、その年齢で主任とかやってたらストレスも溜まりますしね。僕でよければ、愚痴の

一つや二つは聞きますよ」

「すいません、学校の中でそういうの言い撒けることができる人がなくて。坂本先生だ

ったら赴任してきたばかりだし、まだ私のイメージが固まってないんじゃないかなと思っ

て、お誘いした次第なんですけど」

「松原先生も新任ですよ」

「松原先生だと、酔うと彼女に説教を始めちゃいそうで」

「ああ、なんとなく分かる気がします」

坂本が口角を上げると、主任もそれに倣うように続けた。

「あの・・・それで、昨日のことは他の先生方には内緒にしておいてもらいたいんですが」

「ああ、もちろん。言ったりしませんよ」

「ありがとうございます。一応、学年主任としての威厳があるんで」

「そうですね。ホテルに行きましようって誘われたなんて、口が裂けても言いませんから」

眼を丸くさせて立ち竦む主任を残し、坂本は笑みを含ませて去っ

ていく。そういえば、
黒岩嘉乃ともこれに似たようなシーンがあった。

☆

その日、学校で仕事を終えた20時過ぎ、駅までの通勤路を歩いてるときだった。急に

肩先を押されたので、後ろを振り返ると黒岩がそこにいた。

「おお・・・どうした、こんなところで」

「塾の帰りです、前の方に先生が見えたから早歩きで追っかけてきました」

その言葉のとおり、目の前の黒岩は少し息を切らした様子でいた。黒岩はパーカーとジ

ーンズという出で立ちであり、制服姿以外の彼女を目にしたのは初めてだったので新鮮に

映った。

「よかったら、駅まで一緒に歩いてってもいいですか？」

「ああ、もちろんいいけど」

そこから駅までの道を黒岩と歩く。今日の彼女は御機嫌がいいのか、会話もいつもより
流暢で、ぎこちなさも残るが笑顔もところどころに見ることができた。

「何かいいことでもあったの？」

「いえ、先生と学校以外で会えてるってことが何だか嬉しいんです。人生、悪いことばかりじゃないんだなって思っ

「言いすぎだろ、それは。俺がたまたまここを歩いてて、黒岩がたまたまここを歩いてただけなんだから」

「それでも、結構な偶然だと思います。私、先生のことを考えてる

ときが1番幸せなんで

す。学校で先生を見たときとか、先生と話したときとか、そういう家で思い返して」

「へえ、俺は黒岩の妄想の世界で頻繁に出演してるみたいだな」

「・・・ごめんなさい、こういうの気持ち悪いですよね」

確かに坂本にとって、それは気味の悪いものだったが、そんなの誰しもが通る道ではあ

った。黒岩だって思春期の女の子で、好きな相手がいればその人を想うのは当然の流れだ。

「そんなことないさ、俺も学生の頃は好きな子のことを一日中考えてたりしてたよ。それ

こそ、あらぬ妄想だって腐るほどしたさ。野郎なんてそんな生き物さ、女子の方がまだ清

潔だと思うぞ」

「・・・私もしてますよ、あらぬ妄想」

「・・・それって、俺とか？」

「・・・はい・・・すいません」

さすがに複雑な心境になったが、黒岩を責めることはできない。彼女と年代のとき、

同じことをしていた自分が言えた義理などない。それに、そういう面には疎そうな黒岩

の思い描く画など、大したものではないだろうし。

気まずい雰囲気の中で歩いてると、黒岩が急に足を止めた。振り

返ると、彼女は曲がり

角の右方向を見ていた。そっちに何があるのかは知っていた。商店街から一步外れたところ

にある、他の店とは夜に光る照明の色味が違う建物。高校生の通学路の一步先にあるに

は、御門違いな空気を醸している。

「どうした？」

そう優しく声を掛けると、黒岩嘉乃は見つめながら言った。
「あそこ・・・あのホテル、ウチの生徒の間では結構有名らしいんです。ウチの学校でカ

ップルが出来ると、あそこに行くのがならわしらしくて。みんな、あそこで処女や童貞を

喪失すると一人前みたたく、ステータスが向上するそうです」

「ふうん、そんなしきたりは知らなかったな」

黒岩が変なことを切り出さないように、なるべく目線は外していたが無駄だった。

「・・・先生、あそこと一緒に行ってください」

「・・・黒岩？」

「・・・もらってください、私の初めて」

思った以上の直球に驚きはしたが、もちろん坂本にその気などない。目の前にいる、パ

ーカーにジーンズに黒縁メガネの陰気な15歳にヘタな感情が沸いたりはしない。それに、

前に坂本に抱きしめられただけで動悸を起こしそうになった彼女が本気でそこまで言ってるのかも不明だった。

「黒岩、悪いが俺にとってお前は生徒でしかないんだ。それに、まだ赴任したばかりだし、

誰かにそういう恋情を持つ気持ち自体ない」

「・・・はい、言ってみただけです。気にしないでください」

黒岩は気丈に振る舞いながら、唇を歯でクツと噛み締めていた。甲斐性無しだと言われ

ようが、彼女の初心な恋慕の情に応えることはできなかった。

「一つだけ、聞いてもいいですか？」

重くなった足取りで駅に着くと、別れ際に黒岩から訊ねられる。

「私のこと、嫌いじゃないですよね？」

「ああ、嫌いなわけないだろ」

「・・・ありがとうございます、それで充分です」

フツと笑みを見せると、黒岩はさようならと人の中へ消えていった。

第14話

成海ミルコは週に2、3回のペースで坂本の側で長話を囁けてくる。つまり、2日に1

回以上というペースにだ。よくもまあ、そんなに話題があるなど思いつつ、坂本は彼女につきあわされていた。

「あつ、そういえば、クリスマスプレゼントだけど、ぬいぐるみにしたよ。先生は手作り

の方が気持ちが伝わるって言ってたけど、やっぱり無難にしておいた」

「いつの話してるんだよ、2週間も前だろ」

「だって、クリスマス・イヴから冬休みだったんだから、先生に話す機会ないじゃん」

今日も、成海からは淡いムスクの香りが伝わってくる。彼女の外見には似つかわない、大人っぽさも窺わせる。

「先生、私、期末テスト頑張ったでしょ」

「頑張ったって言っても80点だろ、上にいくらでも秀才はいるよ」

「違う、私にしては頑張ったってことだよ。理科なんて訳分かんないって言ってる私が8

0点だよ、もっと認めないと。素直になることも大事だよ、先生」

「確かに伸びてきてるけどなあ、特別といって成績が良いわけでもないし」

坂本はいつものように成海の思惑を外した回答に終始する。毎度しつこく現れる成海へ

のささやかな抵抗というわけでもないが、それに対して食い下がってくる彼女とのやり取

りに面白味があった。

「私ね、1学期の中間テストは58点だったんだよ。それを分らないなりに頑張ったら、あれよあれよの80点。私の中ではもうほとんど満点だよ、これ以上は何をしろってぐら

い。80点の答案を貰ったときなんか、嬉しくて顔がにやけたんだから」

「ふうん、じゃあもっと点数を上げたら、もっと嬉しくなるんじゃないか？」

「そんなこと言って欲しいんじゃないの、分かるでしょ。分かっ

てすかしてるんだよ、嫌な性格だね。だから言ってるんだよ、教師なんて堅物だって。私が教師だったら、頑

張った生徒をまっすぐに褒めてあげるのに」

「なんだ、褒めて欲しかったのか。よくやった、よくやった」

「うっわ、ムカつく！」

蔑ろにした言動の坂本に、速攻で成海はイラついた。その成海の反応に笑い出すと、堪

忍袋の緒が切れてしまったようだ。

「ろくな死に方しないよ、絶対！」

啖呵を切って、捨て台詞を言い残して成海は帰っていく。

「あああ、怒っちゃいましたね」

「ホント、坂本先生は良い様に成海さんを扱いますね」

坂本と成海のやり取りを見ていた吉備先生と亜鈴先生が言う。

「素直に褒めてあげればいいのに、よく頑張ったなって」

「いいんですよ、これはこれで成立してるんですから。それに、あいつはあいつで楽しん

でるんですよ。やられても、やられても、明日か明後日にはまた来るんですから」

確かに、と吉備と亜鈴は頷く。

「でも、いいですねえ、青春を謳歌してて。学校では坂本先生や友達と楽しく過ごし、放

課後は大学生の彼氏と楽しく過ごし。羨ましいかぎりですよ、私が高校生のときはその中

の友達しかありませんでしたから」

「ああ、なんとなく想像できます」

吉備の思い出話を亜鈴は簡単に思い描けた。

「本当に坂本先生は愛されてる感じがしますよ、生徒たちに。先生のこと好きな生徒は結

構いますから、成海さん含めて」

「でも、彼氏がいるやつもいますからね、成海しかりですけど」

「あれじゃないですか、ライクとラヴの違いってやつじゃあ？」

「そうです、そうです」

珍しく、吉備の言葉に納得させられると、亜鈴が先を続けた。

「私には、成海さんはラヴに見えるんですけどねえ」

「そしたら、二股になっちゃいますよ。勝手なこっちの想像で彼女の名誉を汚すのも失礼

なんで、止めておきましょう」

「じゃ、ライクってことで」

そう吉備がまとめたが、本当のところは本人にしか知りえない。

坂本は日々の長話で成

海ミルコのことをよく分かったつもりでいたが、そんな鎧袖一触の

ように乙女心は簡単な

ものではなかった。

☆

群青高校では、2学期の始業式が執り行われていた。校長の言葉には黒岩嘉乃の事件に

触れつつ、「新しいスタートを切れるよう」と有りがちなフレーズが並べられる。夏休みを

挟んだことで、黒岩に関する浮きだったような雰囲気は静まりを見せていた。生徒たちの

話題からも消え、保護者や報道関係からの質疑も治まり、警察も今回の件は「何らかの理

由で自宅の窓から転落した」という自殺の線の薄さを強調する結論に至った。学校側は松

原から没収した黒岩嘉乃の教材道具を警察には渡さなかったらしい。坂本が示唆したよう

に何者かによる悪戯の可能性が高いと判断したという理由だが、本当はそれを提出するこ

とによって学校側に分が悪くなることを恐れたのだろう。もしも、警察へ手渡して、それ

がクロであることを証明されてしまったら、当校は「いじめのある高校」として一気に評

判がガタ落ちになるのは明白だ。そんな自分で自分の首を絞める行為はできなかったのだ

ろう、学校側は己の非になることを避けた。

その夜、坂本と長稲は脇野に誘われて、3人で飲みに行った。カウンタータイプの飲み

屋は、店員の掛け声がよく響く活気に溢れたところだった。店内はほとんどがスーツを着

たサラリーマンばかりで、それは異様といえば異様で、馴染んでるといえば馴染んでる空気だ。

「ここ、よく来るんですか？」

「そうだね、1人で飲むときはここに来るんだ。ほら、うるさいからセンチな気持ちにな

らなくて済むんだよ」

なるほど、と店内を見回して坂本と長稲は納得する。

「脇野先生、お子さんはおいくつでしたっけ？」

「うん、5つと3つの女の子がいるよ」

男同士の飲みは、淡々とした湿り気のある空気になってくる。女性陣の若さがなくなる

と、こうも変わるものかと思いたくなるほどだ。

「今がかわいいときですね」

「でもね、言葉を覚えてくると先が怖いんだよ。言葉つつても、基本的にカミさんの使う

言葉を記憶するから。俺なんて、朝と夜にしか家にいないわけだし。段々そうなってくる

と、カミさんが家に3人いるように思えてくるんだろうな。ああ、考えるだけで今から落ち込んでくるよ」

「そんな、結婚は墓場みたいに夢のなくなること言わないでくださいよ」

まだ20代の坂本と長稲は夢を、30代の脇野は現実をそれぞれ見ているようだ。

「お2人さんは、誰かいいい人でもないのかい？」

坂本と長稲は顔を見合わせ、かぶりを振った。

「あらあら、2人とも顔立ちはいいいんだから勿体無いよ。どうだい、ウチの女性陣なんか

は。あんたらと同じく、顔立ちのいいのが揃ってるよ」

「ウチの女性陣ってもね、みんな一癖ありそうですし。主任は見ての通りだし、物織先生

は家事はしないとか言ってたし、松原先生はドジ踏んでばっかだし」

「そんなこと言わずに、長稲先生なら主任とかどうだい。気が強く、しっかり者、先生に

足らないところを持ってるじゃない」

「いやっ、さすがに気が強すぎますよ。毎日ガミガミどやされそうで怖いですって、僕の

2つ上だとは思えせんもん」

「いやあ、カカア天下も悪くないと思うよ」

「さっき、カミさんがどうこう言ってたばっかじゃないですか、脇野先生」

脇野と長稲のやり取りを笑みを浮かべながら聞いていた坂本に脇野の矛先が向かう。

「そうだねえ、坂本先生はね、松原先生かな。坂本先生は変に落ちていてるから、松原先生

生みみたいな天真爛漫な感じがいいと思うよ」

「へえ・・・参考にしておきます」

意味のないやり取りは避けるように、脇野の意見を軽く流した。

飲み出してから15分、話題は黒岩嘉乃のことに向けられる。

「黒岩さんの事件、やっぱり有耶無耶で終わっちゃったね」

「しょうがないですよ、これといった証拠がないわけですから。いくら現場が自殺に見え

たとしても、それに触れる確証がなければ立証はできません。松原先生の言ってた教材道

具にしても、証拠にはなりえせんからね。あんなもの、誰かが故意的につくったと言え

ばそれまでですから」

「ううん・・・何にしても可哀相だね、あの年齢でっていうのは」

脇野と長稲の会話は、世間論とそっくりそのままというものだった。誰もが事故による

黒岩の失命に絆されつつ、ただそれだけとしかできなかった。

「坂本先生はどう思いますか？」

長稲の質問に、坂本は少しの間隙を挟む。自分と松原が内々に調査してることに絡んだ

発言は避けなければならない。

「皆さんの言うとおり、落下による事故なのか、自殺による事件なのかは分かりません。

自殺だとしても、やはり証拠づけるものはないですし。ただ・・・もしも、そうであった

場合、彼女に何もしてあげられてないというのは胸が痛みます」

ああ、と脇野と長稲も目線を落とす。

「確かに、黒岩さんは内気で大人しい子だったし、意味の分からない発言も多かったけど

ね。クラスメイトと話してるのを見たこともないし、教科書とかノートを忘れたときも自

分1人じゃ対処できないし、問題はあったよ。まあ、それじゃ、何の証拠にもなるわけ

でもありませんけど」

「そう、忘れ物は多いですよ。メガネ忘れるですよ、黒岩は。授業中に指しても、「メ

ガネがないから読めません、すいません」ってことが何回もあってメガネしてる僕から

言わせてもらうと、そんな定期的に忘れるなんて有り得ないですよ。真面目なんだけど、

どこか抜けてるんですよ」

脇野と長稲の意見は、どちらも坂本の記憶にもあるものだった。

2人が言うように、黒

岩の忘れ物は目立つ。教材道具はおろか、メガネや時計や体操服といったものまで忘れてくる。

「あと、保健室も常連だったみたいで。1回、僕の授業を欠席したとき、その後の休み時

間に見かけたんで声を掛けたら、気分が優れないんで保健室に行ってました、って言われ

ましたし」

「そんなに病弱ってわけじゃないのにね。ちよつと、恐怖症っていうのがあったのかな、学校に。いつも1人だったからさ、教室にいるのが嫌になるときがあるのかもよ」

脇野と長稲の会話を耳に入れながら、横であれこれと千思万考していると、坂本は1つの疑問に辿り着く。それは、小休止の状態となっていた現状から一歩を抜け出せるかもしれないものとなる。

第15話

翌日、老夫婦の営む喫茶店に坂本と松原は集まった。お婆さんはココアとブラックコーヒーという、いつもどおりのメニューを置く。

「あんたたち、いつも同じだね。たまには、冒険してみたりするのいいんだよ」

「すいません、これが好きなんです」

すっかり、顔馴染みになってしまったため、お婆さんにも顔を憶えられている。

「あんたたち、ところで付き合ってるのかい？」

「とっ、とんでもないです。ただの同じ職場の同僚です」

お婆さんからの質問に、松原は焦ったように早口で答える。

「へえ、2日か3日にいっぺんは来るからさ、てっきり恋人なんだと思ってたよ」

「そんな・・・止めてくださいよ、お婆ちゃん」

そう言う松原の顔色は綻びを見せている。まるで、もっと言うてくれと言わんばかりに。

「恋人に見えるみたいですよ、私たち」

「そうみたいです」

笑みを見せつつ言う松原に、坂本は素っ気なく返事する。

「本題に移ってもいいでしょうか？」

「・・・あつ、はい」

若干の浮かれ気分だった松原を現実に戻し、坂本は言を始める。

「昨日、放課後に脇野先生と長稲先生と飲みに行きました。そのとき黒岩が話題に上が

ったんですが、脇野先生と長稲先生の会話を聞いてたときに新しい疑問が浮かんだんです」

新しい疑問ですか、と松原はまだ内容を把握しきれてない様子で言う。

「松原先生は担任だからよく分かると思うんですけど、黒岩って忘れ物が多かったじゃないですか。教科書やノートはともかく、ありとあらゆる物を忘れて

ませんでした?」

「・・・そういえば、教科書やノートはたまにありました」

「メガネや時計や体操服も忘れたことがあるそうです、何か他にあったりしませんか?」

「他に・・・あつ、メガネはありました、筆記用具も何回か忘れてます」

それがどうしたんですか、と松原が訊ねると、坂本は本意に触れ出す。

「不自然だと思うんです、そんなにも忘れ物をするということが。黒岩の性格を考えれば、

そういうところはしっかりしてるはずじゃないでしょうか?」

「・・・そう言われてみれば・・・そんな気がします」

「そう思ったとき、松原先生が学校側に預けた黒岩の教材道具が頭に浮かんだんです。あ

れが大きなヒントになって、行き着いたんですが」

「・・・それって・・・ああいうふうにされたってことですか?」

坂本の言葉に、松原は勘良く気づいた。

「黒岩は忘れたんじゃない、そう仕向けられたんじゃないでしょうか。あの教材道具のよ

うにボロボロにされたり、陰悪な言葉を書かれたり、どこかに隠されたり、紛失させられ

たり、そういういじめを受けていたんじゃないでしょうか。そうすれば、今回のことに関

するつじつまも合ってきます」

「・・・そんな・・・そんなのひどいです・・・」

松原は顔を下げたまま、やりきれない気持ちに襲われていた。

「つまり、他の物も同じように考えられます。メガネや時計や体操服なんかも、同様にや

られたんでしょう。そして・・・それが僕らにとって追い風になるかもしれません」

松原は顔を上げ、坂本の言葉の意味に疑問符の点った表情になっている。行きましょう、

と坂本は松原と喫茶店を後にする。

2人が向かったのは、黒岩嘉乃の自宅だった。黒岩が亡くなった後も、松原は2回ここ

を訪れている。黒岩へのいじめの有無の調査報告をするためにだが、事の進行具合の難航

から遺族の思ったような報告は出来ずにいた。しかし、黒岩の母親は「時間はかかっても

いいから」と松原を背中を押してくれる。

「いきなり、おじゃましてすいません」

「いいえ、あの子のためになるのなら、何でも協力しますって言いましたしね」

自宅に上がらせてもらうと、黒岩の部屋に通してもらう。彼女の部屋は何事もなかった

かのように何一つ手を入れられていなかった。黒岩の一件に対する真相が明らかになるま

では、そのままにしておくつもりらしい。

「何を用意すればいいでしょうか？」

母親にそう訊ねられると、坂本は通帳を出して欲しいと頼む。母親が出してきた黒岩の

通帳を広げると、そこには坂本の予測した通りのものがあった。

「ものすごく短い間隔でお金を引き出してます、今年の4月から」
「ホントだ、1週間に1回は下ろしてます」

母親もそれは気づいてたらしいが、黒岩は洋服を買ってると言っていたようだ。

「引き落とす金額が少ないので、お金を強請られていた可能性は低いでしょう。おそらく、

紛失した教材道具などを新しく購入するためにしたんだと思います」

「・・・そんな・・・全然気付かなかった」

「落ち込まないでください、お母さん。黒岩は心配かけないように、皆さんにはバレない

ようにやっていたんですから」

肩を落とす黒岩の母親を坂本が宥める。黒岩嘉乃は家族想いの良い娘だったそうだ。多

くの人からの愛情は受けられなかった黒岩にとって、自分に愛情を捧げてくれる人たちは1番に大切としていた。だから、自分がいじめを受けていることを家族にはバレたくはなかったのだろう。



黒岩嘉乃にホテルに誘われた翌日、彼女は坂本のところへ来た。

坂本が理科準備室から

出ると、そこに黒岩の姿があった。どうした、と声を掛けると、もじもじしながら言を発する。

「昨日のことなんですけど・・・」

「・・・ああ、昨日のことは忘れてくれって言いに来たのか？」

黒岩は坂本と目を合わせ、少し考えてから言った。

「忘れないでください・・・でも、気にはしないでください」

「どっちも似たようなことだろ」

「違います、言ったことは本心です。でも・・・それで、先生に嫌われたら嫌だし。無かったことにして欲しくないけど、取り合えず頭の片隅に置いておいてください」

片隅に置いとけばいいのか、と訊くと、黒岩はこうべを垂らす。

「私の中で、先生が私を好きになるより、先生が私を嫌いになることの方が大きなことな

んです。先生に嫌いだなって言われたら、私もうダメになっちゃうかもしれないから。こ

の前、私が壊れそうだって言ったとき、先生が抱きしめてくれて本当に救われたんです。

温かい毛布に包まれてるみたいで、すぐく守られてる感じがしました。先生は・・・私に

必要な人なんです」

胸が痛む言葉だった、坂本は彼女に好かれることを快くは思っていなかったから。これだけ

自分を想ってくれてる人を、撥ね退けるようなこともできない。

対応が困るというのが

坂本の本音だった。黒岩に近づくのも避けたいが、離れることもできなかった。

「・・・じゃあ、俺は今までどおりに接しながら、昨日のことを頭の片隅に置いておけばいいんだな」

「・・・はい、それでお願いします」

「分かった、そうするよ」

そう言って、坂本はその場を離れる。黒岩嘉乃の気持ちを知らないがら応えない自分に多少なりの嫌悪感が生じた。でも、坂本はそれを自分の中に押し込める。同じ過ちを繰り返

しはしない、もう二度とあんな場面は見たくなんかない。

☆

黒岩嘉乃の自宅を訪れた翌々日、再び坂本と松原は行動を共にした。休日を利用して、

2人は疑問の解決までの続きを遂行する。黒岩に忘れ物が多い、黒岩のスクールバッグに

ボロボロの教材道具があった、黒岩が短期間で預金を何度と引き落としていた、そこから

生じる「教材道具をボロボロにされ、預金を使って新品を購入していた」という仮説を紐

解くために。黒岩の自宅から学校までの通学路と近辺にある店を探索し、それらしき店を

見つけると外壁に触れる程度の軽い聞き込みを店員にしていた。

すると、学校からの最

寄り駅の駅ビルにあるメガネのショップで引っ掛かった。

「ああ、いましたよ。何回も同じメガネを買いに来る、女の子。よく失くすねって聞いた

ら、物忘れが激しいんですって言ってたけど。さすがに酷いんじゃないのって指摘したら、

うまく交わされた記憶があるよ。最近は来なくなったから、店を変えたんじゃないのかな。

あんまりしつこく買うのが恥ずかしかったんだろうね、こっちは商売的には有りがたいわけだけど」

大きな情報だった、坂本と松原は思わず顔を見合わせる。坂本のたてた仮説は定説へ近

づき、それに2人は目には見えない手ごたえを感じた。

「坂本先生の言ったとおりでしたね、すごい推察力です」

「そんな大したことはしてません、事の片鱗に触れる程度というのが実際のところですよ。」

まだ、黒岩がはじめを受けていて、多くの物を紛失して、預金を下ろして新品を購入して

いたことが分かっただけですし」

「先は長いってことですね、まだまだ」

「はい。沢川花が打ち明けてくれたら、一気に前進しそうですねですけどね」

「そうですねえ・・・私、また当たってみましょうか？」

「そうですね。そろそろ時間も経ってますし、軽い感じで聞いてみるのもいいかもしれません」

せん」

こうして、松原が沢川花へ再度の接触を試みることになった。良い流れがきてる、今の

勢いにのってくれればと願うところだ。

第16話

自宅の玄関扉を開くと、徒ならぬ気配で立ち尽くす成海ミルコの姿があった。昼過ぎか

ら降り続いていた雨に打たれ、全身を雨粒で濡らしている。玄関口に雨の雫を垂らしなが

ら、焦点の定まらない視線を地面へ向けていた。坂本の近くでいつもはしゃぐようにして

る彼女とは別人のようであり、そこから漂ってくる陰の空気は黒岩嘉乃のそのようだった。

「・・・先生・・・」

それだけを言うと、言葉につまったまま泣き出してしまった。坂本には彼女の涙の理由が全く分からず、対処の仕様に困る。

「・・・成海、何で泣いてるのか聞いてもいいか?・・・」

二度三度と鼻を吸ると、成海はスクールバッグから包み紙に包まれたケースを取り出す。

彼女の掌に乗るほどのサイズで、緑の背景に星の形がいくつとあしらわれていた。

「・・・先生、言ったじゃん・・・手作りの方が気持ち伝わるって・・・。だから、

早起きして作ったんだよ・・・なのに、受け取ってもらえなかった・・・」

成海が震える掌で握っていたケースの中身は言わずとも分かった。慣れない作業にてこ

ずりながら、あくせくと完成させたのであろう姿が目に見え浮かぶ。

「・・・何で・・・何で、私のは受け取ってもらえなかったの?・・・」

・
」

捨てられた子犬のような瞳で坂本を見遣っている。行き場所のな
いまま、その身を震わ
せて孤独の闇を彷徨っていた。

成海ミルコはその手作りのチョコを携えて、放課後に大学3年生
の彼氏のところへ行っ

た。8時間前の昼休み、いつものように職員室を訪れては居ついて
長々と話し込んでいく。

「じゃーん、手作りやつちやいましたっ」

「おおっ、そういうの苦手とか言ってなかったっけ」

「頑張ったんだよ、今日5時起きだからね」

成海が手にしていたのは、赤のリボンでパッケージされた包み袋
だった。それを坂本の

方へと差し出して、言う。

「はいっ、これは坂本先生の分」

「ああ、悪いな」

「いいの、いいの、彼氏の分のおこぼれなんだから」

「そういうこと言うなよ、嘘でも先生のために作ったって言えっ」

「ええー、だって先生いつも私に意地悪言うし」

そう笑いながら言い合っていると、亜鈴先生が入ってくる。

「ねえ、私もちよつと食べてみたい」

「あっ、いいですよ。どうぞ、どうぞ」

そう言うのと、成海は包み袋を勝手に開けて一つを亜鈴に渡した。

「おい、それ俺にくれたんじゃないのかよ」

「いいでしょ、私が作ったんだから。いい大人がせこいこと言わな
いの」

そう言ってる間に、亜鈴は坂本よりも先にチョコを食してしまう。

「美味しいよ、成海さん」

「ありがとうございます。あっ、吉備先生の分はありませんから」

「・・・私にはおこぼれもないんですね」

「ごめんなさいね。先生、先生も食べてよ」
そう促すと、坂本もチョコを食す。

「ああ、ちゃんと出来てるよ」

「何で、素直に美味しいって言えないのかな」

不貞腐れ気味になる成海に、亜鈴が口を入れる。

「あれだよ、坂本先生は朝からチョコばかり食べてるから」
「どういうこと？」

「今日は朝からたくさん女子生徒が坂本先生のところにチョコを持って来て、食べてく
ださいってリクエストされてるから。もう、先生のお腹は甘い物で
いっぱいになってるん
だと思うよ」

「ふうん、そうだね。先生は人気者だからね。あれでしょ、私の
もその他大勢の中の一
つにすぎないんでしょう？」

「さあ、どうだろうな」

「あああ、つまんないから帰ろうっと！」

投げやりな言葉を言い捨てると、成海は口をへの字に曲げて去っ
ていく。

「まあ、怒らせちゃいましたね、坂本先生」

「気にしないでください、僕と成海のやり取りは」

この後、部活終わりで成海は彼氏の自宅へ向かった。約束の時間
より30分早めに訪れ
て相手を驚かしてチョコを手渡そうとしたそうだが、合鍵で家に入
ると彼氏と見知らぬ女
性がそこにいたらしい。動揺は隠せなかったが、咄嗟に手に提げて
いたチョコを差し出す
と、彼氏からは受け取れないという言葉が掛けられた。簡単に言っ
てしまえば、彼氏の家

にいた女性が本命で、成海のことを浮気ということになるだろう。

そして、成海は雨を陽光のように受けて、傷心を抱えながら坂本の自宅を訪れていた。

「……先生のせいだよ……先生が言ったから手作りまでしたのに……。……傷が余計に深くなっただけじゃん……。責任とってよ……」

そう細い声で言って、掌に乗せていたケースを坂本に投げつける。しばらく、外界に降

り注ぐ雨音の奏でが2人の空間に流れていたが、坂本は玄関に転がっていたケースを拾うと

中身を食べ始めた。

「……。何やってるの?……」

「……。折角、頑張って作ったんだろ……。食べてやらないと報われないから……」

そう食べ続けていると、成海はそっと近づいて坂本を抱きしめた。

「……。先生、もういいよ……。先生のせいじゃないことぐらい分かっているよ……。……」

私は天邪鬼だから、思ってもないこと言っちゃうんだよ……」

抱きしめている成海ミルコの身体は冷えていた。きっと、彼女の身体の内も同じように

冷たくなっていたことだろう。坂本は冷えた彼女の身体を抱きしめてあげたかった。でも、

それはしなかった。坂本の中には、成海との間に教師と生徒という線引きがあったから。

成海の「その他大勢の一つ」という言葉じゃないが、坂本にとっては彼女は生徒だ。その

ラインを超える感情は持てなかった。いや、ただ勇気がなかっただけかもしれない。

「……。先生、お願い聞いてもらってもいい?……」

「・・・お願いによるけど・・・」

「・・・私の気持ちが落ち着くまで、ここに居させて・・・」

坂本はそれを了承した。教師として自宅に生徒を上げる行為はいいかなものかとも思っ

たが、教師だからこそ目の前で涙する生徒を放っておくことができなかった。ましてや、

それがいつも明色な顔つきばかりを見せている成海ならなおさらだ。

成海ミルコを自宅に上げると、風邪でも引かないようにとシャワーに入らせた。正直、

浴室から聞こえてくるその音に違和感を感じずにはいられなかった。その浴室に入った女

性が初めてというわけではない。ただ、それまでは必ず恋仲という関係が結ばれているの

が前提のようにあった。なのに、7つも年下の高校1年生、しかも自分の教え子がそこにいる現状はおかしいものだ。

「・・・シャワー、終わりました」

多様に蠢く感情を整理しきれずにいるうちに成海が浴室から出てきた。成海言葉もい

つもとはブレの生じる程度に違う、畏まったものになっている。

「座って、それでも飲め」

成海のない間に用意しておいた紅茶を注ぎ、リビングのガラスメイクのローテーブル

に2つ置く。室内も、暖房を通常より高めに設定しておいたので冷えた身体にはちょうど

いいはずだ。

「先生・・・隣、座ってもいい？」

坂本が頷くと、成海はソファの右側にそっと腰掛ける。坂本のスウェットのパジャマは

彼女にはサイズが大きく、手足の先の方は余ってしまった。

「温かい・・・ありがとう、先生」

紅茶を一口含むと、ようやく成海はこの部屋で初めて笑みを見せる。そして、雨音が微

かに伝わる温暖な室内で、成海は先刻の彼氏の家で起こった一部始終を話し、坂本はそれ

をただ相槌を打つこともなく聞き続けた。話が終わると再び雨音が目立って耳に入ってくる、どこか田舎町の喫茶店にいるような静寂とした空気が流れてい

た。

「なあ、一つ聞いてもいいか？」

「・・・なあに？」

成海からの話を聞いてる最中に浮かんだ疑問を送る。

「何で、俺のところに来たんだ？」

「・・・どういう意味？」

「話を聞いてもらいたいんなら、友達のところに行けばいいじゃないか。きつと、俺より

も成海のことを分かってるんだから、そっちの方がいいはずだろ。

お前なら、チョコだけ

俺に投げつけて出て行ってもいいわけだし」

少しの間があった後、成海は坂本の瞳を見つめて言う。

「・・・先生のことが好きだから」

再び間が空く、ただ2人の視線は合わさったままでいた。

「お前、今し方、彼氏の家になココを持っていったんだろ？」

「分かってるよ、そんなこと」

「それで、先生のことが好きって矛盾してるだろ？」

「してないよ・・・ずっと・・・ずっと、先生が好きだったんだよ」

坂本は状況をうまく飲み込めなかった。もちろん、成海の言わんとしてることは分かっ

たが、詳細に理解をしようとするの難度が高い。

「じゃあ、何で大学生の彼氏がいたんだ？」

「・・・妬いてもらいたかったのかもしれない、今思うと。先生はみんなから好かれてる

し、私のことなんか「みんなの中の1人」としか見てなかったし。

子供扱いばかりされ

て、私だってもうすぐ大人なんだからって言いたかった。だから、

先生ぐらいの年齢の人

と付き合って、私の方に目を向けて欲しかったのかもしれない。私を見て欲しくて、いつ

も先生のところに行って彼氏の話ばかりしてたの」

坂本は外界の雨粒が全て自分に降り注いでるような感覚に陥った。成海の瞳を見ていれ

ば、彼女がどれだけ本気かは読み込める。その分だけ、坂本の胸の内が痛んでいく。坂本

の頭の中では、成海をどれだけ傷つけずに断ることができるかを考えていたから。成海と

の間にある線引きを超えられない、理由はただそれだけだ。彼女のことを嫌なわけじゃない

い、偶然街で出会っていたなら恋に堕ちていることだろう。教師と生徒というラインが坂

本に余計な否定の感情を生み出している。これ以上を踏み込むのはいけない、火傷を負う

だけだ、そうやって己を制御させることを第一としていく。

「止めておいた方がいいんじゃないか、それはおそらく愛とは違うと思う。多分、俺ぐら

いの年代の男に憧れてるだけなんだ。お前も含めて、俺にチョコをくれた子たちは。思春

期になると背伸びがしたくて、そういう男に気持ちがいくんだよ」

違う、違うよ、と成海は自分に言い聞かせるように何度も言った。「・・・私は坂本先生がいいんだよ。別に、先生と同じ年の他の教

師がいたって、好きに

なんかなってないよ。背伸びとか、憧れとかじゃなくって、本当に想ってるんだよ」

目の前で瞳を細める成海は、胸が張り裂けそうに想いを募らせていく。その想いが強く

なるほど、坂本もやりきれない感情に困らせられる。こんなに自分を想ってくれてる女性

に応えてやるほどの度量もない自分が嫌になる。

「・・・ねえ・・・先生・・・」

感情の許容を超えたように、成海は着ていたスウェットのパジャマの上衣を脱いでいく。

あらわになった上半身に羞恥心も重ねたような顔色になる成海ミルコは、誰もの目を集め

ては虜にするような傾城さを携えていた。坂本の心内がたゆたうのは当然だった、ただ彼

の初心も揺るぎきらない。必死で葛藤を続ける、自分を直視し続ける成海からの想いへ。

「・・・先生・・・」

そう坂本の顔を覗き込むようにする成海に、何も言うことができなかった。彼女を喜色

にさせてあげることができない。でも、傷つけることもしたくない。ただ成海の濁りのな

い清澄な瞳を見ることしかできない坂本に、白い肌が目睫の間に迫ってくる。何も応えも

せず、答えすら発しない坂本にやきもきするように成海が動いた。

「・・・先生・・・好きだよ・・・」

動きを制御されたように制止を続ける坂本に、成海が唇を合わせろ。そのまま坂本をソ

ファに倒し、恋先を抱きしめてはその体温の機微を感じていた。坂本は何もできないまま、

降り続く雨音を耳にし、天井で移ろう影の行方を目で追うことしかできなかった。

☆

松原は待ち合わせ場所に來た沢川花を連れ、人気のなさそうな喫茶店を選んで入った。

話題的に学校内では自然に話せる場所がなかったし、また塾の前で待ち伏せというのも沢

川側としては良い気分にはならないだろうと思い、沢川へ直接交渉して塾のない日の放課

後に時間を空けてもらうことになった。

「ごめんね、今日は無理を言っちゃって」

「いえ、またこうやって聞かれるんだろうなって思ってたから」

店内は薄ぼんやりとした照明で、60に近いと思われる白髪のお店主が1人だけカウンタ

ーの中にいた。松原はココア、沢川はオレンジジュースを含みながら、ジャズの流れる店内で話を始める。

「前の沢川さんからの話を聞いて、大きなことが1つ分かったの。

それはね、沢川さんは

黒岩さんと何らかの関係性があつたっていうことで。沢川さん、前に私が黒岩さんとの関

係を聞いたとき、答えたくないって言ったじゃない。答えたくないっていうことは、本当

は黒岩さんと関係性があつて、それを言いたくないからってことだと思つたの。黒岩さん

と何も関係性がないのなら、無いって言えばいいだけのことでしょ」「・・・ああ、そうですね」

沢川の表情に変化はなかった、特にまずいといった顔にもなつて

いない。

「でね、今日はよかったらもう一度そこを聞きたいなって思っ
てもちろん、答えたくな

ければ答えなくていいんだけど」

「・・・ここで私が答えなかったら、また先生が聞きに来るん
ですよね？」

「ううん・・・多分ね」

そう言うと、沢川は2分ほど考え込む。松原に気負いはなかった、
微かに笑みを見られ
るような余裕のある顔色でそこにいる。

「先に約束してください、私が言うことはクラスの他のみんなの耳
に渡るようなことはな
いって」

「・・・うん、分かった」

そう約束を交わすと、沢川は話し始める。

「・・・黒岩さんと私は友達でした」

沢川の言葉に、松原は一つ息を呑む。

「放課後に喫茶店で話したり、プリクラを撮ったり、休みの日に映
画に行ったりしました。

周りの同年代の女の子たちみたいな派手な格好とか派手な事とかは
性に合わなかったから、

自分の年齢にしたら素朴だなんて思うけれど普通に毎日を過ごして
ました。群青高校に入

ったとき、私みたいな子がいるか心配だったんですけど、嘉乃ちゃ
んを見たときに「あつ、

この子なら仲良くなれる」って思ったんです。それで、私から声を
掛けて、放課後は一緒

に行動するようになりました。嘉乃ちゃんとは妙に空気感が合うっ
ていうか、一緒にいる
と落ち着けたんです」

沢川の言葉が止まった、目の前の彼女は一粒の涙を流していた。

「・・・楽しかった、嘉乃ちゃんといると。別に特別なことなんかしてないのに、普通に喋ってるだけで心が弾んでた」

「・・・沢川さん？」

目の前で急に涙する教え子に、松原はただ驚きを覚えることしかできなかった。沢川花

は悲しそうな顔はせず、それまでのとおりの普通の表情で涙を流していた。その不自然さ

に疑念に近い感情が起こり、松原はその泣き顔を見ることしかせず

にいた。

「・・・あの楽しかった時間はもうないんです。嘉乃ちゃんは、私が唯一本音を言える子

だったのに。私は日々の不満やら愚痴を言う相手もいなくて感情が募るばかりです、ど

うすればいいんですか？」

沢川花の瞳は正義という事場がよく似合う、意思の強い線を放っている。

「他の友達に話せばいいじゃない、いつも仲良くしてる。みんな聞いてくれるから、本音を打ち明けてみればいいと思うよ。本当の自分を曝け出すのって勇

気がいるけれど、きつと分かってくれるから」

慰めようとした松原の言葉に、沢川は楯突くように鋭い眼光になる。

「そんなことできません、先生は何も分かってないんですね。あのグループの中で、私は

真面目で勉強もそこそこ出来る良い子ちゃんなんです。私が心内に持ってるような、汚い

感情なんか見せたら私を見る目が一様に変わります。そんな怖いこ

と出来るわけないじゃ

ないですか、それっぽい言葉を並べて教師ぶらないでください！」

沢川は不快感を露わにすると、そのまま一礼だけして店から出て行ってしまう。店内に

取り残された松原は、沢川の怒りの真意が掴みきれずに悔やむに悔やみきれずにいた。

第17話

翌日、いつもの老夫婦の営む喫茶店での松原は沈みきっていた。主任に怒られた後のよ

うに、肩を落としてはため息で呼吸を続けてるようだった。

「……すいません、本当に私は足を引っ張ってばかりです」

「そんなことないですよ、少なくとも沢川の本音を聞けたわけじゃないですか。黒岩にし

か話さないっていう沢川の本音を。それだけでも随分とした前進になります、気を落とさないでください」

正直、沢川との会話の報告という名目を主題としながら、松原は坂本に慰めてもらいに
来たと言っても過言ではない。

「……沢川さんを怒らせちゃって、今日も学校で私を無視してるみたいな対応されて。

もう、何で私はこんなに駄目なんですか、自分で自分が嫌になります」

「大丈夫ですよ、松原先生は新任なんですから。最初から何でもうまくこなせる教師なん

かいません、みんな少しずつ成長していくんです。段々と要領を覚えていくんですよ、だ

から先生はまだいいんです。新任の松原先生にできるのは、身体全部で生徒たちに当たって
いくことです」

「……そういうものでしょうか？」

「そうですよ、気を落としてる時間があつたら沢川と向き合えるように頑張る方がいいと

思います」

「・・・はい、ちょっとだけ元気が出ました」

松原はフツと微笑んだ顔を坂本に向ける。それに坂本も口角を上げてみせる、それが松

原の心内に温かな感情の火をつけてくれた。

「黒岩と沢川が友達だったのは意外でした、黒岩はいつも一人だったので」

「私もなんです、2人が話してるのを一度も見ることがなくて」

新たな事実の発覚とともに、新たな疑問も浮かんた。黒岩嘉乃と沢川花がそれだけ心を

通じ合わせる友人関係だったにも関わらず、坂本はおろか担任である松原でさえ2人が接

近してる場面を目にしたことがないのだ。

「正直、おかしいと思うのが素直なところですよね」

「はい。でも、沢川さんは絶対に嘘なんかついてません。昨日の彼女の様子を見てたら、

そんなこと欠片も思いつくことが出来ません」

黒岩と沢川が仲良くしてる場面を目にしたことがない坂本と松原には難解な疑問であり、

2人の妙だといえる関係の紐解きをすることは出来なかった。松原にそれを聞いてもらい

たいにしても、沢川花は昨日の態度からして打ち明けてくれそうもない。折角、都合のい

いように続いていた青信号だったのに、釘を刺すように赤信号が点る。

☆

黒岩嘉乃はいじめの事実を誰にも打ち明けはしなかった。それは

家族はおろか、坂本や松原ですら気づかなかったくらいだ。自分の中に仕舞い込み、何もなかったかのように大人たちの前でいた。

黒岩は誰にいじめられていたのか、どんないじめを受けていたのか。1組での授業中、ふとそのことを思いつくとときがある。そうすると、目の前にいる生徒たちが全員そうと見えてきてしまう。活発そうに見える生徒、勉強に長けていそうな生徒、清純そうな生徒、無邪気に笑う生徒。ここにいる全員が裏の顔を携え、それを黒岩に向けていたのだろうか。と。直接に傷をつけた当事者、間接に傷をつけた傍観者、そして黒岩嘉乃という被害者。まだ大人にもなっていない未熟者の彼ら、彼女らがどうしてそんな立場になってしまったのか。刹那に咲き乱れる恍惚とした花の光を灯すこと、永遠に咲き続ける混濁とした花の光を灯すこと。前者を黒岩とするのなら、ここにいる生徒たちは後者だろう。人を信じることを信じた子供のまま、自分の古い醜さも知らぬまま失くなった黒岩。人に痛みを与えることを憶えたまま、汚れてしまった自分を抱えて大人へ移っていく生徒たち。そうならなくていい、これから遙かなる大空へ翔け上がろうとしている子供たちが善と悪になる世の中こそ未熟なんだろう。未熟な生徒たちを見ていてあげなければならぬ大人たちがそれを怠る、それこそが未熟だ。未熟な人間のまま大人になった未熟者に囲まれて育ち、

彼ら、彼女らもそうなっていく。諸悪の根源なんて、全ては未成熟な心が成していくものだ。

黒岩嘉乃が1週間ぶりに坂本の前に現れる、彼女が自らの命を絶つ5日前のことだ。

「先生、何してるんですか？」

黒岩にしてはフランクな口調に思えた、いつもよりも細く高い声を耳にする。

「何って、5限目が実験だから準備してるんだよ」

熱化学の実験に使う器具を用意していたところに彼女が訪れてきた。ホテルの一件から、

間を探るように1週間が経っていたところだ。その間、授業で1組に行くことはあるが、

彼女から話しかけられることはなかった。授業中に目が合ったとしても、気まずい様子で

向こうからそれを逸らす。これまで、2〜3日に1ぺんは坂本の前に現れていたので、心

配していたのは確かだった。要注意人物が自分の前に来なくなるのは良いことではあるが、

それでは黒岩の感情の歪みの捌け口がなくなってしまう。それは懸念していた、窮屈にな

って思いつめていたりしないだろうか。

「今、時間ありますか？」

「少しならいいけど、何か用か？」

そう言うと、黒岩は手前の教員用のグレイの椅子に腰掛ける。

「逆境にめげそうになったり、しよげそうになったとき、先生ならどうしますか？」

「・・・そうだな・・・俺はそのまま抱え込むだろうな」

「それじゃあ、ただの不可逆変化にしかないじゃないですか」

「俺はどうも消化が下手みたいでな、一々そういうのを引き摺っていくんだよ」

「それって、いつか自分の中でいっぱいになって噴き出たりしないんですか？」

「そこは下手なりに要領をつかんでるみたいで、うまくやってるんだよ」

「・・・どうやるんですか？」

黒岩のメガネを掛けていない更の瞳は混濁の微塵もない。真っ直ぐな瞳に、その質問への真剣さが窺えた。

「・・・何か、引き摺ってるのか？」

いつもなら言わない言葉だった。そうやって、彼女の深い部分まで入っていくような自殺行為は控えてきたはずだ。

「・・・先生・・・」

そう言って、黒岩は制服のスカートを少しずつ上げていく。見えてきた両膝には、膝全体を覆うほどのガーゼが貼られていた。

「どうしたんだ、それ」

上目で坂本を見続ける黒岩は、瞳を開閉して、息を吐いて、軽く唇を震わせている。何かを告げようとしているのは汲み取れた、勇気を出して言おうとしているのは。

「・・・転びました」

膝上まで上げたスカートを持っていた両手をグッと握りながら黒岩は言った。今思えば、いじめを受けてることを坂本に打ち明けようとしていたのだろう。ただ、黒岩は勇気を出しきれなかった。

「・・・失礼しました」

そう言って、黒岩は颯爽にその場から去っていく。当然、坂本も彼女の異変に気づいて
いる。坂本が手を差し伸べていれば違う結果が待っていたのかもしれないが、このときは
そこまで黒岩に踏み込むことができなかった。

☆

松原は翌日、主任と物織と居酒屋で飲んでいた。1学年の男性教諭3人が一緒に飲んで
いた話が出ると、物織が「じゃあ、今日は女性陣で飲みに行きましようよ」と2人を誘った。

「今日は飲みましようね、明日は休みだから遠慮はいりませんよ」
上機嫌な様子の物織は主任と松原にどんどんビールを注いでいく。主任は堅物ぶりを
守り、松原はその主任の様に軽く緊張してるのか、物織の促しほどピッチが上がっていか
ない。

「主任も松原先生も飲みが足りませんよ」

「そうですか？」

「主任、坂本先生と飲んだときみたいになってくださいよ」

「それ、何ですか？」

主任と坂本の飲み話を知らない松原は、物織の言葉に食いついた。

「物織先生、言わなくていいですよ」

「主任、いつもこんな感じじゃない。でもね、坂本先生と飲んだとき
に酔い潰れちゃった
みたいで。坂本先生にこっそり聞いたんですけど、結構大胆にな
っちゃうみたいなの」

主任の制止も聞かず、物織は知ってるかぎりを話してしまう。松

原は見たことのない光景を想像しつつ、それに困惑も覚えた。

「物織先生！」

「あつ、すいませんね、主任。でも、何でまた、坂本先生の前ではそういうふうになっち

やたんですかね。私たちの前では、1回も崩れたことないのに。私たちにも見せてくださ

いよ、酔ったところ」

「ダメです、もう二度と崩れませんから」

そう言い捨てると、目の前のビールを一気に飲み干した。

物織が電話で場を離れると、松原が気になっていたことを口にする。

「さっきの話なんですけど、主任も酔っ払うんですね」

「・・・私も人の子ですから、松原先生には随分と怖いように映っていると思いますけど」

「そんなことはありません、尊敬しています。そりゃ、怒られると怖いし、マジへこみます

けど、それは私が悪いだけだし、主任は教師として素晴らしいなっ
て思ってます」

慌てたような松原の口調ぶりに、主任はフツと口元を緩ませる。

「ありがとうございます、お世辞でも嬉しいですよ」

お世辞なんかじゃありません、と松原はかぶりを振る。

「それで・・・酔い潰れてどうなったんでしょうか？」

「松原先生まで、そこを突くんですか」

「いえっ、決して、主任をからかおうとかじゃなくて。単純に、その後がどうなったのか
が気になるっていうか」

「・・・私にも分かりません、坂本先生にうまくはぐらかされました」

「はあ」

「坂本先生は何かあったみたいに含ませてるんですけど、私をからかっているのかどうなのかは分かりません」

「・・・そうですか」

真相は2人には闇の中になると、主任が逆に口を開く。

「松原先生、たまに坂本先生と一緒に帰ってますよね」

「はい、家が割と近いので。担当クラスも隣ですし、2人とも群青高校に入ってから間も

ないですし。助け合いの精神っていうか、共通点も多いから近くにいる機会も多いみたいです」

「でも、性格は正反対ですよ」

「・・・そうなんですよね、坂本先生の考えてることって私には理解しにくいんです」

「大丈夫、私もですよ。あの人、何か奥底に影を潜めてるっていうか、人には明かさない

闇を抱えてそうですよね」

「はい、もう少し分かってあげたいんですけど・・・」

松原のシュンとした様子に、主任は一つの仮想を思う。

「松原先生、坂本先生が好きなんですか？」

「えっ、やつ、いやっ、ええと・・・」

松原のしどろもどろぶりに、主任は笑いを堪えきれずに噴き出す。

「でっ、好きなんですか？」

「ええと・・・どうなんでしょうね」

笑顔で白を切る松原だが、主任には真意は筒抜けになった。

「まだ、分からないってことですか？」

「ううん・・・そういうことで」

「じゃあ、私とどうなろうとまだ関係ありませんよね」

松原が瞳を大きくすると、主任は笑みを見せつつ言を続ける。

「坂本先生って、どんな人ですか？」

「どんな人って・・・いつも主任が接してるとおりの感じだと思いますけど」

「恋人の話とか聞いたことがありますか？」

「いえっ、全然・・・どうして、そんなこと聞くんですか？」

「・・・ちよっと、興味がありました」

松原の頭にははてなマークが点り、次の言葉でそれは解決されることになる。

「・・・好きになるかもしれません、坂本先生的こと」

「えっ!？」

「ダメですか？」

「いえっ、そんな・・・ダメじゃあないんですけど・・・」

「じゃあ、そういうことで」

ちようどのタイミングで物織が戻ってきた。その後も飲みは続いたが、松原の中では疑問符が蠢き続けて止まらなかった。

第18話

坂本と成海ミルコの関係は、あの日以来、一気に接近することになった。ただ、さすが

に学校でそういった類の会話をするわけにはいかない。2人はメールでのやり取りを主と

して、不義といえる関係を築いていった。

「先生、ここが分かんないよ」

職員室に成海が質問をしにやって来た、質問というのは半分口実だが。成海にとっては、

学校での2人の教師と生徒という関係がもどかしくてたまらなかった。こうして、職員室

で話してるときにでも、目の前の坂本に甘えたいくなるのを我慢しなければならぬ。学校

では今までどおりを通さなければ、全校生徒に知れ渡ってしまうこととなる。

「お前、この前の試験、点数下がってただろ」

「違うよ、私の学力が落ちたんじゃなくて、試験問題のレベルが高かったんだよ」

「褒めてもらいたいんだったら、もっと頑張ることだな」

「やっぱり、嫌なやつだな。また1年、先生が担任と思うと、ため息が出るよ」

成海はアヒル口を見せながら嫌そうな顔をする。新学年で坂本が受け持つことになった

2年3組に、成海も運よく入ることになっていた。

「じゃあ、担任がどうしても嫌なんでクラスを変えてください、って直談判してこいよ」

「・・・そこまではしないけど」

坂本の皮肉に、成海はシュツと肩を窄める。クラス替えて3組になれたことに、坂本の前で成海が喜色満面に飛び跳ねていたのを知っていたから。

「先生、ちょっといいですか？」

そこに、2組の女子生徒が質問があると入ってきた。坂本がそれに対応していると、成

海は亜鈴先生の方へ離れていく。

「あれっ、もういいの？」

「いいんだよ、先生は人気者だから」

亜鈴の机の上に置いてあった蛍光ペンをいじりながら元氣なく言う、吉備先生が口を開いた。

「確かに、坂本先生はウチの女子生徒の人気トップですからね。顔立ちもいいし、性格も氣立てがいいし、若いつていうことなしですから。私もね、5年前でしたら負けてませんけどね」

成海からの冷たい視線が刺さると、吉備は失礼しましたと添える。「みんなね、好きな先生の授業は頑張るから、理科の平均点は結構いいみたい。それこそ、

成海さんもその1人なんでしょうけど」

「私は違うよ、そんなじゃないもん」

嫉妬心で知ってないフリをする成海に、どうなんだかと亜鈴は笑みを浮かべながら言う。

成海は職員室を後にすると、坂本宛てに「今日、部屋に行きます」とメールを送った。

坂本が学校終わりで自宅に戻ると、すでに成海ミルコの姿があった。

「先生、おかえり♪」

「ああ、ただいま」

成海は満面の笑みで出迎える、それは作られたものなんかじゃない自然な笑顔だった。

職員室でよく見せる、ムツとしたような表情はどこにも見当たらない。

「5分前に着いたの、これから夕食の支度するから待っててね」

「ああ、ありがとう」

あの日、成海と唇が合わさった日、その後に2人には何も起こりはしなかった。別れ際、

成海から番号とアドレスを聞かれ、躊躇はしたが彼女の焦点の定まっ
つてない瞳を前にする
と口が動いていた。それ以来、成海から1日に2〜3回の電話やメールが届くようになる。

その全てには、「会いたいよ・・・」という言葉が付属されていた。
教師と生徒という立場
上、そんなに頻繁に会うことは危険といえる。それに、彼女が親に
言う嘘にも限界がある。

友達と遊ぶにしても毎日ということもいかず、時間も遅くまでは使えない。実際に友達と

遊ぶ日もある、だから2人が会う日も週に1〜2回ほどが限界だった。その数多くない2

人の会う日も、大抵は坂本の自宅となった。むやみやたらに、近所に買物になんか行けや

しない。生徒や保護者や教員に見つかりでもしたら、2人ともただじゃあ済まない。それ

は成海が最も気にしていた、そうになったら最愛の人に会うことが出来なくなるから。坂本

との関係が続けるためなら、多くある規制を守ること、偶さかの逢瀬であることも仕方がない。

「先生、ニンジンが嫌いなんですよ？」

リビングで寛いでいると、キッチンから成海の声が響いた。

「ああ、そうだけど」

「ちゃんと、買ってきてあげたから入れとくよ。腕に縋りを掛けて作るから、残したら許さないからね」

「・・・お前も充分に嫌なやつじゃねえかよ」

「だってえ、昼休み、他の女の子たちと楽しそうに喋ってるんだもん」

「じゃ、無視しろって言うの？」

「そうじゃないけどさ・・・」

自宅の合鍵は坂本から渡した、いろいろと面倒なことが無いようにと。自宅前やマンションの前で制服姿で待たれても、教師として困る。でも、成海からのアプローチを断るこ

とは選択しなかった。正直、坂本も彼女の容姿や性格に惹かれていた。その成海が自分の

ことを想ってくれてるのだから、立場というものの以外で彼女を拒否する理由はない。

「先生、美味しい？」

「ああ、ニンジン以外は美味しいよ」

「へええ、学校でもそのぐらい素直ならいいのに」

夕食が終わると、坂本は翌日の授業の予習に入る。その間、成海は坂本の近くでテレビ

を見ている。成海としては、ただ少しでも長く坂本の側にいられればよかった。その時間

制限もやがてはやってくる、22時半が彼女のそれだった。そして、22時を過ぎると、

彼女は別れを惜しむように坂本の側に寄ってくる。

「先生、側にいてもいい？」

坂本から返答はしない、それをOKという返答として成海は席を移る。身体をひつつか
せると、そのうちに成海から坂本を抱き寄せる。2人の間に起こる、
愛し合うための行為

は全て成海の方からなされる。坂本から何かをすることはないし、
それを成海は承知して
いた。坂本はあくまで成海の教師である、真面目な坂本にそれを破
ることは出来ない。だ

から、坂本の方から成海をたぶらかすことはしない、家に来てほし
いということもない、

成海の身体を抱きしめることもしない、唇を合わせることもしない。
「・・・先生・・・大好き・・・」

その言葉を繰り返し、最後に何回かのキスをする。そうしている
うちに22時半を迎え、

名残惜しむように成海は身体を離す。毎度、成海もキスよりも先の
行為には手を伸ばさな

かった。彼女の中で、それは高校を卒業してからと決めていたらし
い。

正直、坂本は2人の関係が進展していくのに危惧も覚えているの
が事実だった。2人の

ことがバレたなら、おそらく一緒にはいられない。このまま、プラ
トニックな関係が続け、

卒業してから事を運ばせればいい。無理はしなくていい、今の状態
を続けていければ。

☆

群青高校の職員室の電話が鳴ったのは、空が暗みがかってきた1
8時過ぎのことだった。

対応したのは教頭だった、電話口で深々と頭を下げる様から深意で

あることは解せる。ち
ようど部活終わりの時間帯で職員室には教師が集まっており、みんな何事かと一様に顔を見合わせていた。

「藤野先生、ちょっとこちらへ」

教頭に呼び出されると、主任とこちらには届かない程度の声で会話を続ける。話が終わると、主任はレザーバッグを持って職員室を後にしていく。やや焦点の定まりきらない視線で、落ち着きのない様子だった。

その後、教頭から事の説明が話された。事を起こしたのは、主任が担任を受け持つ3組の直浦東沙だった。直浦は書店で漫画本の万引きを店員に見つかり、警察へ通報された。

「直浦くん、どうなっちゃうんですか？」

「それは僕に聞かれても・・・学校側が対処すると思うんで」「停学とかになっちゃうんですか？」

「そこまではないですよ、今後このようなことがないようにって厳重に注意を受けて終わりだと思います」

「・・・どうして、直浦くんが」

1学年の教員の全員が一致する疑問だった。直浦は真面目で勉強も出来て笑顔のたえない優しい生徒という印象だったから。直浦にかぎって、それが全員の思うところだ。

翌日、朝に臨時職員会議が行われ、直浦東沙の一件における詳細が話された。教頭からは改めての事のなりゆき、主任からは直浦と実際に話をした経緯について話があった。主

任の話によると、直浦は塾で行われた試験の結果が悪く、それにむしゃくしゃして万引き

という行為に走ってしまったらしい。主任が警察へ迎えに行き、その後二度とやらないという約束を交わした。

「直浦くん、どうして万引きなんかしたんでしょうか？」

その日の休み時間、主任が職員室にいないことを見計らって松原が切り出した。

「主任が言ってたじゃないですか、塾の試験の結果が悪かったって」

「でも、試験の結果ぐらいで万引きなんてするんでしょうか。中間テストや期末テストと

か、内申書に関わってくるような試験ならともかく」

「真面目ですからね、直浦は。いつの間にか溜め込んでたストレスが重なって、そこで溢

れたんじゃないんですか」

「そうなんですかね・・・」

納得がいかないのは、松原だけではない。彼に関わっている人間なら、そこに疑問符が

点るのは普通だった。ただ、ここから黒岩嘉乃の一件が俄かに動いていこうとは誰もが思いはしていなかった。

第19話

直浦東沙の一件から、主任はいつもの緊張感を失っていた。倦怠感を憶えたように、ふ

と窓外の風景を眺めていたり、ため息の回数も増えていく。周りの教師もその様子を察知

していたが、気を遣ってか声を掛けずにいた。

「主任、大丈夫ですか？」

主任が1人になる機会を窺い、美術室の前の廊下で外を見遣っているところに声を掛ける。

「最近、元気がないようなん。みんな心配してますよ、いつもの緊迫感がないって。ピ

リピリした空気もあると困るけど、ないとないで物足りなかったりするみたいです」

「・・・松原先生が言っていました？」

「いえ、松原先生は怒声が飛んでこないと何だか間が抜けるって言ってました。やっぱり、

主任はああだこうだ口うるさくしてる方がらしいんですよ」

「・・・坂本先生」

坂本の慰藉の言葉に、主任は少し気が戻った。

「今日、終わった後に時間空いてますか？」

「時間ですか・・・一応、空いてはいますけど」

「話を聞いてもらいたいんで、付き合ってもらっていいでしょうか？」

少し間を置いて、構いませんよと返答した。

黒岩嘉乃が命を絶った3日前、彼女の姿を職員室で見た。松原に呼ばれたようで、注意を受けていた。

「黒岩さん、最近ちょつと忘れ物がひどいんじゃないかな。先生方に迷惑がかっちゃうから、なるべく持って来るようにしてほしいんだ。教科書とかノートとかないと不便でしょ、後々でテスト勉強とかに使うわけだし。まあ、私も他人のことを言えた義理じゃないんだけど」

黒岩を傷つけないよう、松原は出来るかぎり柔で優しく言を続ける。

「これから注意してもらいたいってことなの、要は。自分の部屋にその日の持ち物を書いておくとか、対処法はあると思うから」

「・・・すいませんでした」

「ううん、いいの、いいの、これから気をつけてくれれば」
そんなやり取りに終始し、黒岩は職員室を後にした。

「松原先生、注意するならもう少し厳しく言った方がいいんじゃないでしょうか？」

松原の対応に、主任が口を挟む。

「生徒に気を遣いすぎです、言うときはハッキリ言ってください」

「はい・・・すいません」

主任に言われ、松原は視線を落とす。

「あと、体育の件、言い忘れてませんか？」

「あつ、すいません！」

脇野からの指摘に、松原は自分のミスに気づく。

「本当に困ります、松原先生。1クラスの担任を受け持ってるわけ

ですから、しっかりしてもらわないと」

「……すいません……」

主任に怒られ、すっかり松原は意気消沈してしまった。さっきの松原の言葉じゃないが、

これじゃあ黒岩と五十歩百歩だ。

「まあ、あとで体育の件は伝えておいてください」

脇野の言う体育の件とは、黒岩が体育の授業に参加しないことだった。ちゃんと体操着に着替えて見学はするのだが、一向に参加しようとはしない。最初は参加していたそうだが、ある時期からぱったりとそれをしなくなった。病弱なわけでもなく、大きな怪我を負っているわけでもなかったため、体育を受け持っている脇野も原因が分からずに頭を悩ませるばかりだった。



その日の放課後、坂本は主任と居酒屋を訪れた。先日沐浴するほど飲み続けたときとは違い、テーブルには瓶ビール2本とグラスが2つ置かれただけだった。

「今日は、前みたいに飲まないんですか？」

「はい、今日はちゃんとした話なので」

一応にと乾杯だけ済ませ、主任は話に入る。

「話なんですが、直浦くんの件で聞いてもらいたいことがあって」

はい、と坂本は答える。

「直浦くんのごことで先生方に事の経緯をお話ししたんですけど。本当は、それ以外にも事

実があると言いますか・・・」

「他に？」

「・・・白状すると、1つだけ嘘をついたんです。直浦くんは試験のストレスで魔が差し
て万引きをしたと伝えましたが、本当はこれまでに何度も万引きを
していたそうなんです」

「・・・何度も？」

「苛々が溜まってくると、万引きをする習性がついていたそうです。
捕まった書店でも、

怪しいと目を付けられていたそうで」

「・・・それは、学校側に伝えましたか？」

「・・・いいえ、教頭にも言ってません」

「どうして、学校に伝えなかったんですか？」

「・・・そういう約束をしたんです、直浦くんと。学校には言わな
い代わりに、全て話
てくれると。でも、私は私で、1人だけで閉まっておくことが辛く
て・・・」

周りのテーブルで騒ぎ声が起こる中、そのテーブルだけが静ま
りをみせていた。オー

ダーしたビールも、乾杯をするために用意されただけのように置か
れている。

「直浦くん、両親が共働きなんです。父親は製鉄会社の社長で、母
親はデザイナーをして

いて。父親は仕事の都合で接待が多く、家に帰るのはいつも遅かつ
たそうで、母親も仕事

の都合で打ち合わせが多くて、毎日の生活リズムがバラバラで、1
人息子だった直浦くん

は小さい頃からあまり構ってもらえなかったそうなんです。そのせ
いで、直浦くんは万引

きとか悪戯とか非行に走るようになって。それで両親からはよく怒

られ、親同士も教育方

法で喧嘩が絶えなくなつて、家の中はいつも険悪な雰囲気の流れ
てて、そこは居心地の

悪さしか感じられなかったそうです」

「・・・そういう背景があったんですね、一連の行為には」

「表面は良い子に取り繕つてるけれど、中身では彼なりに悩んでい
るんです。顔は笑つて

ても、心は泣いてるんです。私は担任として、これまで彼のことを
分かつてあげられてま

せんでした。皆さんにああだこうだ言っておきながら、自分は何も
出来ないんです、笑

いものですよ」

「・・・でも、直浦は主任と話をして、もうしないと云つたんです
よね？」

「はい、それでも彼の心にある闇が消えたわけではありません。こ
れから、直浦くんはも

ちろんですが、もっと生徒と向き合えるようにしたいと思っています」

「・・・強いですね、主任は」

坂本がそう言うのと、そんなことありませんと主任はかぶりを振つ
た。

居酒屋でそのまま飲食を済ませ、2人は帰路につく。歩を進める
中、坂本は自身の中で

感じていた疑問を投げ掛ける。

「・・・どうして、直浦のことを僕に言ってくれたんですか？」

主任は足を止めると、坂本への返答を考える。

「・・・どうしてでしょうね、なんだか話しやすいんですよ、坂本
先生は」

「そうですかね、そんな人間には思えません、自分では」

「あれですよ。脇野先生は年上だから弱い部分を見せにくいところ

があつて、物織先生は

こういう真剣な話は苦手そうだし、長稲先生は頼りがいが足りない気がするし、松原先生

はその対象には見れないし。前も言いましたけど、坂本先生は新任だから、こういうの言

いやすいんです」

なるほどと坂本が笑みを浮かべると、主任もそれに続いた。

「1つ、聞いてもいいですか？」

「はい、何でもしょうか」

主任は先日の飲み潰れた一件について、事の真相を知ろうと切り出す。

「この前、2人で飲みに行ったときのことですけど……。私、本当に坂本先生をホテルに誘ったんでしょうか？」

「……。はい、まあ主任は酔ってたんだから、無かったことにしておきますよ」

「……。しなくていいですよ」

「えっ？」

坂本に近づいていくと、主任は間近の距離にいた。

「……。友達によく言われるんです、私は酔うと本音が出るって」

そう言い、坂本にキスをするとう身体を寄り添わせた。

「……。私は強くなありません、自分の弱い部分を曝け出すのが怖くて強がってるだけですよ」

思いもよらぬ展開に、坂本はただ身を任せることしかできずにいる。

「……。すいません、急に。驚かせちゃいましたね」

そう言いながら身体を離すと、主任は一つの言葉を言い置いて先を歩き出していった。

「……。今度、黒岩さんのことについて、お話します」

第20話

坂本と成海ミルコの恋人とは言いきれない、妙な恋愛関係は1年続いた。学校ではあく

まで教師と生徒、2人が話し込めるのは職員室などでのいつものやり取りだけ。意味のな

いことが多い話を成海が話し、それを坂本が良い様に扱うやり取り。

「先生、おかえり♪」

坂本の自宅を訪れると、成海は気兼ねなく甘えてくる。

「ねえ、何でクラスが別々になっちゃったの？」

「そんなこと俺に言うなよ、俺が決めてるんじゃないんだから」

成海が3年生になると、坂本は彼女の担任ではなくなった。坂本は再び1年生を受け持

ち、成海から会いに行かないと2人が学校で会う機会は無くなってしまった。

「先生とあんまり会えなくなって淋しいよ。1年にかわいい子がい
ても、そっちに行っちゃダメだからね」

「はいはい、分かってますよ」

そうあしらうと、成海は不満そうな顔を浮かべる。

「そうだ、お前、進路のことは考えてるのか？」

「・・・留年したら、また先生の近くにいれるんだよね？」

「おっ！」

「冗談でしょ、相変わらずの堅物だな。ちゃんと、大学のことは
考えてるから心配しな

いでよ。その代わり、受験勉強は手伝ってよね」

「・・・お前、特権は最大限に使うんだな」

「何でよ、合格してもらいたいでしょ。別に、私は卒業したら、そ

のまま先生の奥さんに

なったっていいんだからね」

「それはそれで、俺の世間体もあるだろ。ただでさえ、生徒として
いうところなのに、卒業してすぐはさすがにアレだろ」

「はいはい、分かってますよ」

さっきのお返しとばかりに、あしらいの言葉を成海は言った。

「・・・先生・・・好きだよ・・・」

22時を過ぎ、成海はいつものように坂本に身体を寄り添わせる。
1年間、2人はプラトニックな関係が続いていた。あと1年間、それを守れば恋先と一緒に
になれると信じて。

「・・・先生・・・卒業したら一緒になろうね・・・」

返事はしなくていいよ、と成海が言い足す。成海がいくら迫っても
彼女に手を出さない

坂本の心理を彼女自身も分かっているから。深入りをして2人のこ
とが学校にバレたら、

元も子もなくなる。危険な橋は渡らず、このまま卒業の時を迎えて
くれればと願うところ
だった。

その2人の関係に亀裂が生じたのは、成海が3年になって間もな
くの頃だった。

「最近、成海さんが来なくなりましたね」

職員室で亜鈴先生が呟く、確かに彼女の姿をそこではばたりと見
なくなった。

「ああ、受験勉強で忙しいみたいですよ。忙しいから先生なんか
構ってられない、とか

生意気なこと言ってましたから。まあ、うるさくなくなっていいん

じゃないですかね」

「それはそれで寂しいじゃないですか、成海さんがいると明るくなりますし」

勉強に打ち込みたいから、と成海は学校では坂本の側に寄らなくなった。それどころか、

バレーボール部の練習にも顔を見せなくなった。2人が学校で顔を合わせる機会は極端に

減り、たまたま廊下で擦れ違ったときにも彼女の態度は素っ気ないものに変わっていた。

「成海、何かあったのか？」

坂本の自宅に成海が訪れた際、その疑問を投げ掛けた。

「何かって、何が？」

「職員室にも来なくなったし、部活にも出なくなったし、挨拶も適当な感じだし」

「だから、勉強で忙しいんだよ。昨日も夜中まで過去問やってたし」
本人が気づいてるかは分からないが、成海表情からは笑顔が少なくなった。坂本の前

では、良くも悪くも感情を大っぴらにしていたのに。試験勉強で疲れてる、と言われれば
それまでだが。

「亜鈴先生や吉備先生も気にしてたぞ、職員室が明るくならないって」

「大丈夫だよ、私がいなくても他の女子生徒が先生のところに来るでしょ？」

これまでは週に1〜2回通っていた坂本の自宅にも、週に1回が決まりとなっていた。

週末の夕方から夜にかけて、そこだけが2人の時間が持てるようになった。ただ、そこでも成海の顔色は浮かない。

「先生、美味しい？」

「ああ、美味しいよ」

成海の用意してくれた夕食を坂本は素直に評した。これまでなら皮肉も込めたような感想を言っていたけれど、成海の反応の悪さに気を遣ってそれも出来なくなっていた。

「食べないのか？」

「うん、食欲が湧かないんだ」

成海は食卓の料理に手をつかなかった。少しでもいいから口に入れておいた方がいい、

と坂本が言うと、成海はゆっくりと食べ始めたが、すぐにそれを嘔吐してしまう。そして、

2、3回吐くと、そのまま泣き出してしまった。

「大丈夫か？」

「・・・見ないで、先生・・・」

涙ながらに、成海が訴える。

「・・・嫌いになられたら嫌だから、見ないでよ・・・」

「何言ってるんだ、どうしたんだよ」

鳴咽に近いくらいに引きながら泣き続けては、何度と咳き込んでいた。涙の理由を聞こ

うとしても、聞かないでの一点張りを彼女は続けた。

☆

坂本と松原は、いつもの老夫婦の営む喫茶店に集まっていた。坂本は、一昨日の主任の言葉を松原へ伝えた。

「・・・今度、黒岩さんのことについて、お話します」

主任は黒岩の何を知っているのか、それは坂本の探しているものに決定的に近づくもの

なのか。そもそも、主任は何故に担任ではない自分へそれを話そう

としているのか。考え

れば謎は多くなるばかりで、解けない絡まる糸に苦戦していた。

「何故、松原先生じゃなく、僕に黒岩のことを話そうとしてるんでしょうかね」

「・・・すいません、私は分かります」

松原の方を見ると、困惑した表情を浮かべていた。

「・・・主任は坂本先生のことが好きなんです。だから、頼りのない担任の私でなく、頼

りたい先生に話そうとしてるんです」

掴もうとしても掴みきれない、泳ぎ回る鯉のように松原の心内は蠢く。それは表面にも

出ていた、不安そうな面持ちを坂本に見せている。

「・・・まさか。主任ですよ、僕なんかに恋情を抱くわけじゃないじゃないですか」

上辺的な嘘を出した坂本だが、それはすぐ跳ね返されることになる。

「嘘つかないでください、私に」

「嘘じゃないですよ、そんなに疑わないでください」

「だから、私は分かっているって言ったじゃないですか!」

松原の上げた声に、レジにいたお婆さんが反射的にこちらに視線を向けている。静粛で

殺伐とした空気が流れる、他に客がいなかったのがせめてもの幸いだった。松原は涙目を

見せながら、1枚の写真をテーブルに置く。

「・・・これ、間違いなく本人ですよね?」

坂本はその写真に、目を見開く。写真に写っていたのは、唇を合わせている坂本と主任だった。

「何やってるんですか、2人で」

「・・・この写真、どうして?」

「今朝、ウチのポストに入っていました」

朝、松原が出勤の際にポストを開けると、見覚えのあるA3サイズの茶封筒が入っていた。

考える時間はいらなかった、それは黒岩のボロボロにされた教材道具が詰められていた。

茶封筒と同じものだった。恐々と封筒を開くと、そこには自分の目を疑いたくなるような光景の写った写真が入っていた。

「どうしてですか・・・主任とそういう関係なんですか？」

松原の涙目は坂本を真っ直ぐに見て、恋人の浮気のように問いただしていく。

「違います、これは主任の方から・・・」

「じゃあ、何で拒まなかったんですか？」

「いや、突然で驚いてしまっただけ・・・」

「坂本先生も主任に気があるんでしょ、だから受け入れてるんですよね？」

「だから違いますって、写真なんて場の瞬間的な部分を切り取るだけじゃないですか」

松原の発奮したように荒げていく声に、坂本も自然とそうなっていく。

「そうですね、写真じゃあ前後の成り行きとかは分かりませんもんね。この後、2人が

何をしてるかぐらいは予想がつきますけど・・・」

松原先生、と問いかけても、聞く耳を持たない。

「黒岩さんのことだって、主任に自分から迫って墮としたんでしょ。軽蔑します、そういう

うことする人」

「どうして、そうやって無茶苦茶な方向に持っていこうとするんですか」

「・・・だって・・・好きな人が他の人とキスしてるのなんか見た

くないに決まってるじ

やないですか……。冷静に物事を判断なんか出来ないし、悪循環に陥るしかないんです……」

そう言うと、松原は荷物を持って店を出て行ってしまふ。1人になった坂本は、うなだれるように肩を落とした。

「あらあら、もう冷めきっちゃったねえ」

30分ほどその姿勢を続けていただろうか、お婆さんの声で坂本はようやく現実を引き戻される。

「……。ああ、すいません」

「いいんだよ、詳しいことは知らないし、別に聞きもしないから。ただね、アンタはその

主任って人に何も気持ちを持ってないんだろ。だったら、あの子のことを信じてやりな。

男と女なんて、両方が信じてやれなくなったら終わりなんだよ。片方がダメになると

きは、もう片方が相手のことを信じてやるんだ。信じてられれば、そのうち相手は戻って

くるから。私が見てる分では、あの子はしっかり者ではないけれど、すごく良い子だよ。あ

の子を信じてやる気があるんなら、ちゃんと信じてやりな」

お婆さんの言葉は坂本の心内の的を捉え、迷走していた心持ちを安らげてくれた。

「ありがとうございます……。すいません、飲み物残しちゃって」

「気にしなさんな、今日は御代はいらないよ。今日のアンタたちのことは、見なかったこ

とにしておくから。今日、アンタたちはここに来てないし、ここで何も話してやいない。

何も飲んでやしないから、代金は受け取れないよ」

「・・・ありがとうございます」

「いいんだよ、常連さんだから特別さ。また、2人でいらっしやいな」

老夫婦に礼を言い、坂本は店を後にしていった。

第21話

翌日、群青高校での坂本と松原の間隙には形式張った会話しか為されなかった。松原は目を合わせようとせず、坂本を避けているのは一目瞭然である。坂本は松原に声を掛ける
雰囲気があればと思っていたが、この日は無理だった。

「松原先生、松原先生」

「・・・あつ、はいっ」

「ボツとしないでください、いくら陽気な気候だからって夢うつつになつてちゃ困ります」

「・・・すいません」

長稲の指摘に松原は我に返る、もちろん陽気で彼女がそうなっていたわけではない。

「1組の都堺、僕の授業中に気分が悪いつて早退しましたんで」

「あつ、はい、分かりました」

松原はそわそわしていた、近くにいる坂本と主任が気になつて仕方なかった。

昼休みに3組の直浦東沙の姿が職員室にあった。朝も彼はここに來ていた。万引きの一件で数日間欠席していて、今日が初めての登校となったため、教頭や主任へ改めての謝罪を述べ、「いろいろあるかもしれないけれど、頑張つて」と声を掛けられていた。

「藤野先生、お話つて何でしょうか？」

「うん、特につてわけじゃないんだけど、ちゃんと授業を受けれているかなつて思つて」

「大丈夫ですよ、みんな笑い話みたいにしてくれてるんで」

「そう、なら良かった」

やり取りはそれだけで、直浦は去っていった。

「直浦くん、何事もなく普段の生活に戻れたみたいですね」

「ええ、そうみたいです」

「日頃の行いなんですかねえ、いざというときに周りが助けてくれるんですね」

「はい、私たちも気をつけないといけませんね」

物織と主任の会話に、坂本は黒岩嘉乃を映した。直浦は周囲との関係が絶妙に取れてい

たため、今回の件でも手を差し伸べてもらえる。黒岩は周囲との関係が取れていなかった

ため、手を繋ぎ止めてもらえる人間がいなかった。これが2人の違いで、それによって黒

岩は命を落とすことになってしまった。人間関係の構築は大きく難しい、それは生死を分けてしまえるほど。



その日、20時頃に自宅に戻ると、マンションの入り口で声を掛けられた。

「坂本先生」

振り向くと黒岩嘉乃がそこにいた、彼女が亡くなる前日のことだった。

「どうして、ここにいるんだ？」

「ごめんなさい、勝手に家まで来ちゃって・・・」

彼女が何をしに来たのかは分からず、先を進めるしかなかった。ただ、ここまで来たと

いうことは、軽い話でないことは読み取れる。

「どうしたんだ？」

「先生に聞いて欲しい話があって・・・学校ではちょっと話しづらいんで」

坂本が黙っていると、黒岩の方から先を切り出した。

「・・・先生の家、上げてもらってもいいですか？」

坂本は黒岩の言葉に不埒な発想をした。当然、そうやってほしいということじゃなく、

そうやってはいけないということ。

「・・・悪いけど、それはできない。どこか、近くの店にでも入ろうか」

そう言うのと、2人は近場のファーストフード店へ向かった。

ソフトドリンクだけをオーダーし、対面に座ると本題に入った。

「でっ、話って何だ？」

「・・・先生は平和を迎える未来と破滅を迎える未来、どちらを望んでいますか？」

意味が分からなかった、毎度の無理難題な質問だと思った。

「・・・人々が手を取り合う未来と互いを汚し合う未来、どちらが良いと思いますか？」

とりあえず、坂本は彼女の言葉を聞くことにした。

「・・・笑顔ばかりの未来と泣き顔ばかりの未来、どちらを願ってますか？」

黒岩の言葉がそこで区切られた。

「それは簡単なことだろ、前者に決まってる」

「・・・そうですね、簡単ですよ」

黒岩の顔色は沈んでいた、何か困ったような表情を浮かべている。

「・・・じゃあ、何で人はそれが出来ないんですか？」

「それは・・・あれじゃないかな、お互いに変なプライドを持ったりするんじゃないか。」

国同士でも、国家の威信をかけて、ってよく聞くだろ？」

「・・・そんな変なプライドで、どうして罪のない人たちが死んでいくんでしょうか。争いなんて意味がないって分かってる人たちが犠牲になって、それを出来ない人たちが生き残っていくなんて不条理にも程があります。だから争いは無くなりません、そんな意味のないリフレインしかしていないから」

このとき、坂本は黒岩は世界平和について話してるものだと思っていた。難民や貧困、

戦争の激化地域の人々の苦しみを訴えてるんだと思っていた。

「俺も思ってるよ、それは。でもな、それは上の人間が変わらないと実際は難しいんだ。」

今はそれが出来てないんだ、平和を訴えながら争いをする国だってあるぐらいなんだから」

黒岩は、自身について言っていた。彼女の言葉は、いじめる人間、いじめられる人間、

という意味合いで語られていた。

「・・・どうすれば、変われますか？」

「・・・どうすれば、現状を変えられますか？」

黒岩は必死になっていた、瞳を見開いて坂本に訴えるように言っていた。

「さっき言ったように、上が変わることが1番の近道なんじゃないかな」

「・・・そんなの待てません、いつになるんですか。上なんか変わりはしません、変なプ

ライドの塊なんですから。ちょっとやそつとで変わるんなら、とっくに変わってるはずで

す。もっと、何か劇的に変わる方法はないんですか？」

「そんなこと言われてもな・・・一端の教師には思いつかないよ」

黒岩は悩むように俯いた、梨の礫のように彼女の悩みに坂本は回

答を出せなかった。

ファーストフード店を後にすると、坂本の自宅のマンションまで2人で歩く。会話はな

いまま、先程のマンションの入り口まで辿り着く。

「じゃあ、暗いから気をつけて帰ろよ」

坂本の言葉に、黒岩は返答しなかった。

「どうした？」

「・・・先生、家に上げてもらっていいですか？」

先程と同じ問いかけだったが、黒岩の心持ちは違っていた。

「上がってどうするんだ？」

「・・・」

返答はなかった、ただ黒岩の真剣な眼差しで真意は汲み取れた。

「それは出来ないよ、俺は教師でお前は生徒だ」

そう言うと、黒岩の瞳から涙粒が落ちた。我慢するように唇を噛んでいたが、右の瞳から流れていた。

「・・・先生、この前みたいに抱きしめてください・・・」

お願いします、とか細い声で嘆願するように言う。心身不安定な黒岩の状態に心内をく

すぶられ、坂本はその身体を抱き寄せた。黒岩の気持ちを抑えてやらないといけない、た

だそれ以上に事を運ばせることはできないのも事実だった。結局、自分は中途半端なこと

しかしていない、そう思いながら坂本は彼女が泣き止むまでその身体を包んでいた。

☆

坂本は一昨々日の居酒屋にいた、眼前にいるのも一昨々日と同じ

主任だった。あのとき

に言われた、黒岩嘉乃の話を聞くために。

「私、黒岩さんに手を上げたことがあるんです」

「・・・主任が黒岩にですか？」

はい、と言うと主任は先を続ける。

「入学したときから、彼女のことは目に入っていて。松原先生もそうですけど、要領が極

端に悪い人を見るとつい怒ってしまうんです。黒岩さんはいつも一人でいるから、班行動

の授業でも自分からは全く動かないし、私が無理矢理に班を組ませないとならなくて、そ

ういうのを見てると我慢できなくなってきた。よく注意をしてたら、ある日に黒岩さんの

方から平手で頬をぶたれました。きっと溜まってしまったんでしょうけど、私もそれでカ

ッとなって手を上げてしまいました」

主任の言葉に疑問を覚えた、黒岩が人に手を上げるなんて想像がつかない。平和を願っ

てる黒岩にかぎって、そんなことを。

「学校側の調査で私に分が悪いようなことになりたくなくて、これまで言えませんでした。

もちろん、私のせいで黒岩さんがあんなったわけではないんでしょうけど。でも、自分も

その一部になってるのかなと思うと、今でも胸が痛みます」

「・・・苦しまないでください、僕だって一緒です。黒岩に手を差し伸べてやれなかった、

主任と同じですよ」

そうだ、きっと黒岩のSOSに伝えてやれなかった全員が同罪なんだ。

第22話

衝撃的な展開に事が発展してるのを知ったのは、亜鈴先生からの言葉だった。2人とも

授業のなかった時間に呼び出され、屋上に行くとすでに亜鈴の姿があった。

「話って、何でしょうか？」

「・・・坂本先生、知ってますか？」

あらたまったような様相で、亜鈴は問いかける。

「何か、あったんですか？」

「・・・成海さん、女子生徒たちからいじめられてるんです」

耳を疑った、理解するには時間のいる言葉だった。

「どういうことですか？」

「・・・坂本先生、成海さんと付き合ってるんですよね」

「・・・どうして、それを。」

「いやっ、付き合ってるといいますか・・・」

「私は大賛成です、2人がそうなったことをとても嬉しく思ってます。でも、それを快く

思っていない人がたくさんいるんです」

「・・・なんだ・・・どうなってるんだ。」

「2人の関係がバレてしまったようで、それが発端になって。成海さんが先生のことを好

きなのを知っている生徒が坂本先生の自宅に入っていく成海さんを見たそうで、不信に思

ってそれから何度か放課後に成海さんの後を着いていつては同じように先生の自宅に入っ

ていくところを目撃してしまったそうです。それが生徒たちに広まっていくと、生徒たち

は憤慨してしまつて。坂本先生は女子生徒の憧れの的ですから、それを気にしない女子

生徒は少なからずいます。そして、その子たちに成海さんはいじめられるようになって・・・」

そうか、そういうことか。成海ミルコが学校で自分の前に姿を見せなくなったこと、自

分への対応が素っ気なくなったこと、笑顔が見られなくなったこと、先日の自宅での泣き

乱れた真相がようやく坂本の中で繋がった。

「どうして、亜鈴先生はそれを？」

「私のところに相談に来ました、話し出した途端に泣き出してしまつて。坂本先生には言

わないのって聞いたたら、そんなみつともないところ見せられないつて。ずっと我慢してる

みたいで、見てるのが辛くなってきて・・・」

全てが初めて耳にすることで、それがたまらなく悔しかった。

「男子生徒のいるところでスカートをめくられたり、足を出されて転ばされたり、制服を

ギザギザに切り刻まれたり、絵の具を混ぜた色水を被せられたり、画鋲やペンを腕や足に

刺されたり、」

「もう、いいです！」

亜鈴の言葉は聞くに耐えなかった、耳を塞ぎたくなるのを堪えるのがやっとだった。

その日、初めて坂本の方から自宅に来るようにと成海にメールを送った。彼女の口から

真実を聞き、事を治めなければならぬと思ひ。

「・・・先生・・・」

20時前、自宅の扉の開けると、そこにいたのは全身ずぶ濡れに

なった成海ミルコだった。

「・・・どうした・・・何があった？」

成海は泣き出して、坂本の胸に飛び込む。放課後、校舎裏に呼び出され、5人の女子生徒からゴミと泥水を被せられたらしい。そのまま、成海はこれまで我慢し続けてきた分を坂本にぶつけるように泣きじゃくり、得体の知れないような気色悪い異臭を放つ成海を坂本はしっかりと受け止めた。

「・・・お風呂、ありがとう・・・」

一通り泣き終わると、坂本は成海をお風呂に入らせる。坂本のスウェットのパジャマを着た成海は、相変わらず手足の先の方を余していた。元氣なくソファに座ると、坂本と目を合わせないまま俯く。

「お前のこと、亜鈴先生から聞いたよ」

「うん、先生に言っちゃって亜鈴先生から聞いた」

「・・・ごめんな、俺のせいで」

「・・・先生のせいじゃないよ、謝らないで」

成海へのいじめの犯行は、全て坂本のことが好きな女子生徒による僻みだった。坂本は

こうなってしまったことは、自分に責任があるとしていた。

「どうして、俺に言わなかった？」

「・・・言えなかったんだよ、先生を悲しませるだけだから」

「でも、亜鈴先生には言ったんだろ？」

「・・・他に言える人がいなかったんだよ、生徒はみんな私がやられるのを面白がってる

し、教師でも亜鈴先生ぐらいしか頼れそうな人がいなかったから」

「・・・亜鈴先生は何も対応してくれなかったのか？」

「・・・私が何もしないでって言ったの、学校に私と先生のことがバレたら一緒にいられないじゃん」

「・・・いじめてる生徒たちに抵抗はできなかったのか？」

「・・・何かしたら、私と先生のことをバラすって脅してくるから」
そう言うのと、成海は坂本に寄り添った。彼女の身体は、小さく震えていた。

「・・・辛いよ・・・先生・・・」

一つ一つが坂本の胸に刺さる、自分が恋先をこんなにも苦しめてると。

「・・・成海」

そう言いながら、寄り添ってた成海の身体を離す。そして、自分の出した決断を彼女へと告げる。

「・・・別れよう」

震えていた成海の身体がピタリと止まり、涙目で坂本を見遣った。

「・・・どうして・・・どうして、先生？」

「・・・お前のこと、これ以上苦しめるわけにいかない」

「・・・大丈夫だよ、卒業するまで我慢するから」

「・・・無理だよ、学校にバレるのだって時間の問題だ」

生徒の間では、既に坂本と成海の関係は広まっている。それが学校に知れ渡るのに時間は

は掛からないだろう、まして卒業までなんて不可能だ。

「・・・私、頑張れるよ・・・だから、一緒にいてよ」

「・・・もう放っておいても学校中に知られる、直に一緒にはいられなくなるんだ」

「・・・ダメだよ・・・私、先生がいてくれるから我慢できてるんだよ。先生がいなくなったら・・・もう、ダメになっちゃうよ・・・」

「・・・俺が学校にいなくなれば、いじめもきつとなくなるよ」

「・・・今さらなくなっただって関係ないよ、もう友達だっていないんだから。先生のいな

い学校に行ったって意味ないじゃん、分かってよ」

訴えかける成海の言葉に、坂本の心は大きく揺らぐ。でも、この先もさっきのような成

海の姿を目にすることは無理だった。

「・・・ごめん・・・別れよう」

二度目の別れの言葉を口にするると、成海は溜めていた涙粒を頬に流した。

「・・・私のこと、嫌いになっちゃたんじゃないよね？」

坂本はこうべを垂らす。

「・・・じゃあ、離れ離れになったとしても、卒業したらまた一緒にになれるよね？」

「・・・悪いけど、保障はできない」

成海は涙を必死で抑えていた、泣き叫びたい感傷をなんとか堪えていた。

「・・・約束してくれなきゃ、待てないじゃん」

「・・・すまない」

成海は衝動的になりそうなのを抑え、なんとか平静を保たせようとしている。そして、

スウェットの上衣を脱いで、坂本に強く視線を向けた。

「・・・じゃあ・・・抱いて・・・」

「・・・言葉で約束できないなら、身体で約束して・・・」

「・・・私を抱いて、先生と繋ぎ止めておいてよ・・・」

坂本が躊躇を続けると、成海はスウェットの下衣も脱いだ。成海のまっさらな裸は、肌

も白くてプロポーションの良さが際立つ綺麗な身体だった。ただ、今の坂本には、それが

成海を抱く理由になどなりはしない。

「・・・ごめんな・・・俺には今すぐお前をそうしてやることはできない」

「・・・どうして・・・どうして、ダメなの？」

「・・・近くなればなるだけ、離れたときに相手が恋しくなってしまう。お前が苦しい

とき、その苦しみがより大きくなるんだ。そして、お前が苦しんでるとき、俺は近くにいてやれない。お前は俺にいてほしいのに、そうない。それで、

また俺もお前も苦しむことになる。互いを苦しめるだけなんだ、今2人が抱き合ったところで」

本当は勇気がなかったただだった、深みに入り込みすぎるのを恐れて。

「・・・そんな理由なんかいらないよ、私が抱いてほしいときに抱いてよ」

「・・・すまない」

成海の流す涙は、頬を伝い、顎先から落ち、更な上半身を伝っていった。

「・・・先生にいてもらえないと私はダメになっちゃうんだよ、それでもいいって言うの？」

「・・・すまない」

「・・・私を見捨てるの？」

坂本は何も返答できなかった、成海は服を着て荷物をまとめて逃げるように帰っていった。

彼女の出て行った部屋には乾いた風が窓に吹きつける音が響いている、坂本と成海の

2人が会ったのはこれが最後となった。

その日の晩、成海ミルコは自宅の浴室で左手首を切った。彼女の母親が発見したときに

は既に意識はなく、青ざめた顔と赤みがかった浴槽の湯を目にして、母親は半狂乱状態になったらしい。救急車で運ばれた先の病院で処置を受けたところ、幸いに命に別状はなかった。自宅に遺書などもなかったことから自殺ではなく、自傷行為であろうと判断された。

翌日、学校側の調査から成海へのいじめ、その原因である坂本との関係が公となり、いじめの主犯格の生徒たちへ停学処分、加担した生徒たちへ厳重注意、坂本は苑倉見高校からの異動を言い渡された。その日の周囲の教師や生徒たちの白い目は、今でも鮮明に脳裡に焼きついている。昨日までの自分に対するものとは正反対に、まるでケダモノを見るような目をされた。亜鈴先生や吉備先生は大丈夫だからと背中を押してくれたが、坂本の身体の中は全ての疑問や雑念を払拭してしまったように空っぽになっていた。当然、それから坂本が成海の目の前に現れることもなく、彼女のことは異動をしてからも亜鈴先生が便りを送ってくれて知ることができていた。群青高校に移った坂本には以前の気力は全くなく、今までと同じように生徒と心を通い合わせるような坂本は影を潜めていた。そして、そんな矢先に起きたのが、黒岩嘉乃のことだった。彼女の存在に至極当然のように、坂本は成海ミルコのことを照らし合わせた。これ以上に深入りする危険に怯える自分と、もう二度とあんなことを起こしてはいけないと奮起したい自分との葛藤にもまれ、結局はどっちと

もつかない対応をして黒岩まで失うこととなってしまうた。そこで、坂本はようやく堪忍袋の緒が切れたように吹っ切れることが出来た。黒岩嘉乃の一件に正面から立ち向かい、真実を解き明かそうと松原に力を貸すことを決めた。黒岩のために奔走することが自分の犯した過ちへの少しでも報いなるのか、答えは結果が出てみないことには分かりえない。ただ、今は信念を持って立ち向かうのみだった。

☆

逆境になると、成海ミルコと黒岩嘉乃のことを坂本は思い出す。自分の心を自ら痛めつけ、先に進まないといけないと己への奮起を促す。

「松原先生、お仕事終わるなら一緒に帰りましょう」

「あつ、はっ、はい・・・」

初めて坂本の方から帰宅を誘われたため、松原は驚いて思わず頷く。松原の方から誘うのが通常の成り行きだったため、松原は何かあるのだろうかと帰り道でも考えてしまっていた。

「この前のこと、まだ怒ってますか？」

「・・・怒ってはないですけど・・・悲しいです・・・」

想いを寄せる坂本のあんな写真を見せられ、松原は失意を続けていた。

「ちゃんと謝らせてください・・・すみません」

そう言い、坂本は頭を下げる。

「そんな・・・頭を上げてください。それに、坂本先生がどうして私に謝るんですか。私、

別に先生の何でもないじゃないですか。何か変ですよ、こういうの」

「でも・・・僕は松原先生のことを傷つけました」

「どうしてですか・・・坂本先生と主任がそうになって、何で私が入ってくるんですか？」

強がりでも松原は言っていたが、坂本には全てが伝わっていた。

「・・・この前、僕のことを好きだって言っていたので」「えっ？」

松原は足が止まってしまい、当日のことを走馬灯のように頭に駆け巡らせる。

「・・・私、そんなこと言いました？」

「・・・はい、好きな人が他の女の人とキスするのなんか見たくないって」

反射的に松原は坂本から目を逸らし、急激に高まる昂奮を抑えられずにいた。

「・・・憶えてませんか？」

「・・・すいません、カッとなってたから」

そこで会話は途切れてしまい、しばらくその場に立ち往生していた。

ミャーと野良猫の鳴く声が響く、いつのまにか彼は近くにごろりと丸まって寝ていた。

その道の常駐となっているように、その野良猫の姿は定期的に見かけている。

「猫ちゃん、またいますね」

久々の言は松原からだった、正直あの野良猫に感謝したい。

「ですね、またぐうたらしてますよ」

目を合わせると、やがて2人でくすくすと笑い出す。

「先生、よかったら言い直させてもらっていいですか？」

「何がですか？」

「私みたいな、ドジでのろまでダメな教師なんか坂本先生が好きじ

やないのは分かってま

す。でも、私はいつも先生に助けてもらってるうちに次第に惹かれていって、今では先生

の近くにいただけでドキドキしちゃってるんです」

視線を合わせたまま、少しの間があった。意を決するように、松原は一つ息をした。

「・・・好きです、坂本先生・・・」

そこからまた少しの間が生じ、この緊迫した空気に我慢できないように松原が開口する。

「・・・ダメですよ、私なんて。何言ってるんでしょうね、私ったら」

恥ずかしがる松原に、坂本がようやく口を開いた。

「松原先生」

「はい」

「・・・僕、まだ何も言ってますよね？」

「・・・はい」

再び視線が合うと、坂本は松原にキスをした。唇を離すと、松原はそこで固まったように動かずにいた。

「松原先生？」

「・・・はい・・・」

「大丈夫ですか？」

「・・・はい・・・」

固まったまま、口だけを動かして松原は返答する。

「・・・一つだけ、いいですか？・・・」

「何でしょう」

「・・・今の・・・ファーストキスなんですけど・・・」

「・・・問題がありました？」

「・・・いえっ・・・問題なんてないんですけど・・・」

「・・・ただ・・・私の中で、もっとロマンチックなシチュエーシ

ヨンを想像していたんで・・・」

誰もいない歩道、街灯も当たっていない暗闇、近くには丸くなった野良猫。確かに、ロ

マンチックなシーンとは言えなかった。

「・・・それはすいませんでした」

そう言うのと、松原は何度もかぶりを振る。

「・・・嬉しいです、すごく嬉しいです、うまく表現できないだけで・・・ごめんなさい」

松原の言葉に、坂本はフツツと笑った。

「そんなことで、謝らないでくださいよ」

「・・・すいません」

ばつの悪そうな顔を浮かべ、この空気が居たたまれなくなったのか、松原はバッグから何かを取り出して、それを坂本へ押しつけて何も言わずにその場を去っていく。

早歩きで進んでいた成海は、止まらない胸の動悸を抑えるようにバッグを胸元に押さえつけていた。2分ほどが経つと、そのバッグの中の携帯が音を鳴らした。送信者はすぐに分かった、坂本への着信音は別で設定しておいたから。携帯を手にとると、そこからはメールでの会話を続けた。

「チケットありがとうございます、この映画観たかったんです」

「急に帰っちゃってすいません、恥ずかしくてたまらなくなっちゃって。映画、坂本先生

が好きそうなのを選んだんだんですけど気に入ってくれてよかったです」

「週末にでも行きましょう、松原先生に伝えておきたいこともあり

ますし」

「伝えておきたいことって何ですか、気になっちゃいます」

「そのときに言いますから、松原先生に関することじゃないので気にしないでおいでくだ

さい。今日のところは失礼します、おやすみなさい」

「はい、おやすみなさい」

メールでのやり取りはそこで終わった。坂本は松原との関係を進めていくために、成海

ミルコとのことを話すことに決めた。

第23話

雲ひとつ見当たらない快晴から送られる射光が眩しいかぎりだった。映画館の前に着く

と、まだ松原の姿はなく、坂本は一つ息を吐いた。辺りを見回すと、同じように待ち合わせ

せ相手を待つ人たちを見遣れる。そんな1人1人の外見から相手を予想してみる、これが

意外に時間潰しになったりするものだ。ただ、この日は時間を潰す行為にしかならず、待

てども松原は姿を見せなかった。

「坂本です、おはようございます。待ち合わせの時間を過ぎてるのですが、連絡もないの

でどうしたのかなと思ってメールしました」

そう打ち込んだメールを送ると、返信を待つ時間が続く。映画館のすぐ近くには遊園地

もあったため、辺りは様々な音楽や人々が行き交い、この週末には賑やかさを響かせてい

た。しかし、そんな周囲とは正反対に坂本の携帯は静けさを続ける。おかしいと感じた、

松原のような生真面目な人間が時間に遅れていること、遅れていることに対して何も通信

がないこと、この今の状況に。

その理由を頭内で考えていると、サイレンを響かせるパトカーが目の前を走り抜けてい

った。ドップラー効果を感じながら注目していると、数百m先でその音が止まる。周りに

いる人たちも何事かと様子を探ろうとしていると、1分ほど後にサイレンを響かせながら救急車が目の前を過ぎていく。嫌な予感が坂本の身体を走った。坂本は目の前の道を駆けていき、パトカーと救急車の停まっているところまで走った。15〜20人の人だかりを掻き分けると、目を覆いたくなるような光景がそこにあった。救急隊員に担架で運ばれてきたのは、土砂にまみれて汚れた松原ひのきだった。何かに怯えるように、両腕で身体を抱え込み、大きく震えている。瞳から流れる涙だけでなく、鼻と口からは血が流れていき、いつも整えてある髪形も服装もボロボロに崩れて汚されていた。そんな松原を前にして、坂本は萎縮したようにただ立ち尽くすことしかできなかった。側に寄って抱きしめてやることも、声を掛けてやることもできなかった。担架で救急車に運ばれて、走り去っていく車を見ていることしかできなかった。坂本は立ち尽くしたまま、しばらくは何も考えることをしなかった。目の前で起こった現状を現実として受け入れることができず、その狭間を揺れ動く葛藤で苦しむことしかできなかった。

10分ほど、その状態が続いただろうか。ようやく己を現実に取り戻すことができると、坂本はそこから1番近くにある病院に走った。受付で10分前のことを話すと、松原はこの病院にいたことが判明した。「現在は処置中のため、まだ詳細は分からない」と言われ、

ロビーの椅子に腰掛けて松原の処置が終わるのを待った。その待ち時間は、やけに長く感じた。こちらの送信に対して返信のない松原を待ち続ける当て所のない時間も長かったが、今すぐにでも彼女の状態を知りたいと待ち続ける時間はさらに長かった。45分が過ぎた頃、松原の処置が終わり、病室に移されたことを知らされる。しかし、心身の状態不安定という理由で面会謝絶と言い渡された。坂本は悩むことなく、松原の病室の前へ行き、そこにいることを決めた。結果に変わりはない、そのまま時間だけが過ぎていき、病棟の暗転の時間に坂本は帰路につく。この後、松原は3日間の入院の後、無期限の自宅静養を送ることになる。

翌日、臨時職員会議が行われ、松原に関する事件の詳細を知る。松原は坂本との待ち合わせに間に合う時間で目的に向かっていたところ、映画館まで数百mというところで20歳前後の男5人に囲まれると、その横にあった遊園地と住宅地に挟まれるように伸びていた立ち木の群の中に連れ込まれ、暴漢たちに反撃のできないように口と手と足を封じられて強姦にあった。警察の調べでは、双方に関係性がないとして無差別によるものと判別された。松原は現在も心身不安定な状態で、母親以外の面会は謝絶のままだった。

「・・・どうして、松原先生がこんな目に遭わないといけないんですか・・・」

物織の発した言葉に的確に答えられる人間はいなかった。職員室には葬祭のような重苦しい空気が流れ、そこでもがくしかなかった。

松原の受け持つ授業は、臨時の教師が来るまで自習扱いとなった。3組の授業は坂本が

担当した、自習時間に立ち会うだけのことだが。例に倣ったように、生徒たちは雑談に明け暮れていた。それに対し、坂本がどうこう言ったりはしない。見て見ぬ振りに徹しよう

としていたが、耳に入った言葉がそれを無効にさせた。

「先生、松原先生って大丈夫なんですかあ？」

軽い聞き方にムツとはしたが、それは耐えられた。

「ああ、しばらく休むことにはなると思うけどな」

適当に答えた、この話題は避けたいところだったから。

「松原先生って結構胸大きいからさ、レイプする方も興奮したんじゃないやねえ」

その言葉は坂本の感情の線を切れさせた、気づくと目の前の教卓を蹴り飛ばしていた。

「今の言ったやつ、どいつだ！」

初めての坂本の怒号に、教室は一瞬で静まりかえった。

「言っていることと悪いことも分らないのか、お前ら！」

「そんなことも分からねえんなら、小学校からやり直してこい！」

「言っとくけどな、他人の痛みも分かってやれないやつなんか最低な人間だ！」

そこに隣で授業をしていた主任が入ってきた、吃驚した表情で静粛した教室の様相と坂

本を見ている。

「・・・どうしたんですか、坂本先生」

何でもありません、と坂本は答えた。無論、何でもないことない

のは主任には見て取れた。ちゃんと自習しなさい、と生徒たちに厳しく言いつけて、主任は教室を後にしていく。

その日、坂本は教頭からお叱りを受けた。ただでさえ、最近続々さまに事件が起こつて
る中、校内でまで荒いだ事をしないでくれと。坂本自身、教頭の口
にしていることはほと
んど聞き流していた。もう、在り物のような言葉を耳にするのはう
んざりだった。

「気にしないでくださいね、坂本先生は間違つてませんよ。いくら
生徒だからって、そんなこと言うやつは言つてやらないといけません」

1学年の教員は、こぞつて坂本の味方をしてくれた。

「申し訳ありませんでした、ウチの生徒のせいで」

3組の担任である主任は、生徒の失言を坂本に詫びる。

「主任が謝らないでください、僕のやったことも問題ありますから」
坂本はそう元氣なく言う。松原のことを触れられると、心内に穴
を掘られたように空洞
が生じた。そして、成海ミルコと黒岩嘉乃を救つてやれなかった自
分への怒氣が湧いてき
た。

第24話

松原ひのきに襲い掛かった事件から6週間が過ぎようとした頃、学校での仕事を終えた

ばかりの坂本の携帯に彼女からの着信が届けられた。

「・・・もしもし・・・」

「・・・坂本先生・・・ですか？・・・」

久しぶりに耳にする松原の声音は、力の抜けたように脆弱なものだった。その声は最後

に彼女に会った、唇を合わせたあの日以来になる。

「はい、僕ですよ」

坂本がそう言を発すると、電話口の向こう側の松原の啜り泣きが聞こえた。久々に恋先

の声を聞け、不安でいっぱいになっている心内が振れてしまい。

「どうかしたんですか、松原先生？」

「・・・会いたいです・・・坂本先生・・・」

「・・・会いたい・・・」

その涙声に、心内を掴まれそうになる。その言葉で、彼女がどれだけの想いでそれを発

しているのが分かったから。場所と時間を決めると、坂本は気持ち早歩きで目的地へ進んでいく。

待ち合わせ場所は、いつもの老夫婦の営む喫茶店にした。ここに来るのは久しぶりにな

る、約2ヶ月前に松原と喧嘩別れしたとき以来だ。店の入り口を開けると、お婆さんが目

線で「来てるよ」と合図してくれた。老夫婦に松原の事件のことは

無論に伝わってはいない。

い。おそらく、坂本と松原が仲直りをするための話し合いで来ていると思ってるのだろう。

松原は店の奥の席に座っていた、目線は下に向いたまま元氣のない姿だった。これまでなら、坂本の姿を見つけると「こっちです」と手を振っていたくらいだったのに。顔が少し

ばかり細くなり、顔色の悪さも目で見て取れた。実際に体重も5く6kg落ちたそうだが、

生気が低くなっているのは一目瞭然だった。椅子に腰を降ろすと、松原はゆっくりと顔を

こちらに向けた。

「痩せましたね・・・体の方は大丈夫ですか？」

「・・・はい・・・ちよつとずつですけど、食欲も出てきてます・・・」

「急がなくていいんで、精神的にも肉体的にもゆっくり元に戻していってください」

「・・・はい・・・ありがとうございます・・・」

そこから少しの間があつた、店内にはいつものようなボサノバの音楽が流れている。会

話を急かせることはしなくなかったので、松原からの言を待った。

「・・・坂本先生・・・隣に来てもらっていいですか?・・・」

そう言われると、坂本は対面の席から松原の右隣の席へ移動する。まもなく、坂本の左

肩に寄り添うように松原は頭をそこへ乗せた。心なしか、彼女の呼吸が少し強く感じられるような気がした。

「・・・ごめんなさい・・・まだ、男の人を目にするのが嫌なんです・・・」

「・・・怖いんです、見られてると・・・また、何かされるんじゃない」

ないかって思っで・・・」

松原が鼻を吸る音が聞こえた、彼女の顔を見るとすでに涙が流れていた。あの事件で男性恐怖症に陥り、ここに来るまでの道程でさえも緊張してしまうほどだったそうだ。坂本

は松原をギュッと抱きしめてあげたかった、でもそれは出来なかった。男性恐怖症になっ

てる彼女にそれをするのはマイナスになるだけだろう。

「松原先生・・・肩を抱いてもいいですか？」

考え抜いた末の結論だった、ただ松原の力になってあげたくて。

「・・・お願いします・・・」

そつと左隣の松原の肩を抱くと、その身体は異常反応を示すように震え、呼吸も並々ならぬほど荒れてきた。

「・・・大丈夫です・・・続けてください・・・」

その言葉だけを頼りにして、震え上がる松原の肩を引き寄せていた。結局、喫茶店では

特にといつた会話はしないまま、閉店までその体位でいた。

喫茶店を後にし、街灯が疎らに照らす夜道を歩く。

「・・・ありがとうございます・・・今日は会ってくれて・・・」

「何言ってるんですか、連絡くれればいつでも駆けつけますよ」

「・・・家にいるというろろ考えちゃうんです・・・事件のことを・・・」

「・・・身体がさっきみたいに震えてきて・・・自分を沈めて、どんどん悪循環に陥っていくんです・・・」

「・・・ただ、そんなときでも・・・坂本先生のことは自然と浮かんできて・・・」

「・・・先生を思い出すたび・・・会いたい、会いたいって想いが

募ってくるんです……」

「……身体は男の人に拒否反応を示すのに……心は素直にドキドキするんです……」

松原は坂本を見ることをせずに言葉を続ける。

「……私がこんなことになって、どう思ってますか？……」

「どうって……どういうことでしょうか？」

「……嫌いになりました？……」

「嫌いってことはありません……ただ、何もないように振る舞うとなると、正直なところ無理はあります」

「……そうですね……何もないって思えなんて、無理ですもんね……」

「でも、めげないでください……時間は掛かるかもしれませんが、きつと元に戻れますから」

「……はい……ありがとうございます……」

そこから言葉はなくなった、密やかな空気が漂う住宅街を歩いて松原を自宅まで送り届けた。

「じゃあ、また松原先生のいい日にでも連絡をしてください」

「……はい……送ってくれて、ありがとうございます……帰ろうとすると、上着のスーツの裾を松原に引っ張られる。」

「どうかしましたか？」

「……言っておかないといけないことがあるんです……」

本当は喫茶店で言おうとしたが、雰囲気その話はできずにいたそう。

「……その……2ヶ月前の事件のとき、聞こえたんです……」

「……私を襲った集団の1人が言ってたんです……」

「……可哀相に、生徒に売られる先公なんてよ、って……」
開口した松原から届けられた言葉は、信じがたいものだった。

「それって・・・ウチの生徒がっていうことですか？」

「・・・分かりません・・・でも・・・」

その暴漢の言葉は、あまりにも大きな意味をもたせた。単純に考えれば、群青高校の生徒

徒によって松原先生の事件が起こったという考えになる。

「でも・・・どうして、松原先生が？」

「・・・私、多分狙われてるんだと思います・・・あの茶封筒だって、きっと・・・」

黒岩の教材道具、そして坂本と主任の写真が送られた、茶封筒。

あの茶封筒の送り主、

今回の事件の裏人、それが松原の中では重なっていた。

「・・・私が黒岩さんのことを調べてるのを知ってるんだと思います・・・警告なんです、

余計な詮索をするなって・・・」

「・・・これからも私に何かが起こるんだって考えると・・・夜も眠れなくて・・・」

そう言うのと、松原はまた泣き出した。彼女が泣き止むまで宥め、

その日はそこで帰路に

ついた。その道中、坂本は松原の言葉を頭に巡らせていた。松原の事件の裏にいたのがウ

チの生徒だとし、そいつが松原が黒岩嘉乃の事件を調査してることを知っていて、警告と

して彼女に傷をつけていってるのだとするなら、おそらくそいつは黒岩のいじめの主犯格

か加担していた人物なのだろう。ただ、今そいつの正体を決定づけるような証拠はなかつ

た。正直、そこに行き着くための道は一本しか坂本には見えていなかった。ならば、もう

躊躇はしてられない。沢川花、彼女はきっと何かを知っているはずだ。

第25話

翌日、坂本は沢川花を理科教員室へ呼び出した。理科室での授業がない、3時限目と4

時限目の間の休み時間に。失礼します、と沢川は平生な面持ちでこちらへやってくる。何

の用でしょうか、と沢川は目線で言ってきた。

「実はな・・・ちよつと、聞きたいことがあるんだ」

沢川は顔色を一つも変えなかった、いたって冷静にそこにいる。

沢川花は普通な女の子

だった、特別なアピールはしない、自分から何かを発信することが少ない、裏を返せば実体の掴みにくい生徒だった。

「沢川、黒岩と仲良かったんだろ？」

その言葉に対し、沢川は明らかに顔色をスツと変えた。眉間に皺を寄せ、頭に疑問符を点している。

「どうかしたか？」

「・・・いえ、どうして坂本先生がそれを知ってるんだろうと思つて」

返答をどうしようかと考えたが、そのままを伝えることにした。

「松原先生から聞いたんだ」

「・・・はあ」

心ここにあらずな返答をすると、沢川はしばらく何かを考えていた。そして、何か答えた。

に行き着いたように、坂本のことを直視する。

「分かりました、坂本先生だったんですね」

「・・・何がだ？」

「松原先生と一緒に、私と黒岩さんのことを調べようとしている人です」

沢川はあっさりとそこに行き着いていた、当然のように坂本はそれに疑問を抱く。

「どうして、そう思うんだ？」

「だって、松原先生みたいな人が1人だけでそんな探偵みたいなことが出来るとは思えま

せん。きっと、誰か松原先生と一緒にそれをしてる人がいるんだろうなと思っています」

「・・・そうか、察しはついてたのか」

少し戸惑ったが、坂本は沢川の仮説を認めた。

「坂本先生なら納得です。頭良さそうだし、嘉乃ちゃんとも交流があったし」

「・・・坂本先生のことはいろいろ聞いてます、嘉乃ちゃんから」

沢川の言葉に坂本が疑問の表情を浮かべていると、それを察したように言った。

「俺のこと・・・黒岩はなんて言ってた？」

「別になんてことないことです、あんまり覚えてもないような」

そうか、と坂本は言う。

「・・・嘉乃ちゃんが先生のことを好きだったのも知ってますよ」

その言葉に沢川へ注意を向けると、彼女は気持ち程度に口角を上げていた。

「嘉乃ちゃんの話に名前があがる人は、私か松原先生か坂本先生がほとんどだったから珍

しいんです。それに、正直助かりました。松原先生は頼りないから、坂本先生が嘉乃ちゃ

んの近くにいてくれて。私も嘉乃ちゃんみたく、周りをあまり信じないタイプだったんで

すけど、坂本先生は好きになりました。もちろん、愛情じゃなくて好感っていう意味で」

少しの間が生じた、沢川の様子が曇っていくのも確認できた。

「・・・でも、今は大嫌いです。自分と同じくらい、先生のことが憎いです」

坂本とは目を合わせないまま、沢川は遠くを見ているように定まらない視線をしていた。

沢川と特別に交流のなかった坂本には、彼女が自分を憎んでる理由が分からなかった。

「・・・どうして、俺のことが憎いんだ？」

「・・・先生は嘉乃ちゃんを救える数少ない人だったのに・・・それをしなかった・・・」

「・・・嘉乃ちゃんは先生に手を差し出したはずなのに・・・先生はその手を掴んであげなかった・・・」

突かれると痛い言葉だった、沢川は瞳を潤ませながら坂本を強く見ている。

「・・・すまない・・・」

そうとしか言えなかった、今さら時間を戻して黒岩を救ってあげることができない。起

こってしまった過去を悔やんでは、それを傷として己に刻まなければならぬ。

「・・・いいんです・・・私だって同じです・・・」

「・・・嘉乃ちゃんを救ってあげられたのに出来なかった・・・だから、自分のことが憎いです・・・」

沢川は自分を痛めるように言う、流した涙の粒は一つ一つ落ちていつていた。

「・・・これ以上、入り込まないでください・・・もう、人が傷つくのを見たくないんです・・・」

そう言うと、沢川は理科教員室を出ていく。結局、彼女と黒岩の

詳しい関係は聞けずじまいとなったままだった。

その2週間後、坂本は主任と2人で居酒屋で飲んでいた。主任から話があると言われ、今日はここを訪れた。主任から唇を重ねられた日から、何度と食事に誘われていたが、仕事や用事という名目で断ったり、食事に行っても適度な距離の会話を坂本は保っていた。

「松原先生と会ったんですね、どうでした？」

「ああ、まだ元気ない様子でした。でも、あれから時間も経ってるから回復してると思います」

松原は明日から学校へ復帰することが決まっていた。始めは事務的な仕事からにし、徐々に生活リズムに慣れていき、授業にも復帰するという流れで。

「それで、さっき言ってた話なんですけど・・・」

「はい」

仕事の話ではなさそうなのは感じていたが、その内容は坂本の予想と大きく違っていた。

「坂本先生・・・黒岩さんの件について、調べてるそうですね」

思わず顔を上げると、主任の不信感を募らせた表情が前にあった。

「・・・どういことですか？」

坂本は何も言えなかった、頭内を巡らせると一つの回答に行き着く。沢川花、彼女が主

任にそのことを言ったんだと思った。彼女以外に、このことを知っている人間はいないはずだから。

「・・・言えませんか？」

「・・・すいません・・・」

そう答えると、主任は1枚の写真を坂本へ差し出す。

「・・・じゃあ、これについて説明してください」

2ヶ月前の画だった、坂本と松原が夜道でキスをした場面の。

「・・・この写真を見るかぎり・・・2人はそういう関係のようですね・・・」

「・・・どうして、こんな写真を？」

「私の家に送られてきました、一昨日のことです」

坂本は、すぐに1つの事柄を思い出した。以前に、坂本と主任がキスをした場面の写真

が松原の自宅に送られてきたことを。

「・・・それって、茶封筒みたいなものに入ってませんでしたか？」

「はい、そうですけど」

同一犯に間違いない、坂本はそう確信していた。

「・・・どうかしましたか？」

坂本は主任に話した、今回と類似した一件が起こっていたことを。

そして、黒岩嘉乃の

教材道具も同じ茶封筒で松原宛に送られていたことも。

「それは・・・その3つの件が全て同じ送信者であるということですか？」

「・・・おそらく」

坂本の言葉に、主任は見たことないほどの動揺を浮かべていた。

何かを知っている、そ

う判断するには充分なほど。

「大丈夫ですか？」

「・・・いえっ・・・はい・・・」

主任の気が落ち着くのを待って、坂本は模索を始める。先の懸念は必要なかった、主任は自身の中の不安を坂本へ話してくれた。

「分かるんです・・・この写真の送信者が」

「・・・本当ですか？」

「確証は何もありませんけど・・・なんとなく特定はつきます」

言った後、主任はまずい顔を浮かべる。余計なことまで話した、そんな言葉の隠れた。

「・・・それは・・・誰ですか？」

主任は坂本と目を合わせたり、外したりしながら思考する。言おうか言うまいか、その

両極で悩むことを続けていた。

「・・・すいません・・・それは言えません・・・」

どうして言えないのか、と訊ねたかったが出来なかった。ただ、その理由は主任の方から言してくれた。

「・・・その人とまだ特定してないのに話すのは無責任です・・・」

「・・・決まってもないのに、勝手に犯人扱いをするのは違ってると思います・・・だから、許してください・・・」

「・・・分かりました」

そう坂本は答える、ここで無理矢理に主任を追及するようなことはやめた。まだまだ時間を掛けてやればいい、その判断が大きな過ちとなる。事は坂本が思ってるより数段早く動き始めていた。

第26話

翌日、坂本は2ヶ月ぶりの出勤になる松原のため、2人で出勤した。群青高校の校門を

抜けると、生徒用下駄箱の前に30～50人の人だかりができていた。土曜日だったが部

活の練習のために登校していた生徒たちは、練習をそっちのけで叫ぶように盛り上がって

いた。異様な雰囲気醸す生徒たちを掻き分けて中に入ると、目を疑うような光景に足が

竦んだ。どこからか持ってきたホワイトボードには「傲慢なヤリマン女」と黒ペンで書か

れ、マグネットで止められた無数の写真の数々は、2ヶ月前に松原ひのきが暴漢たちに襲

われた正にその瞬間を捉えたものだった。口や手や足を押さえられて必死にもがき苦しん

でる姿、顔や身体を暴力で痛めつけられている姿、下着姿で2～3人から身体のいたる部

分を揉まれている姿、裸で見知らぬ男から性行為を強引にされている姿、松原が受けた強

姦の一部始終を捉えた写真が30枚以上もそこに貼られていた。

「・・・誰が・・・こんなことを・・・」

竦んでしまった坂本に対し、松原は反射的にといったように動いた。ホワイトボードを

裏返しにして、自身の写真を全てそこから取り出す。そして、今にも泣き出しそうな顔つ

きで坂本を見遣ると、そのまま校門の方へ走り出した。走り去っていく松原を追いかける

ことは出来なかった、あまりにむごい展開に坂本は頭内が整理しきれなかった。周りで不

道徳に盛り上がる生徒たちの声がどこか遠くから聞こえるやまびこのように思えた。

「坂本先生・・・」

10分ほど立ち竦んでいると、聞こえてきたのは主任の声だった。

「聞きました・・・本当ですか？」

何も言わずに坂本はこうべを垂らす。

「・・・信じられない・・・どうして・・・」

坂本は心臓を掴まれるようにやりきれない気持ちに襲われていた。

「・・・松原先生は？」

「・・・走って学校を出て行きました」

「・・・行き先は？」

「・・・分かりません」

それから、学校にいた教職員が総動員で松原を探しに走り回った。

土曜日だったので2

／3ほどの人数しかいなかったが、とにかく可能性のある場所を手分けして奔走した。前

代未聞の展開に教員たちも訳の分からない状態になり、最悪の展開を口にする者さえいた。

両親にも友人にも連絡はいつておらず、駆けずり回るように教職員が探しても成果はなかった。

坂本も学校から松原の自宅までの、何度と通った道程を隈なく探した。老夫婦の営む喫茶店にも顔を出したが、ここにも彼女はいなかった。そうして息を切らして辿り着いたのは、見通しのつく最後の場所だった。

「・・・松原先生・・・」

坂本の自宅、そこに松原はいた。玄関扉の前で自分の身体を包むようにしてうずくまっ

ている。坂本が声を掛けると、松原はゆっくり屈めていた顔を上げていく。涙の余韻のよ

うに鼻を何度と吸らせながら、泣き腫らした瞳をしていた。

「・・・坂本先生・・・」

坂本の姿を目にすると、松原は止まりかけていた涙を溢れさせた。

「・・・もう・・・どこにも行くところがないんです・・・」

両親や友人にはこんな恥ずかしめを受けた自分を見せられない。

自分の自宅に戻ったら、

とめどない苦しみにやられてしまう。坂本なら、いつも近くにいてくれた坂本ならこんな

自分でも受け止めてくれるかもしれない。そんな小さな希望だけを携えて、松原はここま

で来ていた。

「・・・先生・・・助けて・・・」

身体を震わせながら言う松原に近づき、坂本はそっと抱きしめた。

松原の身体はそれに

反応してぶるぶると震えていく。それでも、坂本は松原を包み続ける。坂本は分かっていた、

た、松原の身体は拒否してても心内はそうではないことを。

松原の心持ちが少し和らぎを見せると、自宅に彼女をあげる。主任へ松原が見つかった

旨を連絡し、ベッドで落ち着かせていた松原の横に座った。彼女は何度となく泣いたり止

んだりを繰り返し、やがて口を開いた。

「・・・どうして・・・私がこんな目に合わないといけないの・・・」

坂本は松原の言葉に対し、ただ聞くだけや落ち着かせようとする

ことを繰り返す。

「……まだ、男の人と付き合ったこともないのに……キスも先生と1回しかしてないのに……」

「……初めてのエッチがどうして……あんなことで……」

「……あんなおぞましい画がこの先ずっと頭から離れないと思うと……もう、気が振れてしまいそうになるんです……」

自分をコントロールできず、松原は壊れるように泣き続ける。坂本はどうすればいいか悩んだが、彼女の身体を包み込むことに決めた。松原の頭に記憶された過去に新しいものを上塗りしてしまえば、下になった記憶は彼女の中で薄れるかもしれないという微かな希望で。

「……松原先生……」

髪型も洋服も気持ちも乱れていた松原の視線がこちらに来ると、その唇に唇を乗せる。

「……いいですか?……」

一度唇を離して確認の言葉を発すると、松原の方から強く唇を合わせてくる。幾多の涙が滲みきった塩辛い松原の唇に触れながら、彼女の衣服を脱がし、自分の衣服も脱ぐ。松原の外見よりも発達した身体に触れているときも、彼女は泣いていた。きっと、2ヶ月前の強姦のことを思い出しているのだろう。その苦しみを我慢しながら、唇をグッと噛み締めていた。

そして、その沸点は最後の瞬間に振り切れてしまう。坂本が松原の局部に触れると、彼

女は嫌悪という意味で過度に反応した。坂本もなんとかしたいと、何度か時間を置いて試

みたがどうしても彼女は過敏に拒否反応を示した。当然、松原の心内自体は坂本に最後まで

で愛してもらいたがっている。それがこの上ない幸せ、と誰よりも分かっている。でも、

身体がそれを受け付けなかった。5回ほどの失敗で、松原は己の中の線が切れてしまった。

「……ごめんなさい……」

「……ごめんなさい……私のせいで……」

坂本はなんとか宥めようとしたが、松原は完全に壊れてしまった。のたうちまわるよう

に泣き叫び、自分を見失った。

「……もう嫌だ！……こんなの、嫌だよお！……」

「……なんでよ！……なんで、私だけなのよお！……」

「……死なせてよ！……お願いだから、死なせてよお！……」

自分を調節できない幼児のように自己を崩壊することを続け、やがて失神してしまう。

そのまま救急車で病院に運ばれ、事は一時的に落ち着いた。

ただ、それはあくまで一時的にだった。翌日の日曜日、病院を訪れたが松原は面会謝絶

になっていた。心身の不安定が原因だが、坂本はおろか、気が気でなく心配して上京して

きた両親にさえ会いたくないと拒否をした。その翌日の月曜日、学校終わりで主任と病院

を訪れると坂本だけが面会を許される。病室の前にいた、未だに娘と面会できていない松

原の両親を横に通り返け、病室に入ると彼女は窓外を力ない眼で見ている。坂本の方へ振

り向くと、松原は涙を流した。死んだような瞳だった、そんな目から感情の起伏による涙が出るのかと疑いたくなるほどに。体力的にも弱ってるように見え、一昨日から何も口にしていないらしい。彼女からの言を待っていたが、彼女からは何も発しなかった。だから、坂本も何も発しなかった。何の言もないまま、1時間の時が流れる。坂本は松原を見続けていた、松原は視線を合わせたり、合わせなかったり続けた。消灯の時間と看護婦に促され、坂本は病室を後にする。病室の扉を閉めるとき、死んだような瞳で自分を見ていた松原の姿がやけに心に残った。その日の夜半、松原は5階の病室の窓から飛び降りた。

第27話

松原のお通夜は彼女の実家で行われたため、校長と教頭だけが学校側の代表として出席

した。坂本は彼女の葬儀に立ち会えなかったのを悔やみはしなかった。行ったとしても、

まともな精神状態で彼女の前になどいられないだろうから。

「坂本先生、大丈夫ですか？」

「大丈夫ですよ、心配しないでください」

そう学校では気丈に振る舞ったが、その心中は周囲にも伝わっていた。主任も、坂本に

大事な話があると誘おうとするのを今日のところは止めにした。

学校が終わり、自宅に戻ると一挙に悲しみが溢れた。1人きりになると、孤独という孤

独が群をなして押し寄せては坂本を苦しめる。どうして、こうなってしまったのか。成海

ミルコと黒岩嘉乃を失って、何故に松原を救ってやることが出来なかったのか。何がなん

だか分からなくなる、自分がどうすればいいのかが。

大挙してくる悲しみに明け暮れていると、インターホンの音が部屋に響く。21時をま

わったところだった、外は寒風ですっかり冷えきっている時間帯だ。誰が来たのか推察で

きないまま扉を開くと、沢川花がそこに立っていた。

「・・・先生・・・」

泣き顔の坂本に沢川は少したじろぐような様子を見せる。

「・・・どうした?・・・」

坂本が言を発すると、沢川はその言葉で気を戻す。

「・・・入れてください・・・」

「・・・話します・・・黒岩さんのこと、全部・・・」

坂本は心内を窄ませつつ、沢川を部屋にあげた。何か飲むかと聞くと、何もいりません

と沢川は言う。2人はリビングのローテーブルに向かい合うように座り、沢川が開口した。

「先に言っておきます、私はまだ坂本先生のが嫌いです」

「嘉乃ちゃんを助けてくれなかった先生が自分と同じくらい嫌いです」

坂本は鼻を吸りながら、沢川の並べる言葉をただ聞いている。

「でも・・・もう、誰も傷ついてほしくない」

「こんな間違ってる、悪いことしてない人たちが犠牲になっていくなんて」

「・・・ただ、私じゃ解決はできません・・・だから、坂本先生に託します・・・」

沢川 of 言葉以外に何の音も生じない部屋は、やけに殺伐として静かだった。

群青高校の1年1組で同じクラスになった沢川と黒岩嘉乃は友達になった。性格も合う、

気も合う、話も合う、すぐに2人は心を打ち解ける仲になれた。

「でも、嘉乃ちゃんと私は1つだけ大きく違うところがありました。私は気の合わない人

とでも無難な自分を取り繕うことができたけど、嘉乃ちゃんは自分の殻に閉じこもったら

抜け出せない子でした。周りとうまく口を合わせればいいのと思いましたけど、無理な

んです。引っ込み思案だからとか、恥ずかしいから出来ないんじゃないんです。嘉乃ちゃん

んはそれをする術が身体に備わってないんです、根本的に不可能だったんです」

「だから、嘉乃ちゃんはクラスの中で浮いた存在になりました。私はそれでもなるべく嘉

乃ちゃんの近くにしようと思いましたけど、周りの女子たちに「あの子の近くにいるの止め

なよ」って言われるようになって。私は周りの子たちともうまく取り繕っていかないと

思ってたので、嘉乃ちゃんへの対応の仕方に悩むようになりました」

「もちろん、嘉乃ちゃんのことは大好きです。クラスメイトとどちらを取るんだって聞か

れれば、迷わず嘉乃ちゃんって答えます。ただ、これから続く高校生活の中で浮いた存在

になってしまうのに危惧を覚えました。クラスメイトと嘉乃ちゃんの間で、なんとかうま

くやれる方法はないのかなって考えました」

「・・・浮かびませんでした、私には知恵が足りなかったみたいです。そう軽い失望感に

浸ってたら、嘉乃ちゃんの方から助け舟を出してくれました。花ちゃんの気持ちはすっご

く嬉しいよ、私のためにいろいろ考えてくれてありがとう、私は1人でも耐えられるから

大丈夫、中学のときはずっとそうしてきたから、って」

沢川の瞳から涙が流れる、その声も次第に細くなっていく。

「・・・私はずるい人間でした、嘉乃ちゃんの助け舟を有りがたいと思って受けました。

それから、私は学校では嘉乃ちゃんとあまり関わらないようにしました。2人きりの場面

だったり、他の人の気が2人に向いてないときに接触する程度に。それも狡猾なものです、

そういうときだけ良い子ぶったように近寄るなんて卑怯なやり方です。学校ではクラスメ

イトの言う嘉乃ちゃんの悪口に乗って、嘉乃ちゃんといるときはそのクラスメイトの話を

面白おかしく言うんです。調子がいいにも程がありました、自分でもそれは分かってます。

そんな狡賢い私なのに、嘉乃ちゃんは悪口の一つも言わずに付き合ってくれました」

「部活が終わると、いつも嘉乃ちゃんと待ち合わせをしてました。毎日、学校から500

m先の図書館で。塾のある日とクラスメイトから誘われた日は行けなかったので、嘉乃ち

ゃんはそこで本を読んでから帰ってたそうです。そこで一緒になると、私たちはいつもの

2人の関係に戻るんです。気兼ねのいらぬ、素の自分を出せる友人関係に。そこが私に

とっての憩いの場で、学校での気遣いで溜まったストレスはそこで全部発散できました。

嘉乃ちゃんといられる時間は、なにより大切に愛しいと思えたんです」

坂本は引き込まれるように沢川の話に耳を傾けていく。

「その関係でも充分だったのに・・・それさえも奪われていきました。5月に入っただけ

いに、嘉乃ちゃんへのいじめが始まったんです。最初は1人が始めたことでした、内容も

子供だまし程度の。それが次第に繁殖するように広がっていきまして、1人また1人って

増えていった。元々、嘉乃ちゃんは性格的にそういう対象になりやすかったのは事実です。

それが1人が始めてしまったことによって、みんなに伝染していき

ました」

「・・・私は逃げました、嘉乃ちゃんからも、クラスメイトからも嘉乃ちゃんがいじめ

られてるのに、それを止めてと言う勇気がありませんでした。嘉乃ちゃんをいじめてる、

クラスメイトに加担することもしませんでした。どっちつかずを決め込んで、いじめの現

場があると避けるようにしていました。そして、放課後に嘉乃ちゃんと2人になると、「大

丈夫？」「ごめんね、何もしてあげられなくて」って優しい言葉を掛けるんです。それでも、

嘉乃ちゃんは「大丈夫だよ」「私のことは気にしないで」って、私に言ってくれます。私は

1番汚い人間だったのかもしれませんが、いじめをしてるクラスメイトたちよりも」

沢川の涙は止まることなく流れる、瞳は焦点の定まらない視線をしていた。

そして、沢川花は黒岩を自殺へ追い込んだ真相へ話を進める。

「嘉乃ちゃんへのいじめは、精神的に傷を負わせるものがほとんどでした。言葉の暴力、

教材道具を隠したり、落書きしたり、そういうものでした。多分、いじめてる人たちも深

いところまで手を掛ける勇気が無かったんだと思います」

「ある日、それが変わりました。体育の授業で着替えてるとき、嘉乃ちゃんの肩に痣があ

るのを見ました。後々で聞いてみたら、いじめられてるときにロッカーに身体を叩きつけ

られたと聞きました。嘉乃ちゃんはたまたまだからって言ってたけど、それは違いました。

1週間くらい後、嘉乃ちゃんが胸のあたりを押さえてたのを見て、おかしいと思って半ば強引にそこを見せてもらったら、そこにも大きな痣がありました。それから、事あるごと

とに身体の傷や痣が増えていったんです。それで、嘉乃ちゃんを聞いたでしたら、ある1

人の生徒にやられてると言われました」

「・・・ある1人の生徒？」

「因縁をつけられるように、いきなり暴力を振るわれるようになったみたいで。手加減な

しで殴ったり、蹴ったり、カッターで身体を切ってきたり。他にもありとあらゆるいじめ

を受けて、身体のいたるところに傷跡が残ってました。それ以外にも、クラスメイトから

精神的苦痛を味わわれる毎日で。嘉乃ちゃんの身体が悲鳴を上げるまで、そう時間は掛

かりませんでした。そんなときでした、坂本先生が群青高校に赴任してきたのは」

「先生が来てから、嘉乃ちゃんにほんの少しだけ元気が戻ったんです。もうダメかもしれ

ない、っていうところから這い上がれたんです。私にとって、先生は救いでした。私には

もう手を差し出してあげられないところに、先生は出してくれたんです」

「・・・俺が？」

「もちろん、先生にその意識はないですけど。先生を好きになつて、嘉乃ちゃんいま

た生きる喜びを取り戻せました。私も出来るかぎり、嘉乃ちゃんの近くにいてあげました、

それでも放課後ですけど」

「ただ、それとは関係ないように、嘉乃ちゃんへのいじめは加速していきました。クラス

メイトからも、その1人の生徒からも、毎日毎日いじめを受けて、嘉乃ちゃんは精神的にも肉体的にももう限界というところまで陥ってしまいました」

「そのとき、嘉乃ちゃんは先生のところに行きました。助けを求めに、私のことを助けてくださいって乞うために」

それが・・・黒岩が亡くなる前の数日間の、彼女のあの行動ということか。

「・・・先生はそれをしませんでした、嘉乃ちゃんを助けてくれませんでした」

「・・・先生はそれを出来る、数少ない人だったのに」
すまないと沈痛に謝ると、いいんですと沢川は言う。

「さっきも言ったように、私も先生と同じです。私は嘉乃ちゃんにとって、最後の結び繋がれた線だったんです。それなのに・・・私はそれを自分で切り

ました」
「嘉乃ちゃんが生きていた最後の日、昼休みにクラスメイトからいじめを受けてました。

私が用事を済ませて教室に帰ると、ちょうどその最中だったんです。数人からいじめを受け、

け、いつものように困った顔を浮かべてたら、嘉乃ちゃんは教室に戻ってきた私を見て「助

けて」っていう顔をしました。これまで、嘉乃ちゃんからそうしてきたことは一度もありませんでした。私に気を遣って、私がそこに関わることをないよう

にしてくれてたんです。
そんな嘉乃ちゃんが初めて救いを求めてきました。なのに・・・なのに、私は嘉乃ちゃん

と合った目線をとっさに逸りました。それが最後でした、最後の嘉乃ちゃんを助けてあげられる場面でした」

「それで・・・黒岩は自ら命を絶ったのか」

「嘉乃ちゃんが自殺したのを聞いて、取り返しのつかないことをしたと思いました。私が

勇気を出していれば、と何度も悔やみました。泣いても、泣いても、胸の痛みは取れませ

ん。きつと・・・この先、ずっと続くんだと思います。でも、それは当然のことなんです。

私は嘉乃ちゃんを裏切ったんです、このぐらいの報いを受けるのは当然です。坂本先生の

ことを恨んでるのも、もしかしたら間違いのかもしれません。本当は悪いのは全て私で、

そこから逃げたくて人に責任を分割してるのかもしれませんが」

それが沢川花からの黒岩嘉乃が自殺へ至った道筋の話だった。

少し時間を置いた、沢川の気持ちを一旦落ち着かせるために。彼女の呼吸が平坦になっていくのを待って、坂本は話の続きを始める。

「俺も一緒だ、黒岩を救ってやれなかったのを後悔してる。俺だけじゃない、黒岩の家族

も、松原先生も気づいてやれなかったことに悔やんでる。だから、松原先生と一緒に真相

を突き止めるために動くことを決めた。それで・・・松原先生も失くしてしまっただ。

正直、迷ってるのが素直な気持ちだ。これ以上、首をつっこんでいいのか。また、他の誰

かを傷つけることにならないかって」

「・・・解決してください、坂本先生が・・・嘉乃ちゃんのために・

・松原先生のため
に・・・」

沢川は坂本と視線を強く合わせ、話の最後を切り出した。

「・・・3組の・・・直浦東沙です・・・」

「・・・あいつが・・・嘉乃ちゃんをいじめた主犯です・・・」

「・・・直浦が・・・黒岩を？」

直浦東沙、真面目で勉強も出来て笑顔のたえない優しい生徒という印象の。あの直浦

が・・・黒岩をいじめ、自殺へ追い込んだ主犯なのか。

「信じられないと思います、あいつの上辺しか知らない人たちには。私は中学が同じだったから分かるんです、あいつの裏の顔は凶気です。中学時代も陰に隠れて、同級生をいじ

めてました。そのときはまだ、精神的苦痛を与えるレベルのものでしたけど。高校に入っ

てから、エスカレーターするように嘉乃ちゃんを痛めつけてはストレスを解消させていくよ

うになりました」

どうして・・・直浦はそんなことを。

「先生、お願いします。いじめを解決して、嘉乃ちゃんがいても大丈夫な学校にしてください」

さい。もう、無意味な悲しみが起きないようにしてください」

分かったよと沢川を宥め、坂本は自身に新たに点った思いを確認した。

第28話

翌日の放課後、坂本は主任とコーヒーストアにいた。直浦東沙を質すため、担任である

主任にも一報を告げておくために。沢川花の名前は出さず、直浦が黒岩をいじめていた事

実を伝えると、主任は坂本の話を受け入れがたい様相を浮かべていた。

「・・・そんな・・・直浦くんが・・・」

そう落胆しつつ、その事実を否定することはしなかった。主任が昨日に坂本にしようと

していた話が直浦のことだったから。松原の自殺によって、主任も自身の内に留めておい

た事実を打ち明けることに決めていた。

「先日にお話ししていた、例の茶封筒の件なんですが」

黒岩のボロボロの教材道具、坂本と主任の写真、坂本と松原の写真、の3つがおさめら

れていた茶封筒。

「その送信者が私には分かったと言いましたが・・・おそらく、直浦くんだと思います」

浮遊していた幾つかの点が線となって結び繋がれる。

「それは・・・どうして、直浦だと分かったんですか？」

「写真です、正確には坂本先生と私の写真が松原先生のところに届いたというところで」

主任は気を改めるように一つ間を置く。

「・・・好かれてるんです、私は直浦くんに。4月のうちに彼からそういう感情があると

告げられ、それから毎日のように帰り道に直浦くんが私の後を付いて来るようになりまし

た。一定以上の距離は保ったまま、私が何をしてるのかを見たり、写真に撮ったりして。

でも、彼自身に悪気はないんです。それで私を脅したりすることもないし、私に危害を加えることもない。私を遠くから見ていることが、彼にとっての趣味になってるだけなんです」

「何も言わなかったんですか、主任は」

「もちろん、気になって仕方ありませんでしたけど、私はそれを許すことにしました。直

浦くんにとって、それが自分の感情の捌け口になってるんです。黒岩さんにとって、坂本

先生がそれであったように。私がそれを切ってはいけないんです、坂本先生が黒岩さんと

のそれを切ってしまったように。きっと、私が彼を見放してしまったら、黒岩さんと同じ

ことになってしまう気がするんです。だから、彼を見放すことはできません」

そう言うと、主任も付いて行くことを条件に坂本の頼みを了承してくれた。

坂本は主任とともに、直浦東沙の自宅を訪れる。閑静な一戸建ての佇まいに等しいよう

に、その近辺も静けさが漂っていた。インターホンを鳴らすと、直浦本人が玄関扉を開く。

両親はこの時間にも帰宅していないらしく、家には彼1人しかいなかった。直浦は驚いた

顔色を浮かべたが、主任と坂本を自分の部屋におとした。

「・・・どうしたんですか？」

直浦くん、と主任は言い、言を進ませていった。坂本が話した黒

岩へのいじめ、主任が

話した茶封筒の送信者について。

「・・・どうして・・・誰かがそれを喋ったんですか？」

直浦は下を向いたまま、主任へ言葉を発する。

「違うわ、坂本先生と松原先生が調べたのよ」

「・・・でも・・・誰かが言わないと調べがつかないじゃないですか」

「誰が言ったかを聞いてどうするの、その子をいじめるっていうの？」

「・・・どうして、そんなこと言うんですか・・・藤野先生は僕の手を信じてくれないんですか？」

「あなたの言う真実は信じるわ。でも、あなたの言う嘘は信じないわ」

「先生・・・」

主任と目を合わせては、下を向くことを直浦は繰り返す。

「どうして・・・どうして、黒岩さんのことをいじめたりしたの？」

主任は威厳に満ちたように強い言葉で質す、それに直浦は萎縮を憶えていた。直浦は涙

目を見せながら、制服のシャツを上げていく。そこに映ったのは、

黒岩の身体よりも酷く

浮き出た傷や痣の数々だった。腫れ上がったもの、刃物で切られたもの、数えきれないほ

どの赤い跡だった。

「・・・どうしたの・・・これは・・・」

主任と坂本は目を覆いたくなるのを堪えながら、痛々しい直浦の身体を見ている。

「・・・中学生になったくらいでした・・・父親の会社の事業がうまくいかなくなってきて・・・」

「再建のためと手を出した新しい事業にも失敗し、風向きは悪化を辿る一方で。全てが思うようにいかなくなつて、父親は毎日のように夜遅くまでの残業を繰り返して。苛々を募らせて帰ってきては、僕に暴力を奮うようになりました。最初は僕も抵抗したんですけど、

「誰のおかげで暮らせてると思ってるんだ！」って余計に殴られて。僕は何もしてないの

に、暴力にあう毎日に不条理を憶えました。でも、父親には抵抗できませんでした。母親

は「家族のために骨身を削る思いをしてるのはお父さんだから」と暴力を容認して、僕自

身も腕つぶしでは勝てないから抵抗しても余計に暴力が重なるだけだし。家には僕の逃げ

場がありませんでした、だから僕はそれを外に向けたんです。学校の中でも特に弱そうな、

何をされても反攻しないやつをターゲットにしていじめるようになりました。日に日に加

速していく父親からの暴力に比例するように、学校での僕のいじめも大きなものとなって

いった。もう、自分でも止められませんでした。身体はどこかに罪悪感はあるとあるん

です、でもそれに勝る憤りがありました。自分はしてはいけないことをしてると感じて

んです、ただ自分の中に溜まった怒りを吐き出さないと僕が壊れてしまうから・・・き

つと、父親も同じなんだと思います。僕はいつも憤りを憶えてる父親と同じことをしてるんです」

直浦は瞳に涙を溜めながら、主任に訴えるように話す。

「高校に入学して、僕は新しいターゲットを探しました。そこで見つけたのが黒岩さんでした。彼女は僕にとって恰好の存在感を放ってて、すぐに新しい標的に決めました。最初は精神的ないじめをしていました、1組の連中がやってるのと同じような。・・・いえ、その先もそれしかしないつもりでした」

直浦は瞼に溜まった涙を一つ一つと流していく。

「じゃあ・・・どうして、黒岩さんに暴力を振るうようになったの？」

「見たんです・・・黒岩さんが藤野先生のことを叩いていたのを。多分、僕が先生に気が

あるのを知っていて、僕から受けて積もり積もったストレスを先生に吐き出したんだと思います」

「僕はそれを見たとき、許せないと思いました。憎悪が込み上げてきて、それまでなんと

か自分の中で歯止めをかけていた一線を超えさせました。それ以来、彼女には暴力も含め

たありとあらゆることをしました」

「・・・黒岩さんが私に手を出したから、そんなことをしたの？」

「・・・藤野先生に手上げた罰なんだ、そう自分を納得させるようにしてたのかもしれない」

主任に手を上げた1回の暴力で、黒岩は死に追い込まれなければならなかった。

そんな不条理なことがあっていいのか・・・彼女のただ一度の暴力で。

「・・・松原先生のことあなたがやったの？」

直浦は鼻を吸り、こうべを垂らす。

「・・・どうして・・・どうして、松原先生まで・・・」

「・・・許せなかったんです・・・坂本先生のことか・・・」

坂本は急に上がった自分の名前に吃驚を隠せなかった。

「放課後に藤野先生の後ろを付いていったら、ある日に先生は坂本先生と一緒にいました」

た。そして、食事をした後に2人はキスをしていました」

坂本は主任と目を合わせる、主任からされたキス、あのときも直浦は近くにいた。

「僕の藤野先生に何をするんだ、と怒りが振れました。汚らしい大人め、目に物を言わ

せてやる、と。だから、坂本先生と親しい関係だった松原先生をどうにかしてやろうと決めました」

「・・・それで・・・松原先生にあんなことを・・・」

松原の自宅に主任との写真を送り、主任の自宅に松原との写真を送り、暴漢たちに松原

を襲わせ、学校の下駄箱前にその写真を貼ったのも、全て直浦の仕業だった。坂本は衝動的に直浦を殴ろうとしたが、なんとか思いとどまらせる。

そこで一時の間があり、それを縫うように主任が口を開く。

「・・・一つ、聞いてもいい？」

直浦が坂本に向けていた目線が主任の方へ移る。

「・・・黒岩さんと松原先生が命を絶ったとき、どう思った？」

直浦はしばらく考えるようにして、困惑した表情で答えた。

「・・・何とも思いませんでした・・・」

「・・・何ともって・・・全く？・・・」

「・・・次のターゲットを探さないと、とぐらいにしか・・・」

直浦は自分で自分をコントロール出来ず、複雑に絡む感情に当惑していた。主任は直浦

の震える両手を掴み、直浦の頬を思いきりの強さで平手で殴った。
「・・・この手はね、人を傷つけるためにあるんじゃないの。傷ついた人がいたとき、救ってあげるためにあるのよ」

「でも、使い方を間違えれば、人を殺めることだって出来る凶器になる。直浦くんは使い方間違えてしまったの、直浦くんの周りにはそれを教えてあげる人がいなかったから」

そう言い、主任は泣きながら直浦を強く抱きしめた。直浦も一度は止んだ涙を堪えきれずにまた流していた。その部屋は悔しさで溢れていた、それぞれが自身や外界へ抱いた感情が詰まっていた。

こうして、黒岩嘉乃に対するいじめの真相は全てが明らかになった。

「直浦くんは加害者であって被害者でもあります。主犯はもちろん直浦くんです、ただそれだけではありません。直浦くんの周りにいる人間が彼をそうさせてしまったんです。父親から家庭内暴力を受けなければ、その憤りを増大させなければ、今回のようなことはなかったはず。今回のことも、それ以外のあらゆる少年犯罪も、諸悪の根源は大人にあるんです。大人たちが子供をきちんと見てあげないから、こんなことになってしまいうんです」

直浦の家からの帰り道、主任の言葉を耳にしながら坂本は胸を痛める。成海ミルコ、黒岩嘉乃、松原ひのき、彼女たちにしてしまった自分の罪に対して。

「僕もその1人です、僕は黒岩も松原先生も救えたのに出来なかった」

「自分を責めないでください、坂本先生は今回のことに正面きって向かい合ったじゃないですか。他の、見て見ぬふりをしている大人に比べれば、数倍マシです。そのままでもいいんです、その気持ちを忘れないでください」

それでも、坂本は心内を納得させることは出来なかった。自分の罪が胸の内に存在する現実がそこにあるのが事実だったから。

「主任、これからどうするつもりですか？」

「・・・私も向き合います、直浦くんと。彼は今、必死でもがいてるんです。この樹海から抜け出したい、と思って。彼がきちんと更生できるまで、私も側にいたいと思います。」

坂本先生と黒岩さんと同じようになってはいけない、だから」

「・・・強いですね、主任は」

「その代わり、私が弱つてるときは相談に乗ってもらってもいいですか？」

坂本が顔を上げると、主任は口角をクッと上げる。

「大丈夫ですよ、坂本先生を襲ったりしませんから」

そう笑みを見せると、坂本もフツと笑顔を見せた。

帰りがけ、坂本は老夫婦の営むいつもの喫茶店を訪れた。すでにラストオーダーの時間を過ぎていたが、お婆さんはどうぞと中へ入れてくれた。奥の席に座ると、お婆さんがこ

ちらへやってくる。

「聞いたよ、本当に大変だったねえ」

坂本の心中を察するように、「ブラックでいいね？」と言ってレ

ジの方へと進んでいく。

坂本はバッグから2つの手紙を取り出し、その中身を開いた。1つは黒岩嘉乃の遺書だった。足がつくのを恐れ、教室の彼女の机の中にあつたものを直浦が盗んだものだ。四つ折りになった紙を開くと、黒岩が命を絶つ前に綴られた文章が並べられていた。

「最初に謝らせてください、ごめんなさい。こんなことをしたら、悲しむ人がいるのは分かっているのに。でも、分かってください。もう限界なんです、これ以上辛くなったら私が私じゃなくなってしまうんです。誰かに当たってしまいます、誰かに暴力を振るってしまいます、誰かを傷つけてしまいます。私は誰も傷つけたくありません、そんなことをする自分は自分じゃありません。自分が自分でなくなるのなら、その人生に意味はありません。自分の人格を失って、人を痛めつけることを憶えてまで、生きたくなんかありません。これは私の勝手だということも分かってます。でも、私の最後のわがままを聞いてください、お願いします。最後に、これまで私に優しく手を差し伸べてくれた人たちに感謝しています。こんな、取り得もない、どうしようもない私なんかに優しくしてくれてありがとう。さようなら、ありがとう、ごめんなさい」

黒岩は最後まで誰かのせいにはしなかった。暴力を嫌い、平和を願う、彼女の中の「自分」を貫いていた。強かった、黒岩は本当は誰よりも強い人間だったのかもしれない。

もう一つの手紙は、松原ひのきからのものだった。今日、朝にポストを開くと、彼女の名前でその手紙は送られてきていた。彼女が亡くなる前に書き記した手紙には、彼女と面会したときには伝えられなかった思いが綴られていた。

「今日はすいませんでした、せっかく来てくれたのに何も話せなくて。自分で自分の感情

がうまく調節できなくて、激しい起伏を繰り返してるんです。だから、手紙で坂本先生へ

の気持ちを伝えます。好きです、大好きです。これまで、こんなに誰かのことを好きにな

れたことはありません。最初は変な人だと思ったんですけど、次第に先生の影のあるところ

に惹かれていきました。手を差し伸べてくれたり、優しくしてくれたりしつつ、何か過

去を背負って。その影に触れたい、私が救い出してあげたい、そう思いました。・・・私、

何言ってるんでしょうね。お前なんかになんかそんなところズケズケ入られても困るだけだ、っ

てことでももんね。迷惑ですよ、強姦されたり、笑いにされるような女に好かれても。

坂本先生にはもっと綺麗で知的な女性の方がきつとお似合いなんだと思います。私はどう

せ治ったところであの学校にはいられないし、他へ赴任してもそこでまたこの噂が広まれ

ば同じことだし、もう教師でいることは無理だと思ってます。・・・何でだろうな。私は生

徒たちと楽しく優しく、ときに厳しく、本当の親子のような関係で向き合えるお母さんの

ような先生になりたかったのに……。ただ、それだけだったのに・

さい、辛気臭い話しちゃって。明るい空気にしましょう、パツと。

坂本先生、先生にキス

してもらったこと、本当に嬉しかったんです。あんなことされたことないし、なんていう

か……。すごく温かみがあつて。私のことをそれぐらい真剣に考えてくれる人がいるんだ

っていうのが嬉しかったんです。私はもうすぐいなくなっちゃうけれど、それは全てが失

望に塗られて身を失くすっていうのとは違って。坂本先生や両親や友達とかの温かみや心

地良さにくるまれて、お母さんに抱かれて安息の眠りにつく、みたいな感覚なんです。決

して、この世の何もかもが嫌になったとか、この世の誰も彼もが嫌いになったとか、そう

いうんじゃないんです。だから、先生は自分のことを責めたりはしないでください。最後

に、先生に一つお願いがあります。坂本先生はいつまでもそのままでいてください。私が

好きになった、私の大好きな先生のままで。短い間でしたけど、坂本先生との思い出は忘

れません、ありがとうございます」

読んでる最中から涙が溢れていた、それは読み終えてからも当分は止まることはなかつ

た。成海ミルコを失くしたときと同じように、絶え間ない愛しさと悲しさで胸が張り裂け

そうになった。

「……。ブラックとココア、お持ちしました」

涙でしわくちゃんになった顔を上げると、お婆さんがいた。僕の前

にブラックコーヒー、

手前の席のところにココアを置く。

「・・・泣きなさい、今は。涙がなくなるまで泣きなさいな、私らに遠慮なんかいらない

よ。でもね、ここで泣ききったら、もうくよくよするんじゃないよ。あんたは現実を生き

てるんだから、いつまでも過去にすがっちゃいけない。今、周りに仲良くしてくれる人が

いるなら、その人と仲良くしなさい。今、周りに関わってくれる人がいるなら、その人を

大切にしなさい。今、周りに助けを求めている人がいるなら、その人を救ってあげなさい。

前を向いて歩きなさい、横っちょ向いてたら知らないうちに道から外れるよ」

お婆さんの言葉は何より胸に沁みた、坂本はそこで思いきり泣き続けた。

第29話

黒岩嘉乃に対するいじめの問題は解決に至ったが、まだまだやることは残されていた。

料理をした後の面倒くさい後片付けのように、社会的な追及が行われなければならない。

黒岩嘉乃の両親は直浦東沙とその両親と市に対しての訴訟を起こした。直浦側の全面的な

謝罪もあり、この裁判は損害賠償の支払いで認容される。松原ひのきの両親も直浦東沙と

その両親、彼女を強姦した暴漢たちに対しての訴訟を起こした。直浦側は全面的に謝罪し

たが、暴漢たちは今も容疑を一切否認し続けている。現場を目撃した人物もおらず、被害

者の松原もいないため、この裁判は長期戦に亘ることになる。

1年の月日が過ぎていた、訪れる秋色と同じように坂本の心はまだ晴れきらない。この

1年、坂本は主任とともに先の2つの裁判のために動き続けた。主任は加害者である直浦

側、坂本は被害者である黒岩と松原の両親の力になった。共に今回の事件から早く立ち直

りたいという思いでの裁判だったので、双方とも前向きな思いで、事は淡々といった具合

に進行した。直浦家も事の重要さを重んじて、親子関係の見直しに努力していた。今すぐ

とはいかずとも、時間をかけて自然な形で戻していこうと主任も手助けをしていた。学校

側も今回の一件の重要性を重く受け止め、いじめ対策の強化を掲げ

る。二度とこんなことが起こらないよう、教師と生徒、そして生徒同士の関係性の良化へ動いた。1年をかけて、1つ1つの事が前進していった。

秋口のとある日、坂本に1通の手紙が届く。ピンクのC5サイズの洋封筒、封を開けずとも坂本には差出人は分かった。

「せんせえ、こんにちは。あきですね、ちょっとさむいです。きょうはおうたをうたいました、きのうはおえかきをしました。おうたもおえかきもたのしかったですよ、でもあたしはさみしいの。せんせえにあえなくてさみしいの、せんせえはいつきでくれるのかなあ。お

とといはあれいせんせえがきてくれたの、いっぱいはなしてくれたよ。あれいせんせえにせんせえはいつきてくれるのってきいたら、いいこにしてればきてくれるよっていった。

あたし、せんせえにあいたいから、もっといいこになる。だから、なるべくはやくあいにきてね。だいすきなせんせえへ、なるみみるこ」

成海ミルコからの手紙は1週間に1通、それ以上にもそれ以下にもなることなく届く。

きっと、彼女の中では1週間に1回のイベントとして組み込まれるものなのだろう。彼

女のもとには、亜鈴先生が今も1ヶ月に1〜2回のペースで訪れてくれている。そして、

彼女の今現在の状態を坂本に定期的に伝えてくれていた。

成海ミルコは自傷行為を行ってから、17歳の自分自身を喪失した。忌まわしい過去か

ら現実逃避するように、それまでの自分に決別するように。今は5
〜6歳児ほどの知能し
かないらしく、彼女への対応も自動的にその年齢の子供に対するも
のになるそうだ。現在
は19歳になった成海は、大人へと発達する身体と吊り合わない精
神を携えていた。

もういいだろう、坂本は自身の中でそう決断した。1年間、自分
がしてしまった罪に対
して償うために走ってきた。無我夢中だった、ただ罪時を忘れたこ
となど一時もない。こ
れまでもそうだったように、この先もそれは続いてくのだろう。一
生をかけて背負ってい
かなければならない、重い荷物。

「今、周りに助けを求めている人がいるなら、その人を救ってあげな
さい」

1年前に言われた、お婆さんからの言葉をよく思い出す。ようや
く今、その言葉を自分
でする心構えが出来た。

爽やかな秋晴れの日だった、銀杏並木の通りを歩くと心も晴れや
かになる季節だ。それ
に反比例するように吹く風の寒さは身に沁みた、もう次の季節の準
備も始まっているのだ
ろう。坂本は自宅から1時間半ほどの場所にある、フリースクール
を訪れた。事前に連絡
は入れてなかったが、事の経緯を説明すると快く対応してくれた。
すると、40代と思わ
れる女性のスタッフが案内を自ら願ってくれた。話を聞くと、彼
女は成海ミルコと最も

親しく接しているスタッフとのことだ。

「ここは、不登校や中退者といった事情のある子たちのために出来た学校なんです。

絶対的な規則のない、子供たちが伸び伸びと過ごせる時間を提供して、

友だちを作ったり、いろいろと学んだり、自分の居場所を見つけていけるようにします。

年齢の幅も広く、趣味嗜好も全然違う子が集まるので、従来の学校とは違う空間です」

「成海さんはここに来たとき、自分の殻に閉じこもっていました。

私はおろか、誰とも口を聞かず、ただ部屋の隅の方で窓の外の景色を眺めながら一日を過ごすんです。

でも、そういう子もここには少なからず入学してきます。

そういう子たちは時間をかけて、ゆっくりと心の扉を開いていくんです。

2ヶ月ぐらいでしょうか、成海さんもだんだん話をしてくれるようになりました。

今では周りの子たちとも仲良く遊んで、笑顔も取り戻してくれたんですよ」

「坂本先生の話は、毎日彼女から聞かされるんです。

優しいし、格好いいし、温かい人だって、もうとにかく大好きみたいで。

坂本先生の話をしてるときは、特に1番の笑顔を振り撒いてくれるんです」

そう言われると、その女性のスタッフはそこで歩を止める。

ここです、と笑みを見せながら一つの部屋の中を指差した。

部屋の中を見ると、10人ほどの未成年者がゲームやお喋りなど、それぞれの気の赴くままのことに興じている。

成海ミルコは奥にある、窓に面した机で絵を描いていた。

少しサイズの大きい胡桃色のセーターとブラウンのドールパンツで、

縮こまったように背を丸めながら色鉛筆を進ませている。

少しずつ、少しずつ、坂本は彼女に近づいていく。

1年半前、彼女との間に自らが開けてしまった距離を埋めていくように。

一歩ずつ足を進ませるごとに、彼女との楽しかった日々が思い出されていく。

胸が締めつけられそうになる、本当に自分でいいのだろうかと今ごろ自問自答をしている。

ただ、それを振り切るほどに、彼女への愛おしさが溢れてきた。

「・・・成海・・・」

力のない声で名前を呼ぶと、成海は動かしていた右手をぴたりと止めた。

恐る恐るといったように、少しずつ後ろを振り向くと坂本の姿をその瞳に映す。

すぐに成海は泣き出してしまい、そのまま坂本に抱きついた。

「・・・せんせえ・・・せんせえ・・・」

成海は子供のように本意気で泣き続けた、それが余計に坂本の心に強く刺さる。

「・・・なんで・・・きてくれなかったの・・・」

茶髪のロングヘア、艶のある白肌、折れてしまいそうな柔な身体、

その髪触りも肌触りも全てが懐かしかった。

「ごめんな。ちよつと、やらなきやいけないことがあつて」

坂本も涙を流していた、成海から来る想いの大きさに耐えることが出来ずに。

「大丈夫、これからは側にいてやるから」

そう言い、坂本は強く成海を抱きしめる。

それに負けないくらいに、成海も坂本を強く抱きしめていた。

今、坂本に救ってあげられる存在、成海ミルコという恋先。

もう二度と離したりしない、いつまでも、いつまでも。

)
E
N
D
)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9491c/>

摩れた歯車

2011年3月27日16時22分発行